

東方転生神話録

柊南アリス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

普通の高校生であった九条和人はとある事故により死亡してしまっただ。

だがそれは単なる神様のミスであった！ミスの代償である転生のチャンスは彼は一度棒に振った。だが再び転生のチャンスがやってきた！彼のチート過ぎる冒険は今後どのように繰り広げられるのだろうか

※初の小説投稿作品なのでクオリティは期待せずにお楽しみください

目次

転生編

よくある始まりと転生話	1
和人転生するってよ	4
妹ができました	7

都市編

古代ってスゲー	10
創世神、妹と再会する	14
和人が軍に入るようですよ？	17
綿月姉妹が和人に挑むようです。	21
依姫が和人を突然訪問するそうですよ？	27
和人、ルーミアと戦うってよ。	32
和人がルーミアと街中デートするようです	36
和人が2人と再会した後に死阿威するようです	43
和人が再びルーミアと戦って、鬼子母神と会うらしいです	50
和人 v s 鬼子母神	56
キャラ紹介	63
キャラ紹介其の二	66
輝夜との出会いと学年末テスト	69
総隊長だ？バツカジャーノ！	73
最高支配者の兄と、人妖大戦開幕の兆し	76
和人&ルーミア&綿月姉妹 v s 妖怪軍団	80
目が覚めたら二億年後だった。	89
諏訪子思ってたよりもちっちゃいな	92

諏訪編

諏訪子の特訓開始と諏訪大戦勃発の予兆

96

諏訪大戦勃発！

102

洩矢神社壊滅の危機!?

109

死、そして旅立ち

112

聖徳編

雑魚妖怪に出会いすぎる旅

118

聖徳太子が現れた！

122

聖徳宅侵入ミツシヨン

125

v s. 神子とその他諸々

128

物部布都登場と久々の天界へ

132

雅さんゲーム弱くなってね？ルーミアさん戦闘強くなってね？

136

霍青娥出現！

140

霍青娥戦と海外へ

143

海外編

生物内最強 v s. 西大陸最強

147

美鈴の修行と賞金稼ぎ

152

遭遇！スカーレット家

155

紅美鈴 v s. アラン・スカーレット

160

最強に挑む勇敢なる吸血鬼

163

日常とは（哲学）

166

登場！スカーレット姉妹！あと美鈴の就職

173

殲滅！ヴァンパイアハンター！

177

俺は日本に帰ってきたあああああ！

182

4人目の弟子

186

奴らとの再会と、修行開始	189
妹たちとの再会	193
姉弟タツグ vs. 兄と竹取の予兆	198
竹取編	
竹取編始動！再会するは輝夜姫	202
輝夜驚愕!? 和人の難題	207
我、対峙するはフラワーマスター	210
和人死す!?! ルーミアとの再会	216
襲撃！月の民、古き友人との再会	222
月面戦争編とその他	
天魔登場！天狗の山！	234
和人激怒の予感?! 月面戦争勃発！	239
完全勃発！月面蹂躪！	246
月の最強タツグ vs. 最凶	254
幽々子、妖忌との出会い、そして平和	259
我、西行妖と死闘す	263

転生編

よくある始まりと転生話

『何でこんなことになったんだ…』

俺の名前は九条和人だ。突然だが自分がなぜ知らない場所で寝ていたのかわからない。

原因を探すために記憶を辿ってみる。

俺は福島で普通の高校生をしていた。その時はちょうど春休みで街に練り出していた時だった。

『平日の昼間だしそんなに人いないと思ってたけど…時期が時期だから学生多いな』

貯めていたお菓子やらが切れたので、買い足しにとコンビニへ向かっている最中のことだった。

俺が信号待ちをしていると、向こうから小学生四人組がじゃれあいながら俺のほうへ走ってきた。

案の定ぶつかってしまったので、ぶつかってしまった小学生に『大丈夫かくガキ、まわりよくみるよ』と言った。

小学生は「おじさんごめん」と言ってきた。

『おじッ、誰がおじさんだ！』

小「アハハハ」と言いながら信号を渡っていった。

俺はツツコミを入れたせいで反応が遅れてしまったが、小学生が進んでいった信号はまだ赤で、丁度ランプが猛スピードで突っ込んできた。

とつさに小学生を引き戻そうとしたが、勢い余って俺と小学生が入れ替わるような形になってしまった。

ドンッ！

という低くそして重い音とともに激しい衝撃が、俺を襲った。

流れる血によって自分の体が生暖かいぬくもりに包まれた。血が流れているはずなのに痛みを感じなかった。

『俺は…こんなところで死んじまうのか?』まだやりたいことあったのになあと考えていたら視界がぼやけ、意識が朦朧としてきて俺は意識を手放した。

これが原因だろうここは病院かとも思ったが違ったようだ。

「目が覚めたかの?」

知らない声だ。

『あんたは一体…ンでどこどこさ』

「わしは神じゃ『何言ってんだこのガキは』だから神じゃと言っているだろう。」

頭おかしいんじゃないか?小さい頃から厨二病だと後々苦勞するだろうに…

「厨二病じゃないわ!それに儂はこんな成りじゃがおぬしの何十倍は生きておるぞ」

何ッ!つてか俺今声に出したか?

「出したらんかう」

思考が読めるか…こりや認めざるを得ないな

「ようやく信じおったか。手を焼かせるガキじゃ」

『見た目がガキな奴に言われたかねえよ』

「もういいわ…それでな?おぬしに謝らねばならんことがあるんじゃない」

『ほう…してその謝らなければならんこととは?』

「人間の寿命はここ天界で管理されておる。で、だ間違えておぬしの寿命の火を消してしまつたんじゃ!『やっぱか…』分かっておったのか?」

『そりやね?寿命管理の話で、謝るべきことついたらそれぐらいだろ』

「間違えて死なせてしまつたお詫びにと転生の権利が与えられるわけだが…」

『断るぜ』

「理由を聞こうではないか」

『いやー死んでせっかく天界に来たのにすぐに転生って詰まんないじゃん。それに、お前とも知り合えたんだからな』

『限界までここでお前とここで遊ばせてもらうぜ』

「おぬし…」せっかくだから和人って呼んでくれや』わかったぞ。和人よ…儂の友人になってくれんか?」

『もちろんだっただか、さつきからずっと友達だっただ俺は考えてたんだが…間違いだったか?』

『そういやお前って名前なんての?』

「それがないんじやよ」

『よっしゃつけてやる。お前の名は……雅^{みやび}だ!』

「意外にまともじゃった…」

『理由はお前のしゃべり方がなんか「雅」って感じがしたからだ』

「理由が適当じゃったか」

『んじやまあそういうわけで、よろしくな!雅!』

和人転生するってよ

俺こと九条和人はここ天界にて雅の仕事を手伝ったり一緒にゲムしたりしている。

雅「さつさとその書類終わらせてスマ○ラ対戦に勤しもうではないか和人よ」

『お前…俺に書類を丸投げしておいてよく言えるよな…』

雅「仕方ないじやろ！儂がやるより和人がやった方が数倍早いんじゃないから！」

『それは否定しないが…頼むから否定してくれ』おっそうだな』

俺は昔からある特技のようなものがあつた。それは書類を超速で処理できると言うものだった。初めて雅の手伝いした時にあいつが俺の特技に嫉妬してしまい、俺に書類を丸投げするようになった。そういうばここに来て今日で二百年になるのか。

雅「言うのを完全に忘れとつたが…おぬし百年前から神になつてるぞ」

『おぬし!』

「驚きすぎて昔のえになつとるぞ」

『そういう大切な忘れないでくれませんかねえ』

雅「すまんのう、それに神とは言つても半分だけじゃ」

『半人半神ってことか?』

雅「いや…半神半龍じゃ」

『あーもうわかつた大体わかつた。それで俺の神の種類はどこに部類されてんだ?』

雅「破壊神あたりに含まれておるのう、だがそれだけでもないようじゃな」

『それってつまり?』

雅「相当どころか神の中で最も高い地位にあるということじゃな」
『雅の地位は?』「言わすなボケ」アツハイ』

唐突に一番偉い神になつてしまった…「ちなみにもう半分の龍の方も龍神だ」マジですか…

一週間後

最近何故か雅の態度が余所余所しい。ちょっとイラついて来たので怒ってみよう。こんな態度になってしまった要因は大体わかるんだが

『いつまでそこで変な挙動してんだよ、なんかあったんなら教えろよ』
流石にこんな言い方は無かったかな

雅「ツ?!すまん、ちと取り乱しておったわ。今からあることを伝えるぞ... おぬしを転生させねばならなくなってしまうたのじゃ! 『やっぱそんな感じのやつか。早く教えてくれれば良かったのに』 本当にすまんかった」

『わかった。転生すりゃいいんだろ? 「おぬしにとってここでの思い出はつまらないものじゃったか?」んなわけねえだろぶつ飛ばすぞ。ここには絶対に戻ってこれないってわけじゃないんだろ? 戻ってこれないとか言ってるんだったら、俺はそのふざけた幻想をぶち殺す』

雅「フフフ』どうした』いやなに、おぬしらしいなと思っただけじゃ」
『俺らしいだと? そりゃ俺は俺であって俺以外の何者でもないから』
『そういうのはいらないぞ』そうか? まあいいや。』

雅「おぬしがここからいなくなってしまうのは些か寂しいのう『本音は?』嫌じゃく行かないでくれよくおぬしがいなくなってしまうのは耐えられんのじゃく」ソデツカミ涙目ウワメツカイ

なんだこの可愛い生き物は

『俺が転生したら俺のことをたまに天界から見ればいいだろ?』

雅「そうか... これからはそうさせてもらうぞ、転生の準備はできておるか? 『もとより荷物ないです』そうじゃったな。それではお別れだ。」

『違うだろ? こういう時友人との別れに言う言葉は一つだけだ。』

雅「そうか... そうじゃったな!」

それじゃあ

『またな!!』

俺はそう言うのと転生の門に飛び込んだ

『イデデデデ！ 転生ってこんな感じなのか！ クツソ痛てえなんだこれ』

これからどうなっていくことやら

妹ができました

和人だ突然だが俺は今どこにいると思う？

正解は地球に人間が生まれる10億年前の宇宙空間だ。ついでに能力を手に入れたぜ。何故こうなったかは約一時間前に遡る

〜一時間前〜

『イデデデデア！転生ってこんな感じなのか！なんだこれクツソ痛てえ！』

〜数十秒後〜

『やっと治ったかと思ったら真つ暗な空間なんだが…ん？なんか浮いてんなえつと？「和人へ」これ雅からの手紙みたいなもんか』

〜内容〜

「転生時になにが起こるか説明してなくてすまなかった。『全くだぜ』本来転生するときに特点をつけてるんだがおぬしにつけ忘れたから俺が適当にくじ引きで決めたぞ。おぬしの場合は能力がいついてきた。おぬしの能力は「森羅万象あらゆる事象を可能にする程度の能力」じゃ。なかなか強いと思うぞ？あと、おぬしが飛ばされた世界は「東方Project」の世界じゃ。最もそこからはおぬしが動かんからには地球も人も太陽なども作られんがな。おぬしの仕事は今のところ一つじゃ。10億年以内に太陽系を作ることじゃ。頑張っていきてくれよ」

んで現在に至るってわけだ。俺は今能力がどの程度の物なのかを試しているところだ。てか「森羅万象あらゆる事象を可能にする程度の能力」ってチートじゃね？

『とりあえず大体は把握したかなー』

本当に色々と可能にしているようだ。さつきまで空気すらなかった場所を超快適空間にすることができた。便利すぎるだろ
どうやらこの世界には様々な力が存在しているようだ。

全ての人間が持っているものの扱える者は数少ない霊力
妖怪が保有している妖力

全ての神が保有している神力

魔法使いなどが持っている魔力などがあるそうだ。ちなみにこの情報は雅からだ。

とりあえず手始めに“妖力、魔力、神力”を無限化する。

成功したようだ。力がみなぎってくる。続いて霊力にリミッターをつける、常に九割五分ほど抑制している。成功した。さつきより脱力感があるがあまり気にならないな。

『本当に色々できるなこの能力。もしかしてほかに能力を俺につけられるのでは?』

成功してしまった:やっぱチートだわこれ

ちなみに新たにつけた能力は「森羅万象あらゆる物事を司る程度の能力」これは狙ってつけたわけではない。次は「1日経つごとに全ての力が1.5倍される程度の能力」だ

そしてその後俺は精神鍛錬と霊力増加のために瞑想を1日3時間するようにした。前世だと3時間も瞑想できなかつたが、これは神になつたお陰なのか。

雅からのノルマであつた太陽系作りは今取り掛かっている。

能力を使つたら、ポンツつという小気味のいい音とともに太陽系が出来上がった。それと同時に俺に何故か妹ができた。

「お兄ちゃん何かやることない?」

彼女の名は龍華、俺が太陽系を作つたらできた俺の妹だ。

龍華は瞬く間に成長していった。龍華は月夜見、天照、須佐男、伊弉諾、伊弉那美の5人の神を生み出した。全員が俺のことを兄関連の呼び名で呼ぶから違和感を感じる。

『龍華ーお前にちよつと話があるんだ』

龍華「どうしたの?お兄ちゃん」

『お前は本当にいい娘に成長してくれた。俺はそんなお前に世界の管理を任せたい。いいか?』

龍華「いいよ。私、ちよつとこういうのやってみたかつたんだよね」

好奇心旺盛でいいことだ

須佐男「兄様、私に剣を教えてください!」

『いいぞーとりあえず毎日2時間瞑想するんだ。心を無にできるまでな』

須佐男「わかりました！早速やってきますね！」

須佐男も元気に育ってくれてるな…なんか俺親の気持ちかわかった気がする。あいつら俺のことを兄として慕ってくれてるが…

月夜見「お兄様、天照がしばらく太陽で暮らすと言って出ていきました。」

『まじかよ、あいつまだこの話で喋ってないのに…』メタいです

『わかった。たまに遊びに行つてやるか』

月夜見「そうですね。それで、ですね私も一応神です。『そうだな』なので信仰を集めに地球へ行つてきます」

『そうか…わかった。気をつけるんだぞ』

月夜見「はい！」

うん、月夜見も元気で明るいい子に育つたな。

いやー4人もいなくなっちゃったから寂しくなるな…

『あと二百年くらいしたら俺も地球に行つてみようかな』

そういえば伊弉諾と伊弉那美が結婚して地上に降りたんだつたな

リア充許すまじ

都市編

古代つてスゲー

俺が太陽系を作ってから二億年が経った。

ほんと最近時間が経つのが早く感じるな。年は取りたくないね。

月夜見がどうやら地球に街を作ったようなので遊びに行きたいと思う。

俺の名前と見た目で行ったら絶対騒がれそうなので、見た目を変えようと思う。

今の俺の見た目は黒くてサラサラな腰くらいまで伸ばしっぱなしの髪と真っ赤な目、白い肌、中性的な顔立ち、黒を基調とする和服なので

まずは髪の色を変える。一部を紫がかった髪にした。次は服だ。

黒い長ズボンと、白のラインが何本か入った黒いTシャツ、黒のトレンチに黒いブーツという全身黒い見た目になった。顔はアバターとして前世のを使おう。月夜見の前ではずっと神力しか出してなかったのだからこれは靈力を使っていこう。

何故ここまでしているかというところ、完全お忍びだからだ。創世神が街に来てるなんてことになったらゆづくりできないからだ。

一応五百年くらい滞在するつもりでいる。転生してからはじめての地球だから少し楽しみたい。

『なあ龍華、これならバレなそうか？』

龍華「そうだね顔立ちは変わってるし服装も出してる力も違うから大丈夫なんじゃない？」

『龍華が言うなら間違い無いだろうっしや遊びに行ってくる』

俺はそう言うとき昔に作った刀、逆刃刀「神鳳」を持って、地上と繋いである姿見に飛び込んだ。

（1時間後）

『完全に迷ったな』

と言いながら先程から襲ってくる狼型の妖怪を蹴り飛ばしていた。
『なんなんだこいつらは、雑魚だし数多いしでめんどくさいな。なんなら吹き飛ばすか』

俺は能力を使い風を操って狼たちを一匹残らず吹き飛ばした。

「ゲへへへへへ」

『キモい笑い声が聞こえる』

「久しぶりに人間が食えるぜ。おい！お前ら！ここに人間がいるぜ！」

わらわらと奥の方から牛のような鬼のような明らかに中級妖怪程度の敵がぎつと60匹は出てきた。

『めんどくさい。今日は厄日だ』

「ゲへへ、だろうよ今日がお前の命日でもあるんだからなあ！」

何言ってるんだこいつ

俺は液体の金を彼ら全員の足元に張り巡らせた。知ってるかい？

金は電気をよく通すんだよ。

『破道の十一“綴雷電”』

「二二ギヤアアアアアアアアアアアア」

『このまま歩き続けているのもなんだし飛んで位置確認するか』

俺は名前を変えるために作者の名前の一部をもらって、

御神楽ノアと名乗っている。

ようやく街を見つけたんだがまるで要塞だな。とりあえず都市の方向に歩いて行くか

く?? ? side

???'迂闊だった…ちよつと薬草採取に行くだけと思って兵を3人しかつけなかったけど間違っていたようだよ。」

人型妖怪「今日は運がいいぜ人間を4人も食えるんだからな」

兵士A「永琳様お逃げください！ここは我々d」グチャ

永琳「いや…こないで…来ないで…」

人型妖怪たち「へッへッへ」

永琳「だれか…助けて…」

『ウオリヤ!』ゴキヤ

人型妖怪「え?」

＼和人side＼

いい加減歩くの飽きて来たな。走るか?』

「いや…来ないで…来ないで…」

人型妖怪たち「ヘツヘツへ」

『助けてやるか』

「誰か…助けて…」

『ウオリヤ!』

??? 「え?」

人型妖怪たち「え?」

『女性1人に対して男4人はダメだよ?』

口調を変えてみよう

人型妖怪「だっ、誰だ!」

『通りすがりの人間だ』

人型妖怪「ふざけてるのか?俺たちは中級上位妖怪だ。そんな俺らを一撃で、それも素手で殺せる奴なんて人間じゃねえよ。何者だ」

『だーからー、通りすがりの力の強いただの人間だ』

ちよつとうるさかったので須佐男がビビるくらいの殺気を向けてみよう。

『いい加減黙らねえと殺すよー?』

「なっ、なんだこいつヤベエ奴だおい逃げるぞ!」

??? 「ありがとうございます。私の名前は八意X X 永琳と呼んでください」

『永琳ね、俺の名前は御神楽ノアだ。君を助けたのは単なる気まぐれだ感謝なんてしないでくれ』

『俺今都市に行こうとしてたんだよね。案内してくんない?』

「え、ええもちろん」

『さつき遠くから見てもわかったけどまんま要塞だな』

永琳に連れられて、門のところまで来た。そしてやはり…
門番「おいそこの者止まれ」
『やっぱか』

創世神、妹と再会する

門番「おいそこの者、止まれ」

『やっぱりかー』

永琳「通してもらえます?」

門番「はっ永琳様おかえりになられたのですね。どうぞ」

永琳「ありがとう」

俺はこっそり永琳についていこうとして見たが、

門番「ただしそこのお前、お前はだめだ。こっそりついて行こうとしてもバレてるからな」

「彼女は私が森で襲われていたのを助けてくれた命の恩人よ。無礼な真似はしない方がいいわ」

門番「こ奴がですか?にわかには信じ難いですが永琳様の仰ることなら間違いは無いですよ。よし通っていいぞ」

『やったぜ』

俺たちは門から離れて月夜見のいる中央の塔に向かっている。

「貴女はいったい何者なの?中級妖怪を一撃で倒しちゃうなんて」

『言っておくが俺は男だぞ?あと俺にも俺が何者なのかは分からないんだよ(大嘘)』

「あらそうだったの、私てつきり女の子だと思ってたわ」

『この顔なら仕方ないだろうな』

「今向かっているところはこの街の創造主様がいる場所なのよ」

『そーなのかー』

「そういえば、私を助けてくれた時あなた刀を持っていたのに素手で殴っていたわよね。それはどうしてかしら?」

『この刀は特別製でね刃が峰の部分についてるんだよ。永琳を助けた時はずきでつい手が出ちゃったんだよねー』

「そろそろ見えてくるわよ。ほら、あれがこの街で一番偉い人が住んでいるところ」

『(ここの本当に古代か?異様に文化が発達しているが…)すごく…大きいです』

「ぎ、行くわよ」

俺は永琳に連れられてタワーの内部に入った。中にはエレベーターやエスカレーター、電子掲示板とかがあって近未来感が滲み出していた。

『すごい技術力だな。東京みたいだぜ』

「あなたが言ってる東京？はよくわからないけど、すごいでしょ？」

『何故あなたが自慢げにしているんですかねえ』

「あら、だってこの都市の機械のほとんどは私が作ったよの？」

『まじかよ永琳ってすごい人だったんだな』

えっへんと永琳が胸を張って自慢していた。永琳自身は気がついてなかったが胸を張ったせいで、永琳の胸が強調されていた。

「そろそろ部屋に着くわよ…ここね」

『頑丈なドアなこと』

コンコン「月夜見様、紹介したい人がいます。入ってもよろしいでしょうか？」

月夜見「良いですよ、入ってください」

ガチャ『おつ邪魔しまーっす』

「失礼でしょう「良いのですよ」そうですか？」

『なんか…想像どうりの見た目だった…』

「貴方が永琳を助けてくれたっていう…」

『御神楽ノアです。気安くノアって呼んでください。』

そうですか？ではノアさんこの度は永琳を救っていただきありがとうございます
とうございました

『良いんですよ、遠目でこの都市が見えたからここに向かっていました時に襲われていたので助けただけです。永琳さんがいてくれなければ私はこの都市にすら入れていなかったのですから』

「ねえノア？貴方が敬語を使うと違和感があるからやめてくれない？」

『わかった。まあそういうことだ。この都市で暮らしたいんだが家もないしどうしようって考えてたんだが…』

「そうですね…家は永琳の家に住んでください。彼女の家は広いです

から、1人や2人増えたところで変わらないと思いますよ。」

「ええ!？」

『月夜見が言うんなら仕方ない。』

「ちよ、ちよつとノア! 貴方はそれで良いの?」

『別になんとも?』

「はあ…もうなんでも良いわ…」

『済ませてもらう代わりに、家事とかはやってやるよ。』

「お願いするわ…」

つてなわけで俺は永琳の家に住むことになったのだ

〜永琳家前〜

『でつか。これ本当に家か?』

「私は大きい家じゃない方が良いつて言ったのだけれど、大工たちがここで2番目に偉い人が小さな家じゃ格好がつかないでしょうつて言ってきてね、それでこのサイズよ」

『まあこれからは掃除とかは気にしなくて済むじゃねえか』

「本当に料理とかできるの?」

『当たり前だろ、できないのにわざわざ作ってやるだなんて言うか?』

実は俺は相当料理ができるのだ。

前世では三ツ星シェフと料理勝負して5対0で圧勝した。それ程自信がある。

これから俺の居候生活が始まる

和人が軍に入るようですよ？

俺はここ一週間永琳の召使いのようになってしまった。

ついでに新薬投与の実験台にされているが、具合が悪くなったりだとかはしていない。と言うよりも俺に薬が効いてないようだ。

「ノアくん、貴方には今日この薬を飲んでもらうわ。何故今まで薬の効果が現れなかったかはわからないけれど、これなら効くはずよ」

『また薬飲まされんのか…まあ今まで何も起こってないから良いんだが…』 オクスリゴツクン

腰に違和感がある…何なんだ？腰の皮膚が裂けてるような感覚があるんだが痛みがない…

「ノア？なんなの？その腰から生えてる尻尾みたいな…」

『ん？尻尾？』

俺は腰からなにかが生えてるようなので見てみようとする、生えてる尻尾もどきが俺の意思どなりに動くようなので動かして自分の目の前に持つてきて見た…

『尾赫じゃねえか！なんで俺にこれが生えてんだよ！まさか俺、喰種になったのか？』

「どうやら貴方にはそれがなんなのかが分かるようね、深く追求しないでおくわ、それにしても貴方今の薬のせいで白目の部分が真っ黒になってるわよ」

『喰種になってた!!』

〜1時間後〜

俺が尾赫で遊んでたら1時間経っていたようだ。

『俺そろそろ職に就きたいんだが…俺が簡単に就けるような仕事ってないか？』

「そうねえ…それなら軍に入るのはどう？あそこなら貴方が実力を証明すれば一気に高い地位につけて給料もいっぱいもらえるわよ？」

『良いなそれ』

俺は金の話を聞いて目をギラつかせた

「軍に入るには筆記試験と試験官との軽い試合をする必要があるわ、
貴方どれだけ勉強できるのかしら?」

『そうだな…前に居たところのテストでは常にトップ3にいたな』
「意外に勉強できたのね…」意外は余計だ』あらごめんさい。実力は
当たり前前だけど十分過ぎてるし、貴方取り敢えずこの都市の歴史につ
いて勉強しておきなさい。よくテストで出るらしいからね」

『何で勉強すれば良い?』そうねえ、取り敢えずこの教科書を使った
ら?」分厚すぎね?』

「そうね、これでも省略はされてるのよ?」

省略してこれですか

『パラパラパラ』

『よつしや全部覚えた』

「嘘でしょ!?!あの量をこの一瞬で?」

『そうだが?』

「恐ろしいわね貴方」

『なあ永琳、この家って道場あるか?』

「弓道場ならあるけど…剣道場はないわよ?」

『そっか。なら作ってくる。』

「え?」

〜十分後〜

『できたー』

「本当にできてる…すごい本格的ね」

『まあこれから修行するところだからね。しっかりと作っておきたかつ
たんだわ』

「でもどうやったの?」

『俺の能力を使った。「どんな?」…森羅万象を司る程度の能力(大
嘘)』

「すごい能力ね、それで十分程度で作れたのね」

『しばらくここで瞑想してるから、お腹空いたら言っってね』

「わかったわ」

〜3時間後〜

18:30になり、永琳が腹を空かせた頃なので、料理をしに行く。

『秘技、キュー〇ー秒速クッキング』

超高速で動き、料理を2人前作る。

「いつ見ても不思議ね」

『そう?ま、良いじゃん。んじやいただきますーす』

「いただきます」

〜2日後〜

今日が軍の入隊試験日。俺は永琳に玄関で見送られている。

「行ってらっしゃい、気をつけてね」

『おう!行ってくるぜ!…今何時だ?「えつと8時ちょうどね」そうか

…ちよつと急ぎめで行ってくるぜ』

「急ぐからって視認できないほどの速度で行かなくても…」

〜試験会場〜

『人すごいいるな』

???「ようお前見ない顔だな。俺は成瀬魁斗だ」

身長おおよそ2メートルほどの大男が話しかけてきた。

『俺は御神楽ノアだ。気軽にミカでもノアでも好きなように呼んでくれ』

「わかったぜミカ!『それを選ぶか』良いだろ?『良いがな』」

「おーい凜こつち来いよー」

魁斗が誰かを呼んだみたいだ

「魁斗どうしたの?」

「紹介しようって思ってたな、こいつは御神楽ノアださつき知り合った。んでこつちは秋月凜だ」

『ノアだ。よろしく』

「凜だよ。それにしても貴女背が高くて、すらつとして綺麗で羨ましいなー」

『そうか?俺、凜は結構可愛いと思うぞ?あと俺は男だ』

「ふえ!?／＼／私が：可愛いつて／＼／」
『なんで照れてんのかわかんないけどまいつか』
「こいつ天然女たらしだ：ってお前男だったの!？」
『気づいてなかったのか? ってか俺がこんな見た目してんのが悪いんだが：俺の髪はなぜか切つても元の長さにすぐ戻っちゃうんだよな』
「っとそろそろ試験開始時間が近づいてきたな：おい凜！いい加減照れるのをやめろ！試験会場に急ぐぞ」
「う、うんわかったよ！行こう魁斗、じゃあ後でねノア」
『おう』

試験開始だ

綿月姉妹が和人に挑むようです。

試験開始だ

ここからはしゃべっているように見えて心の声です

『最初は数学か…ってこれ高校レベルじゃねえか。簡単すぎね?』

和人は高校生だけど高校飛び級してハーバード大学で博士号を取
得できるくらいの頭脳は持っています。

『簡単すぎて試験時間の5分の1で見直しまで終わっちゃった、寝て
おくか』

〜残りの5分の4後〜

『次は国語か…これも高校レベル…はあ退屈すぎるぜ』

〜国語、理科、英語終了〜

『最後に政治か、これはーっと全部覚えたところに含まれてんな。

やっぱこの程度か』

〜政治終了〜

ここから普通に戻ります。

「おーいミカ〜お前筆記どうだった?」

『全部簡単で退屈だったぜ』

「すごいねノア君。私は数学がダメだったよー」

「俺は国語がなー」

『残りの試験はなんだっけ?』

「射撃と試験官との相手だったよね?」

『後どんくらいかかるかなー』

アナウンス「これより射撃試験を開始する。受験生は射撃場に集ま
るように」

「そんじゃ行こうぜ」

〜射撃場〜

試験官「これからさまざまな銃火器を使ってもらおう。」

〜ハンドガン〜

『見ないでいけっかなー』

バン！バン！バン！

『よっしや全弾心臓部の同じ位置に当たったな』

『私は真ん中に一回しか当たらなかったよー』

『俺もだー』

〜その他銃火器はバツサリカット〜

『お、俺満点だつてさ』

『私は60点満点中42点だった』

『俺は53だったぜ』

『次は組手か』

『私自信ないなー』

『俺もー』『お前は嘘だろ』そうだよ（便乗）

アナウンス「これより組手の試験を行う。名前を呼ばれたものは呼ばれた番号の部屋に入れ」

『だつてさ』

アナウンス「成瀬魁斗、18番の部屋に行け」

「しよっぱな俺かよー」

「頑張つてねー」

『負けんなよ?』

「言われなくとも!」

〜3分後〜

「勝ったぜ」

「さすが魁斗だね」

『どうだったよ相手は』

「まあまあ強かったぜ」

「私クリアできるかなー」

『なんとかなるさ』

〜ほかに十何人か呼ばれた後〜

アナウンス「次、秋月凜、32番の部屋に入れ」

「私頑張ってくるよ」

「応援してるからな！凜！」

『相手の動きを見るんだぞ？』

「わかった！行ってくるね！」

〜2分後〜

「よかった〜クリアできたよー」

「おめでとう！」

『よく頑張ったな』

〜何百人か呼ばれた後〜

「なかなか呼ばれないねー」

「お前もしかして1番最後なんじゃないか？」

『それはありそうでつらい』

アナウンス 「最後だ、御神楽ノア、1番の部屋に入れ」

「やっぱ最後だったか」

「ノア君！頑張ってたね！」

『おう、そこはかとなく頑張る』

「そんなんでいいのかよ」

『勝てばよかろうなのだ。んじゃ行ってくるぜ』

〜部屋の中〜

なんか部屋ん中ピリピリした空気が流れてんな。さつきからここに入ってたやつみんな絶望したような顔で出てきてたな。概ね落とされたんだろう。この空気の出所はーつとあの2人か。

あれは多分綿月姉妹だろう。そして試験官から流れてるこの雰囲気

気：『あなたは霊力使いですね？』

「よくわかったな、ということはお前も霊力使いか」

『そうです。手加減なんてしないで…』

楽しみましょう？』

「そうだな：俺の名前は太岩寺兼定だ。全力でいかせてもらおう」

『ご存知かもしれませんが、俺の名前は御神楽ノアです。こちらも出せる力を出しましょう。綿月豊姫さんでしたか？審判をお願いします』

「わかりました。それでは双方構えて：始め！」

俺と兼定は構えを取り、開始の合図とともに相手へ突っ込んだ。

綿月姉妹曰く俺の姿を一瞬見失ったらしい。俺はそんなに速度を出したつもりはなかったのだが。

俺は素の力、兼定は霊力を全て身体強化に回しての勝負、兼定が有利に見えるが、10億年以上も生きている俺が相手となつては話が変わる。それに俺は能力でこの10億年間の1日ずつ1.5倍にしてきた。結果はわかりきっていた。

俺の圧勝、俺が消えたと思つたら既に目の前にいて、一瞬で体に10発パンチを入れ、兼定を気絶させた。

「ツ！そこまでツ！（ノアの動きが全く見えなかった。それは依姫も同じようね）勝者御神楽ノア！」

『ありがとうございます。兼定。回復してやる。「リカバリー』』

「今の攻撃はどうやったんですか？」

『あなたは：綿月依姫さんでしたっけ？今は地面を蹴つて相手へ近づいて打撃を加えただけですよ』

豊「私からはあなたが開始と同時に消えたように見えたんですが…」

『そうだったんですか？今のはそこまで速度を出していなかったのですが…』

依「今ので全力じゃないと：そういうことですか？」

『ええまあ本気を出しては、この建物が壊れてしまいますし、下手したら都市全体を壊しかねないので』

豊「依姫ちよつといいかしら？「なんででしょうか」ゴシヨゴシヨ「なるほどそれはいい案ですね姉さん」でしょう？」

豊「ノアさん私たちと勝負してくれませんか？」

ニイ『もちろん』

豊・依「ツ!？」ゾクツ

豊「で、では始めましょうか」

『そういえばあなた方は武器を使いますか？「私は剣を」「私は扇を使おうわ」わかりましたでは私もいや：俺もこいつを使わせてもらおうぞ』

俺はそういうと壁に立てかけておいた神鳳を手に取りベルトのところに付けた

『では始めるぞ』

依姫が突っ込んできたので左に避けながら注意を2人に向ける。豊姫の方はまだ動かなさそう。まずは依姫を倒そう。

「やああああ!!」

また突っ込んできたので依姫と反対方向に動きそして攻撃後の無防備な依姫を攻撃した。

『結界刃!』

「なッ!」

依姫は反応が少し遅れ斬撃が掠った

「依姫!!」『おっと今は動かない方がいい今ちようど豊姫のところは俺の高威力射程圏内だ』くッ!

「やああああ!」今回は避けずにわざと接近し鏝迫り合いになる。その時にちゃんと豊姫も視界内に入れている。

『どうした?この程度なのか?永琳がお前らを強いつて言ってたんだがな…残念だ』

「お師匠様が!?ならばこの戦い負けるわけにはいかない!」

依姫は俺を突き飛ばしたが俺は俺の周りの空気を変化させクッシヨンにしてダメージを消した。

『自分の射程範囲外から俺を外したのが失敗だったな。「零閃」』

『ッ!また飛ぶ斬撃!でもさっきので対処法はわかりm』『これの威力はさっきの5倍だ』なッ!」

「依姫!!」豊姫は遠くから弾幕を大量に俺に飛ばした。

当たったと豊姫は思ったのだろう。だが実際は俺の2メートル前で消滅したのだ。

「なっなんで…」

『能力を使ったのさ』

残りは豊姫だけだ。

『残すはお前のみ』俺は豊姫の目の前に走り喉元に刃を突きつけ『降参するか?』と聞いた

「あ、ええ降参するわ」

『よつしや終わつたし依姫治して帰るかー永琳待つてるだろうし』

「あ、あのノアさん『ノアかノア君と呼んでくれ』ノア君。あなたとお師匠様はどんな関係なんですか？」

『同居人？かな？』

「同居しているのですか!？」

『いやー月夜見に言われたから』

「そうでしたか」

『リカバリー』

「んん？あれ、私は…『お前は負けた』そうですか…」

『兼定、俺と戦ってみてどう思った？』

「別次元だと思つたな」

『そつか、んじや俺はこれでバイバイ』ガチャ バタン

「ノア君!」

「ミカ!」

「ノア君大丈夫だった？1番の部屋はみんな落とされてるって聞いたんだけど…」

『おう、試験官自体が多分ほかの部屋とレベルが違うだろうな。(靈力使いをここに来て初めてみたぜ) 試験官倒したら綿月姉妹に挑まれちやつてさちよつと時間かかったわ』

「そうなんだ…さすがノア君だね!」

「やっぱすげえよミカは」

『そんなことないさ、取り敢えず明日合格者発表されるらしいからまた明日な』

これからどうなっていくのか

依姫が和人を突然訪問するそうですよ？

試験が終わった次の日、俺と魁斗たちは、試験結果を見に来ている。

『やっぱ受験者数より合格者数の方がかなり少ないな』

『それは多分組手の試験のせいだと思うよ？』

『そうだな、ミカ以外に誰もあの部屋から合格したやつ出てないからな』

『案外楽だったけどな「それはお前が強すぎたんだ」そーなのかー』

『私もあった』

『俺もだ』

周りで沢山の人が落胆していた中で俺たちは全員合格していた。

アナウンス「御神楽ノア殿、月夜見様がお呼びです。タワー最上階、月夜見様の部屋に至急来てください」

「月夜見様ってミカ：お前一体何したんだよ」

『何もしてねえよ、強いて言うなら綿月姉妹倒したくらいだろ』

「多分それだよノア君、あの2人すつごい強いで有名だから」

『そこまですもなかったけど：まあ呼ばれたんなら行かないとな』

くタワー最上階月夜見の間前く

『おつ邪魔しまーす「邪魔をするなら帰ってください」わっかかりましたーバイバイ』

「本気で帰らないでください!!？」

『いやーごめんごめん。で、要件は何?』

「いえ、あなたが豊姫と依姫を倒したと聞きましたので、ちよつと交渉をと」

『ほう』

「ノアあなた：今すぐ隊長になる気はありませんか?『ないな』そうですか：やはりあなたならそう答えると思ってましたよ。一応理由を聞かせてください」

『友人達も合格したんだ。俺だけスピード出世するのは良くない。ついでに俺は気分で動いてるから気が向かないものはしないんだよね』

「そうですか『そうだよ』気分で動いている…お兄様みたいですね」(ボソツ)

『え？今なんて？』もちろん聞こえてたけど。

「いえ、何でもないのです。聞きたかったのはこれだけです。後は自由にどうぞ」

『そうか、じゃあな』

「ええ…さようなら」

く 魁斗たちと合流く

「なんかあったのか？」

『特には。隊長にならないかって聞かれたけど拒否した』

「どうして？」

『せっかくお前らと同期になれたんだ。もったいないだろ』

「ノア君らしいね」

「合格者は1ヶ月後から訓練開始だつてさ」

『そうか、んじや俺永琳に飯作んなきゃだから帰るな』

「おうじやあな」

「じゃあねー」

「永琳さんとも関わってるんだね(な)」

く 永琳家く

『飯できたぞー』

「あら、今日はアレやってないのね」

『アレは急いでる時ぐらいにしかやってないんだよ』

「そうなのね、それじゃあいただきます」

く 食後く

「私はこれから研究所に行かなくてはならないから留守番よろしくね」

『りょうかーい』

「行ってきます」

『いつてらー、行ったか…なあいつまでそこに隠れてんだ？』依姫』

「やはりばれていましたか。あなたと戦った時に私は自分が無力だということを知りました。なので、剣術も体術も格上な貴方に鍛えて欲しいのです」

『うむ…よし、お前に修行をつけてやろう。俺のことは師匠と呼べよ？短期で確実に力をつけさせてやる。俺の修行はちよつときついが、頑張れよ』

「わかりました！師匠！」

『よっしゃ！取り敢えず体力をつけるために走りに行くか』

「そうですねここは五丁目ですからこの辺りを走るのですか？」

『いんや？この都市を何周かする。』

「え？この都市をですか？『そうだよ』ええ…」

「この都市は半径15キロほどなので一周大体94、2キロである。

『まあ今回は依姫にどれだけ体力があるのか見るのも兼ねてるから、取り敢えず壁まで走るぞー』

「わかりました」

「壁到着」

『よしこつから取り敢えず一周するぞー』

「坂がないだけ助かります」

『そりゃ走るのには壁だから坂なんてないよね』

「え？」

『え？』

「壁を走るのですか？ちよつと無理があるのでは…」

『大丈夫だよ俺も出来てるから』

「そりゃ師匠は目で捉えられないくらいの速度で動けるからでしょう」

『わかった。依姫は地面、俺は壁で走ろうか』

「お願いします」

俺は壁を走るために俺の重力を壁の方向に向けて壁に立った。

「どうやったんですか？」

『ちよつと俺の重力を変えたただけだよ』

「あの時の速度には関係あるんですか？」

『全くないよ。よしそれじゃ始めようか』

『お願いします』

『よいスタート』

そういうと、俺たちは走り出した。

〜一周終了〜

俺はまた地面に重力を戻した

「ハア：ハア：なんで師匠は行ききれてないんですか？」

『鍛えてるからかな？あと一緒に走ってるように見せかけて俺だけ20周してただけど気づいてた？』

「：気づいてませんでした。師匠は一周するのにどれだけかかるんですか？」

『そうだなーさつきは一周あたり0.01秒くらいかかってたね』

『秒速9，420キロですか：もう驚きませんよ』

『そんなに出てたんだ：次は瞑想をしようか』

『そうですね』

〜道場〜

「お師匠様の家にこんな本格的な道場があつたなんて：」

『一応俺が作った。しばらくここを使うからな、んじゃ好きなところに座って好きな時に初めていいよ。2時間くらいやってもらおうかな』

「はい」

『2時間後に呼びに来るから、俺が来なかったらやめていいからね』

「わかりました、それで師匠はどこへ？」

『俺はちよつと壁外に行つてくる。』

『お気をつけて』

『あいよー』

〜壁外〜

☒？「都市からだれか出てくるみたいだな、そいつをあの人に持つて行くか…」

今誰かに見られてたきがした

『試してみようかな。「瞬歩』』

視線を感じた方向に行ってみよう。…なんかいるんだけど。

『えーとお前は誰だ?』

☒? 「なッ?! いつの間に!？」

『誰かって聞いてんだよ』

☒? 「俺の名前は奏鬼。この近くの鬼の村の住人だ」

『奏鬼ね、俺はノアだ。それで? なぜ俺をずっと見ていた?』

「俺の村は食糧難に陥っていて、このままだと餓死する奴が出てきまうから、食料を探していたとこにあんたが来たんだ」

『そうか…ならこれからはもう食料と水には困らないようにしてやるよ』

「ほッ本当か!?! 『ああ本当だ。困ってる奴に対して嘘はつかん』ありがとうえ…ありがとう! ノア」

『無限食と水樹だ。受け取れ』

「感謝するぜ! ノア! 村の奴らにこれからは人間に危害を加えないように行っておくよ」

『よろしくな』

☒? 「あらあ、こんなところに人間がいるなんて、私は本当についているわ」

『ッ! 強い殺気!』

殺気の正体は誰なのか…次回に続く

和人、ルーミアと戦うつてよ。

『ッ！強い殺気！』

俺の後ろにいたのは美女だった。

「あら、気付かれちゃった」

『一応聞いておこう。お前は人喰い妖怪だな？』

「そうよ？」

『そうかそうか、俺を食おうとしたのか』

「勘がいいわね。そうよ？貴方は私に食べられるの。」

『たかが影妖怪風情がか？』

「その見下したような顔、すぐに恐怖で染めてあげるわ」

そういうとルーミアは一気に接近して来た。

『おっと危ない、喰らうとこだったぜ』

「惜しいわね、次はあなたからかかって来なさい」

『いいぜ？でも…後悔すんなよ？』

そういうと俺は喰種化する薬を飲み、尾赫を6本生やして接近した。

「ッ!?どうなってるの？あなた人間じゃないのかしら？」

『一応人間だぜ。油断してていいのか？』

俺は尾赫を変則的な動きをさせてルーミアに攻撃をした。

『どうした？5発ヒットだぞ？』

「嘗めないで！」

影を使った攻撃をして来た。

『オラオラどうしたア！当たってねえぞ！』

「くっ、いい加減にあたりなさい！「ムーンライトレイ！」」

『んじや俺も真似してムーンライトレイ！』

相殺した。

「なぜあなたにその技が使えるの!？」

『企業秘密』『零閃「10機」』

斬撃をルーミアに向けて10発飛ばした。

ルーミアが零閃の対処に夢中になっているところに接近して

『虚刀流「牡丹」』

「かはッ、いつの間に…」

『隙だらけだったからっつい』

「くそっ！「ミッドナイトバード」!!」

『お前は闇がなくなったら有効的な攻撃がないよな?』

「闇をなくすことなんてありえないわ」

『そうか?…『能力発動、闇という概念を消滅』』

「なっ！私の攻撃が！」

『終わりだ。『ゲートオブバビロン』』

そう告げるとルーミアの周りに金色の円が大量に現れ、そしてそこからさまざま武器が飛んで行った

『ほうまだ生きているか…面白い。なあお前の名前はなんだ?』

「ルーミアよ…」

『ルーミア、お前…刀に宿るつもりはないか?』

「宿らなければ?」他の人間に危害を加えそうだから消す』なら宿らせてもらおうわ」

ルーミアを神鳳に宿らせた。

『出て来たかったら言うてくれよ?出してやるから』

「わかったわ」

『つとその前に、殺さないための刀があるのに殺すための刀がないっていうのはちよつとアレだから…作るか』

俺は能力を使って新しい刀を作り上げた。

『こいつにも名をつけないとな…こいつは「結月刀『紫電』だな』

俺は紫電に能力を付加した。それは、

絶対に壊れない程度の能力、手入れをしなくても切れ味が変わらない程度の能力、斬れば斬るほど切れ味が上がる程度の能力だ。

ちなみに神鳳には絶対に壊れない程度の能力、手入れをしなくても切れ味が変わらない程度の能力、切っても死なない程度の能力、刃で切ったらあらゆるものを切り裂く程度の能力だ

『帰るか』「そうね」

く都市く

「ここが都市…」

『なんだ？見たことなかったのか？』

「あんなに高い壁があるんですもの見えなかったわ」

『そうだったか…これからは色々見せてやるよ』

「ええ、お願いするわ」

く道場く

まだ時間が30分くらい残ってんな…俺の周りの時間だけ早めて
依姫と時間揃えておくか…

く30分後く

『よし、瞑想終わりだ』

（おいルーミア、神鳳から紫電に移れるか？）

（移ったわ）

（ありがとう）

『次は俺と単純に打ち合いをする。刀を取れ』

「はい」

『行くぞ』

く2時間後く

「ハア：ハア：…やつぱり師匠には勝てないですね…」

『気にすんな、鍛えていけば必ず強くなれんだから』

「ノアーお腹空いたわー」

「お師匠様こんばんは」

「あら依姫こんばんは、ノアに稽古をつけてもらってたの？」

『いや俺に弟子入りした』

「あらそうなの。で、見込みは？」

『ある。2時間打ち合いしてたが、確実に強くなってる。いわゆる天才
才ってやつだな』

「そう。それよりお腹空いたわ」

「それでは私はこれで」

『依姫も食ってけよ』

「いいんですか？」

「いいのよ。ノアのご飯は美味しいわよ?」

「そうなんですか? 食べたいです!」

『よしよし、時間ねえな:アレやるか』

「アレ?アレってなんですか?」

「見ればわかるわ」

〜台所〜

『よし作るか』

『キュ○ピー秒速クッキング』

「ものすごい動かしてますね…」

「ひさびさに見たわー」

『出来たぞ』

「はやいですね」

「面白かったわ」

『作りすぎたがまあいいか。そんじや』

『「いただきます」』

〜食後〜

「ごちそうさまでした師匠。とても美味しかったです。」

『お粗末様。喜んでもらえて何よりだ』

「明日も来ていいですか?」

『いいぞーってか泊まつてくか?』

「いえ、家で姉さんが待ってますから」

『そうか。なんなら明日は豊姫も連れて来ていいぞ?』

「はい!お疲れ様でした師匠!」

依姫修行を始めた和人。いったい依姫をどこまで強くできるのか。

次回に続く

「後半わたし空気じゃなかったかしら?」

『ソナナコトナイヨ』

和人がルーミアと街中デートするようです

「師匠、今日もよろしくお願いします」

『おう、よろしくな。豊姫は連れてこなかったんだな』

「特訓の内容を話したら嫌がりました」

『仕方ないな。じゃ、始めるか』

「はい！」

『今日も昨日と同じ内容だ。長距離走は体力づくりのためだ。一周して息があまり切れてなかったら、短距離走をやるぞ』

「わかりました」

～一周終了～

「ハア：ハア：」

『今度からは一周ずっと走りっぱなしじゃなくて、4分の1走ったら休憩みたいにして行くか』

「それをお願いします…」

～道場～

『今回は瞑想の前に打ち合いをするぞ』

「よろしくお願いします」

～2時間後～

『そうだな…たまに蹴りとかを混ぜてみるのはどうだ？お前なら出来るだろ？』

「やってみます」

～15分後～

『断然良くなった』

「ありがとうございます」

『次は瞑想だが、今回はちよつと特殊な奴やるか』

「特殊な奴とはなんでしようか」

『本来人間がみんな持っている力、霊力って言うんだが、それを使いこなせるようにするための瞑想だ』

「そんなものがあるんですね…」

『取り敢えず座禅組んで、目を閉じて。自分の心の中で波紋のようなものを描いてみて。できたらそれを3時間維持する。これは自分に霊力の存在を感じさせるためのものだ。それじゃ始めてくれ』

～道場外～

『とりあえずはこんな感じかな』

「お疲れ様」

『おう。ちよつと街中を歩かないか?』

「喜んでお受けするわ」

『よし出て来てくれ』

シユウウウウ～

『出て来かたこんな感じなのか…』

「それじゃ出かけましょ?」

『そうだな』

～街中～

『いろんな店があるな…』

「わたしここに来てしまつて本当に良かったのかしら?」

『どう言うことだ?』

「いえ、こんなに人がいるところに来て、もし妖力とかが見れる人がいたらわたしは殺されてしまふんじゃないかしら?」

『安心しろ。お前の妖力は能力で霊力に変えてある。ついでに人喰い衝動も無くなつてるから安心しろよ』

「ええ。ありがとう」

『んじゃぼちぼち歩くか』

「あれは何?」

『あれか?あれは雑貨屋だな』

「雑貨屋つて?」

『いろんなものが売つてるんだよ。あつそうだ、ちよつと待つてくれ』

「ええ」

『これやるよ。「これは？」これはイヤリング。耳につけるものだ。今俺の力をそんな中に注ぎ込んだからこれ付けてれば前よりも強くなる。』

「なんで片方しかないの？」

『それはだな…』

俺は自分の右耳を指差した

『これで俺の力が自動供給されるようになる』

「ありがとう」ニッコリ

不覚にも思わずときめいてしまった

『お、おう』

その後俺たちは色々な店に立ち寄って、いろんなものを買った。

「お腹空いたわ」

『そうだな、帰って飯にするか』

「そうね」

〜家〜

『キュ○ピー3秒クッキング』

「刀から見てたけど不思議ね」

『そうか?』

「ええ」

『食うか。いただきます』

「いただきます」

俺が今回作ったものはハンバーグとオニオンスープだ。

「初めて食べたけどすごく美味しいわね。あなたの料理を毎日食べられるあの2人が羨ましいわ」

『じゃあこれからはお前も一緒に食べるか?』

「いいの?」

『勿論だ』

「ありがとう」

『依姫の様子見てくるか』

「ええ」

〜道場〜

『ルーミアお前は俺が外で拾ってきた人間だつてことにしてくれ』
『どうして?』

『そうじゃないと、面倒ごとになる。』
『わかつたわ』

『依姫は霊力のことに関しても天才だったか』

霊力は見えるやつには見えるもので、体の周りにうつすらと見えるものだが、依姫の霊力は兼定以上で、霊力を手に入れて2日たった時の俺とおんなじくらいの量を持っている。

『終了だ』

『どうでしたか師匠?』

『完璧だ…まさか5日かけてようやく出来るだろうと思っていたことがわずか3時間で習得するとは…』

『それで、師匠。そちらの女性は?』

『こいつはルーミア俺が壁の外で見つけた人間だ』

『こんにちは。ルーミアよ』

『こんにちは。綿月依姫です』

『こいつは取り敢えずうちに住むことになったから』

『じゃあお師匠様にも言っておるんですね?』

『いや?永琳が帰ってきてからだが?』

『もし断られたら?』

『俺も出て行く』

『家はどうするのです?』

『3分もあれば作れるから大丈夫だ』

『そうですか…師匠には常識が通用しませんね』

『昔から言われてる。それにな、永琳は断らないって知ってるから後で言うんだぜ?』

『信頼からですか…』

『いい関係ね』

『お師匠様が羨ましいですよ』(ボソツ)

『ん?なんか言ったか?』

『なっなんでもないですっ!』

(あなた聞こえてたでしょ?)

(勿論だ)

「可哀想に…」

「どうしました?」

「いえなんでもないわ」

「そうですか?」

〜永琳帰宅〜

「だだいま〜」

『おうおかえり』

「お師匠様おかえりなさい」

『ちよつと紹介したい奴がいる。いいか?』

「ええいいけれど」

『こいつはルーミア。俺が壁の外で拾ってきた人間だ。それでだな、ルーミアをここに住ませていいか?』

「勿論よ。」

『さすが永琳懐が深いな』

「ありがとう。永琳さん」

「いいのよ。」

『ルーミアには変な薬飲ませんよ?』

「もちろんそれはわかってるわ」

『じゃあルーミアを迎えた祝いとして色々作るか。ちよつと待ってろ』ドシユン

キイイーンドーン「え?何が起こったの?あれ?依姫にお師匠様?なんで?」

『人数が多い方が楽しいからな』

「ノアさん!?なんで:『俺この住人だから』なるほど。ここに連れてきたのもノアさんでしたか」

『落ち着くの早くていいな、依姫だったらこうはいかない』

「そんなことないです!ひどいですよ師匠」

「依姫本当に弟子入りしてたのね:お姉ちゃん嬉しいわ」

「姉さんもふざけてないで！」

『どうだ？豊姫も修行しないか？「わたしは走るのがちよつと…」走らない奴もあるぞ？…どうする？このままだと妹に負けるぞ？…』

「わかつたわ。弟子入りします。よろしくね師匠」

『ルーミアもやるか？』

「わたしは専門外よ」

『そっぴいや豊姫に紹介してなかつた』

くバツサリカツトく

『よつしや作るぜ』

キュ○ピー秒速クツキング

『できたから食うか！』

全員「いただきます」

「相変わらず師匠の料理は美味しいですね」

「ほんところの料理が10数秒で作れてるのがおかしいくらいよ。師匠は一体どうなっているのかしら」

「実際本当におかしいからね」

『そんなことないさ。俺の知る限り俺よりもっと早くて美味しい奴が1人いる』

龍華である。彼女は飲み込みがとても早く、料理などを教えたらすぐに覚えたのだ。

「末恐ろしいわね。そういえば後一週間で軍の訓練が始まるけど、ノア君あんまり暴れないでね？」

『安心しろよ。暴れるつもりは全くないから。依姫たちはどうしてるんだ？』

「私たちも軍の訓練に参加しますよ。わたしは師匠と同期で、姉さんは1つ上ですね」

『同期か、よろしくな。そっぴいや今から根回しつて出来るかな？』

「なにをするつもり？」

『嫌なに…ルーミアを入れるつもりなのだよ』

今回はここまで！果たしてルーミアを軍学校に入学させることが

出来るのだろうか次回に続く！

和人が2人と再会した後、死阿威するようです。

『なあ永琳…今から根回しして出来るかな？』

「何のために？」

『嫌なに…ルーミアを軍学校に入れるだけなのだよ』

「そう…でも何でルーミアを？」

『ルーミアは俺がみる限り相当な強さだ。おそらく今の依姫と豊姫では勝てないくらいに』

「師匠！それはどういうことですか？」

『けっしてお前たちをバカにしているわけではない。だが、お前たちよりも強いのは確実だ』

「そんな…」

『だがお前たちはまだまだ強くなれる。だからこそ俺はお前らを鍛える。で、どうだ？出来そうか？』

「ええ…一応私が推薦してるってことで入れるようになれると思うわ」

『確実ってわけではないのか。まあいいか、ダメだった場合は俺が何とかしよう』

く翌日く

「ノア君、ルーミアちゃんのことだ」

『許可が下りたんだな』

「よくわかったわね」

『お前の話し声が軍学校の方向から聞こえたんだ』

「ここから12キロよ!?聞こえるはずがないわ？」

『俺に常識は通用しないさ』

「もういいわ…」

「こんにちは師匠、お師匠様」

『よう。依姫、豊姫も』

「こんにちは2人とも」

『早速始めるか』

「そうですね」

残り5日で依姫たちを都市内戦力トップ5に入れるまで鍛えるのが俺のノルマだ。

『依姫はいつも通り一周してきてくれ。豊姫は靈力を完全に使いこなせるまでみっちり鍛えてやる』

「わかりました。行ってきます師匠」

「よろしくお願いします師匠」

『依姫は大体3時間くらいで帰ってくるだろうから。その間に靈力を発現させるぞ』

「私に出来るかしら？」

『依姫は3時間でできた。お前は依姫よりも靈術のセンスがあるように思える。まあお前の努力次第だ』

「頑張ってみます」

『坐禅を組んで自分の心を無にして』

「…」

恐ろしく早いな

『次は自分の体の中心に白い塊があるのを想像して。できたらそれが爆発するような想像をするんだ』

〜10分後〜

『すごいな…よし目を開けてみる』

「力が漲ってる感覚です。これは…」

『これが靈力だ。お前は相当な才能の持ち主だよ』

「本当ですか!？」

『ああお前は依姫よりも圧倒的に早く発現してるし、量も2倍くらいだ』

「師匠には…」

『まだまだ届かないな、鍛えてきた時間が違うからな』
「そうですか…」

『そうがっかりすんな。おそらく都市でも相当な使い手に成長できる。それに依姫は靈力を増加させる瞑想をやっていたのに、お前は超えているんだ』

「はい！」

『よし。依姫が戻ってくるまで瞑想してるか』

「わかったわ！」

〜1時間半後〜

「ハア：ハア：ただいま戻りました…」

『早いな』

「師匠が言っていたように4分の1走ったら休憩するようにしたら、体力が持つようになってきました」

『よしじゃあこのまま打ち合いやるか』

「はい！」

〜打ち合い中〜

「えい！やああ！」

『よっほっ、そこで蹴りだ！』

「やああ！」

『うお！危ねえ！蹴りの速度が上がってやがる』

「ぜやああ！」

『おっとっと、危ねえ危ねえ喰らうとこだった』

「ハア：ハア：どうでしたか？」

『確実に強くなってきた。この調子だ。そういやお前は何で弟子入りしたかったんだっけか？』

「私は師匠と戦って自分が弱いということを知りました。私は剣術に自信を持っていましたが、師匠の飛ぶ斬撃を見て、まだまだだっと思っただけです」

『なるほど、だからか。斬撃を飛ばすには速度と技術が必要だ。これから技術を教えていくが、速度は自分でつけるしかない。できるか？お前に』

「出来る出来ないじゃないです。やるんです！」

『そのいきだ。依姫も豊姫と瞑想をしておけ。霊力を使えば自分の身体能力を強化できるし、斬撃も再現できる』

「わかりました！」

『あと3時間だ』

「はい」

〜四日後〜

『お前たちはおそらくこの都市で上位5位に食い込んでいるはずだ。それほどまでに強くなった』

依姫はこの間よりも速くなったし、1発1発の威力が格段に上がっている。霊力で斬撃を3メートル程度だが飛ばせるようになった。

豊姫は霊力量が発現時の約6倍程度になった。

『そういえば明日から訓練が始まるな。あいつらどうしてつかない』

「あいつらって誰?」

『ルーミアには言ってなかったな。俺の友人たちだよ』

「明日になったら私も会えるかしら」

『ああ。それは勿論のこと、友達にもなれるさ』

「明日が待ち遠しいわね」

『そうだな』

〜翌日〜

『行ってくるぜー』

「行ってきまーす」

「ええ行ってらっしゃい。気をつけてね」

『おう任せとけー』

〜軍学校到着〜

『ようお前ら久しぶりだな』

「おうミカ久しぶり」

「ノア君久しぶりー。お隣の美女は?」

『こいつはルーミア。俺が外で見つけてきた人間だ』

「へえー相変わらずミカは何やるかよくわかんないな」

「羨ましい」(ボソツ)

『ん?どうした?』

「な、何でもないよ」

『そうか』

「こんにちは師匠」

『よう依姫』

「依姫さん!? ノア君一体何をしたの?」

『何で俺が何かしたみたいになってんだよ。依姫と豊姫が俺に弟子入りしたってただけだ』

「よっぽどすごいことしてた…」

「やつぱすげえよミカは」

少年A 「聞いたかよ」

少年B 「あああんな奴に依姫様が弟子入りしたって」

少年A 「あいつをボコしたら俺らが依姫様より強いってことになるんだな」

少年B 「ああ授業が楽しみだぜ」

〜授業開始〜

教師「これからお前たちには競技場に移動してもらい、こちらで決めた対戦カードで戦ってもらおう。もつとも得点が高かったものに報酬があるぞ」

全員

「はい」

〜競技場〜

『早速この対面か。すまないな魁斗、凜、依姫』

「なぜ謝るんだ?」

「謝らないでよー次があるじゃない」

「私たちでは師匠に勝てませんね…」

「…え?」

『早速やるか』パキツバキツ

俺は神鳳を抜き構えた。

「始めましょうか師匠」

そういうと依姫は早速接近してきた。突然のことだったので鏢迫

り合いになったが、俺が腹を殴ったことにより、その均衡はすぐに崩壊した。

「グフツ！さすがですね…」

「ヤベエな勝てる気がしないぜ」

「それでもやらなきやね」

『決死の覚悟でかかってきな』

「行くよ！」

凜はそういうと木製の小太刀で突っ込んできた。

『甘い！』

交わしてわき腹に拳をねじ込む

「俺を忘れてねえか？」

背後からストレートが飛んでくる

『くると思ってたぜ』

ねじ込んだ拳を引き戻し、回し蹴りを腕に当てる

「くっ、まだまだア！」

『オラア！』

拳同士がぶつかり、魁斗が吹っ飛ぶ

「隙あり、です師匠！」

『お前がなあ！』『無刀流「次元斬」！』

「きやあ！」

また依姫を吹っ飛ばした

教師「そこまで！勝者御神楽！」

『お疲れ様、吹っ飛ばしたりしてすまなかったな』

「恐ろしい強さだな」

「一撃で倒されちゃったよー」

「一回も攻撃を喰らわないとは…さすがですね師匠」

『速さが足りないな』

少年A「まじかよ…」

少年B「あんなのに勝てるわけないだろ」

『わかってくれたならいいんだよ』

A「いつの間にな？」

『お前らじゃ俺どころか魁斗にも勝てねえよ』

く何度かの試合後く

『次はお前か…ルーミアあ』

「怖いわね。でも二度も負けるつもりはないわよ?」

今回はここまで!次回は再びルーミア戦です!お楽しみに!

和人が再びルーミアと戦って、鬼子母神と会うらしいです

『次はお前か、ルーミアあ』

「怖いわね、二度も負けるつもりはないわよ」

『じゃあ始めようか：』

「ええそうね。最初から全力で行くわよ」

『今回は影の概念消さないから安心しな』

「そうそれはありがたいわね。ナイトバード！」

『ライトニング』

ルーミアは影の鳥を、俺は指先から雷を出し、相殺した

そして俺は一瞬でルーミアに接近して、

『無刀流雷光一閃』

「危なかったわね」

「なっ！今ルーミアさんどうやって避けたのよ！」

『影か：「ええそうよ」やっぱ厄介だな』

「貴方ほどじゃないわよ『零閃』危ないじゃない、人が喋ってる途中でしよう」

『いいじゃねえかお前なら避るって信じてたからなんだぜ』

「あら、ありがとね。私も貴方の技真似できるかしら」

『出来るんじゃないやね？一応俺の力お前に流れてんだから』

「やってみるわね」

ルーミアは影の刀を作り出して、

「零閃」

零閃を放った。

『紫電』

それを俺は同じ遠距離技で相殺した。

『やっぱ使えんじやねえか』

「以外にできるものなのね」

『それを言うんじゃないやねえ依姫はまだ完璧にできてないんだから』

「あら失礼」「ミッドナイトバード」

『ヴォーパルストライク』

ルーミアが作り出した先ほどのよりも大きい影の鳥と俺の突進攻撃は相殺されたかのように見えた。だが、実際は

『すまないな』

「ッ！危ないじゃない。少し掠ったわ」

『やっぱ避けんのかな』『君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ。完全詠唱波動の三十一赤火砲』

「きやああ！」

『1%解放完全詠唱だとやばい威力だな』

教師「それまで！勝者御神楽！」

「師匠そんな技まで持っていたんですね」

『使ってみたくなかったか？』

「はい！」

『だがまだ駄目ださっきの威力を出すには今の依姫の霊力量じゃ足りてない』

「そうなんですか…私もつともつと鍛えますね！」

『おうそのいきだ』

「ノア君本当に強いね！ルーミアさんも強そうだったけど」

「本当にルーミアさんお強いですね。師匠が私と姉さんでは勝てないと言っていた意味がわかりました」

「本当すごいなミカ。今のはどうやったんだ？」

『霊力を火に変えて放った。それだけ』

「それだけって…ハハ！ミカらしいな！」

「魁斗にも力で勝つちゃうし剣術も達人だし本当にすごいよね」

『年季が入ってるんだよ』

教師「今回の授業の最優秀者は御神楽だ。ダントツだったな。報酬は都市1の団子屋の一年間の無料券だ」

『あそこ一回行って見たかったんだよね』

「これにて授業を終了する」
「なあミカ早速だがこれ使って団子食いに行こうぜ」
『いいぜ。大食い勝負でもするか。お前らも来いよ』
「いいの? 『勿論』やったあ! ノア君ありがと!」
「行きます師匠」
『ルーミアも来いよ』
「わかったわ」

〜団子屋〜

『ここか…こんちやー』
「おお、いらっしやい。軍学校の生徒さんかい。好きなところに座ってくれ」
『おつちゃんありがとなつとちよつと待ってるよ』ドシユン
キイイーンシユタツ「この連れて行きかたなんとかならないかしら師匠? 少し恥ずかしいのだけれど」

俺は毎回毎回お姫様抱っこで豊姫を連れてきている。

『わかった。次回からは空間破って連れ出すよ』
「やっぱりこのやり方でいいです…で今回は何?」
『団子食おうぜ』
「それだけなの?」
『それだけってなんだよ楽しいぞ?』
「はいはいわかりました」
『おつちゃん、取り敢えず団子60個くれ』
「60!? わ、わかったちよつと待っててくれ」
「そんなぐらいなきや足りねえよな」
『負けた方は一回パシリな』
「いいぜ」
「このお店大丈夫かなあ…」
「ここは一応学校も支援してるらしいから大丈夫なんじゃない?」
「へえだから報酬がタダ券なんだね」
「貴方たちは一年生最初の授業だったのよね。最初の授業は確か…組

手だったかしら？で、やっぱり1番は師匠だったの？」

「そうですね。師匠は相変わらず圧倒的な強さでした」

「ノアに勝てる生物なんているのかしら？」

『いると思うぞ？（立場的に龍華とか）』

「師匠が負けるなんて想像もできませんからね」

～団子到着～

『んじや魁斗始めるぞ。その前におっちゃんまた60個追加で』

「またかい!?わかったよ」

『大食いに参加しない奴は好きに食ったり頼んだりしてくれ。魁斗の他に参加する奴はいないのか？』

「私もやってみるわ」

『いいぞルーミア。それじゃ始めだ！』

～30分後～

「も、もう駄目俺の負けだ」

「あら速いわね」

『少食だな』

「お前らがおかしいんだよ」

「ノア君の食べ方がおかしいんだけど、誰もツツコまないの？」

俺の食べ方はいわゆるキャプ食いという口元に持って行ったら消えたように見える食べ方をしている

「師匠ならこんな食べ方もするんじゃないかと思ひまして」

～20分後～

「ごちそうさまでした」

『ルーミアも終わりか』

魁斗は42本、ルーミアは167本、俺は256本食べた。

『ごちそうさまー、おっちゃんありがとな』

「また来てくれよな」

普通ここまで食べるともう来ないでくれってなるはずなんだが、おっちゃんがこう言うのには理由がある。俺たちの大食い勝負が騒

ぎとなったって、沢山の人が見に来ていた。その人たちが店の団子を買っていたので、また来いと言われているのだ。

『負けた魁斗君には罰ゲームのパシリがありますが、俺はその権限を好きな時に使うので今すぐってことはないです。』

「よ、よかったぜ。こんな腹いっぱいの方にパシらされたらたまったもんじゃないからな」

（ノアさん、お久しぶりです。奏鬼です。うちの村のリーダーが貴方に会ってみたいと言っていたので、ちよつと来てくれませんか？）

（ああわかった。今からそっちに向かう。）
（ありがとうございます。）

『ちよつと俺用事できたから行くわ。依姫とルーミアも来てくれ』

「ルーミアさんはわかりますが、私まで？」

『ああ。修行になるかもと思ってな』

『どんな修行ですか？』

『プレッシャーに耐える修行』

「え？」

『よつしや行くぜ、しっかり掴まってるよ2人とも』

「わかったわ」

「へ？きやあ」

『ほんじやお前らじゃあな』ドシユン

く壁外鬼の村の手前く

『おい奏鬼くいるかー？』

「おお、ノアさん来てくれたか。その2人は？」

『俺の弟子と式みたいなものだ』

「そうかい。お二人さん俺の名は奏鬼って言うんだ。よろしくな」

「ええよろしく」

「よろしくお願いします。師匠とはどうやって知り合ったんですか？」

「前に俺の村が食糧難に見舞われて、食料を探したらノアさんが来たんだよ。「それで襲って負けたんですか？」いや、襲ってない。」

ちよつと見てたら視線に気づいたノアさんが一瞬で俺の背後に来てたんだよ」

『2ヶ月くらい前のことだけど懐かしい気分になるな』

「村が食糧難だって話したら、無限食と水樹をくれたんだ」

「そんなことがあったんですね」

「本当にノアさんには感謝してるよ。旦那って呼んでもいいかい？」

『構わんぞ。そんじゃ村に向かうか』

　　～鬼の村～

『意外と栄えてんな』

「旦那のおかげだぜ。さ、鬼子母神様が待ってる。行きましょう」

『あの1番でつかい建物か？』

「そうだぜ」

　　～建物前～

トントン「鬼子母神様。ノア殿とそのお連れ様をお連れしました。」

「入れ

『失礼するぜー』

「お前がノアか？」

『如何にも』

「この度はこの村を救ってくれてありがとう。私の名前は神鬼茜って言うんだ。奏鬼が言っていたがお前相当強いらしいな」

『そんなことない。奏鬼が見ていた戦いも頭を使って戦っただけだからだよ』

「嘘をつくな。お前からは相当な力を感じられる」

『力を制御してんのに感じられるってすごいな』

「制御しているのか…ちよつと力を見せてくれないか？」

『嫌だよ。茜だつてこの村が壊れんのは嫌だろ？』

今回はここまで！次回は鬼子母神戦です。今まで無傷で勝っている和人に果たして鬼子母神は傷をつけられるのだろうか？次回に続く！

和人 V S 鬼子母神

『茜だつてこの村が壊れるのは嫌だろ?』

「壊れるほど柔なつくりじゃないぞ」

『力を解放すると霊力とかが地面とか空気とか揺らすから物が壊れちまうんだよ』

「それほどまでに強いと。その…ノアの弟子だったか?今は本当か? (威圧)」

「は、はい。私では本気を見たことがないのでわかりませんが。師匠ならそんなことが起こっても不思議じゃありません」

依姫はあのプレッシャに耐えられたか。

『おい、威圧感出して依姫虐めんな』

「すまなかつたな」

「い、いえ。ご心配なく」

「私と勝負してくれないか?」

『いつペン鬼とやってみたかつたんだよね。いいぜ?俺に傷をつけれるかな?』

「ここでは巻き添いがでる。場所を変えよう」

〜森の中〜

『ここら辺でよくね?依姫たちに結界張つとくか。依姫、ルーミア、奏鬼お前らまとまっつけ。九条無限結界』

「これで気兼ねなくやれるな」

『ああ。始めようか』

「行くぞ!」

茜はいきなり右の大振りで殴りかかってきた。

『いきなりか。よつと』

俺は後方に2メートルほど下がった。すると、地面に当たった茜の拳を中心に大きなクレーターができた。

『ものすごい威力だな』

「圧力を操る程度の能力。それが私の能力だ。」

『恐ろしいな。俺も行くぜ。二重の極み』

茜も同様2メートルほど下がった。するとやはり俺の拳を中心にさつきより大きなクレーターが出来た。

「お前も同じような能力なのか？」

『いんや？全然違うよ？俺の能力は森羅万象を司る程度の能力だ。』

「お前の方が恐ろしいじゃないか」

「ねえルーミアさん。森羅万象を司る能力がなんで恐ろしいんですか？」

「森羅万象を司るっていうのは全てのものを操ったり、壊したり作ったりできるのよ。だから恐ろしいのよ。ノアはあんな事実を隠してたのね」

「ふんッ！」

『てい！』

茜の気の入った掛け声と俺の気の抜けた掛け声とともに拳同士がぶつかった。

「ぐああああ！」

『まだまだだな』

「能力が発動しなかったのか？」

『いや違うぞ。お前の能力はちゃんと使用されてる。ただな…俺が堅すぎるだけなんだよ』

「それでも本気じゃないんだろ？」

『ああ』

「なら力尽くで本気を出させるだけだ！」

『やれるもんならな』

「三步必殺！」

1

2

3

「オラア！」

『ぶっ！』

茜の三步必殺が俺の鳩尾にクリーンヒットして、俺は血を吹き出した。

「師匠！」

「ノアがダメージを喰らったわね。」

『ゴブツ、ガハツ：固めときや良かったぜ』

「師匠が…」

『心配すんなよ依姫。俺はやられねえから』

「あれを食らってまだ普通に動けるか：化け物か」

『五分解放』

地面が振動し、俺から異様な雰囲気が発し出した

「五分：お前の本気は引き出せなかったようだな」

『：零閃編隊：30機！』

「ただでさえ威力の高い零閃を30機も…」

「オラオラオラア！」

茜は零閃全部に連打を当てて破壊した。

『桜花気刃斬！』

「ぐっ！」

『ナイトメアバースト！』

「ぐああああ」

『ツインマキシマイズマジック：チェインドラゴンライトニング！』

「ぐああああ！」

「いつにも増して本気ね」

「あんな技使つてるところ一回も見たことないですよ…」

『俺に血を吐かせたのはお前が初めてだよ』

「私は：負ける：訳には…」

『あれだけやってまだ動けるとは：ほんとお前は強いよ』

「…だ」

『どうした？』

「まだだ！」

『何ッ！』

「鬼神化ア！」

（さつきよりも力が増してる…）

『いいねえ！もつとだ！もつと俺を楽しませろ！』

「心なしか師匠の髪が黒くなってる…」

「ほんどね、さつき力を少し解放したからかしら？」

「三步必殺ウ！」

『五重の極みイ！』

俺たちの右拳は互いに強力な一撃を放ちながら、ぶつかり合った。

そして勝ったのは…

「ぐああああ!!」

『俺にここまで力を出させたのは本当にお前が初めてだ。』

俺だった。茜の右腕は技の威力が流せず、文字通り吹き飛んだ。

『本当強いよお前。『リカバリー』』

吹き飛んだはずの茜の腕はきちんと治った。

「これで五分つて本当に化け物だね」

『こんな星で、全力なんて出したら崩れちゃうから封印してるんだよ』

「そうかい…あんたみたいなのやつにやられたってんなら悔しくない

ね」

『で、依姫。今の戦いを見てどう思った？』

「師匠には悪いと思いますが、とても怖かったです」

『それでいい。素直に感想を言えるのはいいことだ。ルーミアは？』

「私じゃ茜にも勝てないわね。」

『茜。これで満足か？』

「ああ大満足さ」

『鬼は酒好きって本当か？』

「？本当だよ？」

『んじやあこれやるよ、俺が作った龍神の涙』

「いいのかい？」

『いいんだよ。いくらでも作れるし、まだまだ余ってるし。なんなら

在庫全部もらってくれ』

「それは有難いねえ！」

『じゃ、一旦村に戻るか』

く鬼の村く

俺は空間を切って、亜空間に置いてある龍神の涙を全て出した。

「今のはどうやったんだい？」

『ん？今のは単に空間を切って亜空間を剥き出しにしただけだぞ？』

「師匠！今度それ教えてください！」

『いいぞー』

「依姫の性格がノアの所為で変わってきてる気がするわ」

『ちなみにこの龍神の涙はアルコール度数99だから、酒にあんま耐性ないやつに飲ますと死ぬぞー』

「何を作ってるのよ…」

「この酒うまいな！」

『だろ？俺の自信作だ』

この後2時間程度茜と酒飲みながら話してた。

〜二時間後〜

『んじや都市に戻るわ』

「また来いよー」

「またなー旦那ー」

「奏鬼さん、茜さんさようならー」

〜都市に帰ってる最中〜

『いやー楽しかったな！』

「そうですね！」

「殺しあった後とは思えないはしやぎっぷりだったわね」

（気付いてるか？ルーミア、依姫。俺らは今数にして約30匹の中級上位妖怪に見られてる）

（ええ気がついてるわ」

（どうします？）

『俺らしく正面突破で』

「やっぱりね」

「師匠らしいです」

『おい！お前ら！出て来いよ。Do you wanna have a bad time?』

俺はガスターブラスターを五個作り出し、周りに向けて、紫電に手

をかけたいつでも抜刀でできるようにしている。
「チツバレてたか。お前ら全員でかかるぞ！」

〜20秒後〜

『なんだよあつけないな』

「あなたのそれが強すぎたのよ」

「そうですよ」

『そーなのかー』

「そーなのだー」

『「わはー」』

「何やってるんですか、師匠、ルーミアさん」

「私もちよつとふざけたい気分になったのよ」

『よーしちやっちやと都市に戻るかー』

〜外壁の門〜

『またお前か』

「またあなたですか」

『通してもらどうぞ』

「あなたと依姫様はいいですが、後ろのその女性はダメです」

『何故だ？』

「彼女からは妖怪の気配を感じます」

『それはこいつが俺の使い魔だからってただけだぞ？』

「そうなんですか？依姫様」

「そうよ。（師匠なんでルーミアさんを使い魔ってことにしたんですか？）」

『ほらな？（仕方ないんだよ。妖力に関してはその説明が手っ取り早いし、実際似たようなもんだから）』

「そうでしたか…失礼しました。通ってください」

『お勤めご苦労様だ。ルーミア、妖力は隠しておけ』

「ルーミアさんは森で拾った人間なんじゃないんですか？なんで妖力を持つてるんですか？」

やばいな…ここでバラすのはあんまり良くない。

『俺自身が妖力を持つてるんだよ。で、ルーミアには常に俺の力が送られてるんだが、その時に妖力も送られてんだよ』

「そうだったんですね」

よかった。これで納得してくれなかったら依姫の記憶を消すとかだった。

今回はここまで！次回は少し飛びますが、学年末テストです。

鬼子母神は和人の初めての相手になりました。（言い方やめろ）それではまた次回！

キャラ紹介

神の時の和人と人間の時の和人は違う人ってことにしておいてください。

神格時

名前：九条和人

この小説の主人公。天然女たらしで、容姿端麗、眉目秀麗

成績優秀。更には、料理は達人レベルで、家事もなんでもこなせる。

モテ要素で構成されてるような人間なのだが、何故か前世では全くモテなかったという。龍華に手を出したりすると、本気で殺しにくる。

能力：「森羅万象あらゆる事象を可能にする程度の能力」、「妖力、魔力、神力を無限にする程度の能力」、「1日経つごとに全ての力が1.5倍される程度の能力」、「ありとあらゆる術で達人になる程度の能力」、「怪我をしても一瞬で治る程度の能力」、「災害を司る程度の能力」

身長：190センチ

二つ名：想像と破壊の神、絶対神、絶影龍

嫌いなもの：大して偉くもないのに威張ってる神

人間時

名前：御神楽ノア

基本的に神の時と変わらない。

能力：「森羅万象を司る程度の能力」、「ありとあらゆる術を使いこなす程度の能力」、「怪我をしても一瞬で治る程度の能力」、「厄災をもたらす程度の能力」

身長：185センチ

二つ名：神速、生物内最強、伝説の英雄、炎雷帝

嫌いなもの：自分は何もしないのに部下にいろんなことをやらせる上層部の人間、コネで地位を手に入れたのに威張ってる人間

名前：九条龍華

立場的に兄に唯一勝てる存在。生まれた時から和人に大切にされてきたので、和人には絶対的な信頼を寄せている。和人を馬鹿にされるとキレル。

能力：「管理をする程度の能力」

身長：157センチ

二つ名：最高神、女神

嫌いなもの：兄を馬鹿にする生物全て

名前：成瀬魁斗

人間時の和人が作った初めての友達。よく「やっばすげえよミカは」と言っている。

能力：「衝撃を扱う程度の能力」

身長：2メートル

二つ名：筋骨隆々な鬼軍曹

嫌いなもの：不正をする奴

名前：秋月凜

魁斗の幼馴染。実のところ人間時の和人が好き。

能力：「刃物を扱う程度の能力」

身長：155センチ

二つ名：清姫

嫌いなもの：弱いものいじめをする奴

名前：綿月豊姫

和人の弟子で、以前よりかなり強くなった。和人をとても尊敬していて、和人のことが、人間として好き

能力：「海と山を繋ぐ程度の能力」

身長：女性にそれ聞く？だそうです。

二つ名：都市の素敵なお姉様

嫌いなもの：口クなことしない人間

名前：綿月依姫

和人の一番弟子。剣術は和人を除けば最強になった。和人をとて
も尊敬している。姉同様、和人のことが人間として好き

能力：神の依り代となる程度の能力

身長：158センチ

二つ名：超速の剣術使い

嫌いなもの：人のことを馬鹿にする人間

名前：ルーミア

和人に倒されてから、和人の刀に宿っている。この物語の準ヒロイ
ン

(ヒロインは未定) 和人の技を頑張れば使える。和人に信頼を寄せて
いる。

能力：闇を司る程度の能力

身長：162センチ

二つ名：闇の支配者、絶対神の使い

嫌いなもの：食べても美味しくない人間

名前：神鬼茜

和人に初めてダメージを負わせた。鬼たちの頭。自分よりも強い
和人が好き

能力：「圧力を操る程度の能力」

身長：165センチ

二つ名：鬼子母神、妖怪内最強

嫌いなもの：不正なことをする奴

キャラ紹介其の二

名前：八意永琳

和人が地上に降りてきて初めて会った人間。和人に家事を任せている。和人に信頼を寄せていて、和人のことが好き

能力：「あらゆる薬を作る程度の能力」

身長：162センチ

二つ名：月の頭脳

嫌いなもの：人を蔑む奴

名前：月夜見

龍華が生み出した5人の神の内の1人。和人を慕っている。

能力：「月を司る程度の能力」

身長：158センチ

二つ名：月の最高支配者

嫌いなもの：穢れ、身内に手を出す奴

名前：須佐男

龍華が生み出した5人の神の内の1人。和人に剣を教えてもらおうとして、瞑想をやれと言われ、瞑想していたら和人に忘れられた可哀想な奴。それでも和人を慕っている。

能力：「剣術を司る程度の能力」

身長：180センチ

二つ名：最高神

嫌いなもの：正しくない人間

名前：天照

龍華が生み出した5人の神の内の1人で、5人の中で最も強い。

能力：「太陽を司る程度の能力」

身長：159センチ

二つ名：太陽の引きこもり、最高神

嫌いなもの：特になし

名前：伊奘諾

龍華が生み出した5人の神の内の1人。月夜見よりも先に地上に降りていた。伊邪那美と結婚した。

能力：「国を作る程度の能力」

身長：170センチ

二つ名：特になし

嫌いなもの：伊邪那美に手を出す奴。

名前：伊邪那美

龍華が生み出した5人の神の内の1人。伊奘諾と一緒に月夜見よりも先に地上に降りていた。伊奘諾と結婚している。

能力：「生み出す程度の能力」

身長：157センチくらい（くらいっていうのは和人が記憶を辿り大体このくらいだろってので正しくはわからないのでくらいをつけた。）

二つ名：特になし。

嫌いなもの：伊奘諾を攻撃する奴

名前：蓬莱山輝夜

第14話で登場予定。後に和人とゲームで対戦しあう仲になる。

能力：「永遠と須臾を操る程度の能力」

身長140〜156センチ（140〜っていうのは初登場時、少女で後の登場の時と身長が変わるからだ。）

二つ名：蓬莱のヒキニート姫

嫌いなもの：勉強、努力（ゲームに関しての努力は率先してやる）、ゲームを馬鹿にする人

今回紹介した人たちの戦闘力紹介です。

永琳：1万二千。

月夜見通常時：18万二千。
全力（月の魔力吸収）時：39万8千。
須佐男通常時：36万。
全力（天叢雲発動）時：62万5千。
天照大御神通常時：43万4千。
全力（太陽のエネルギー吸収）時：88万8千。
伊奘諾通常時：25万三千。
全力（伊邪那美に手を出されてガチギレ）時：56万七千。
伊邪那美通常時：17万4千。
全力時：35万六千。
輝夜（幼少）：200
輝夜（成長後）通常時：19万
全力時：45万

輝夜との出会いと学年末テスト

「ノア君：ちょっと話したいことがあるの」

『どうした？永琳改まって』

「最近お偉方が娘に勉強を教えてくれっていうことで預かったんだけど、その子の性格がちよっとね…」

『なんだ？勉強やりたくないだとかそういうのか？』

「ええ：それでその子が目を離れた際に脱走してるのよ」

『オーケーわかった。わかってないけどわかった。俺が代わりに教えろってことか？』

「そうよ。あなたなら脱走できないでしょう。」

『俺の索敵範囲は世界一！「へえー」やめてなんか死にたくなるから』

「それじゃあお願いね」

～授業開始～

『俺は御神楽ノア。永琳に変わって勉強を教えてやる』

「あらそうなの。私永琳がいいなー」

『永琳だと脱走するだろ？お前』

「バレてるのね：私は蓬莱山輝夜よ」

『俺から逃げられると思うなよ？』

「わかったわ」

『永琳はどんな感じで教えてくれた？』

「一通り自分で解かせて、わからないところは教えてくれる」

『俺は物を教えるようなたちじゃないんだ。おーいえーりん！』

「どうしたの？」

『俺じゃ教えられないからやってくれ』

「それじゃあまた逃げられちゃうわ？」

『安心しろ。教えてる間は俺が後ろで見てるから』

「ならいいわ」

〜二時間後〜

『終わったな』

「お疲れ様でした輝夜。」

「疲れたわ：ねえノア？あなたなにか面白いこと知らない？」

『面白いことねえ：ゲームくらいしか知らないな』

「ゲーム？何かしら」

『テレビゲームだよ。わからないか。ならやってみるに越したことはない』

「面白いならやるわ？」

『めっちゃ面白い』

〜スマブラ対戦後〜

『輝夜が意外とうまかった件について。』

「一回も倒せなかったわ」

『俺はもう何年もやってるからな』

「次は絶対に勝つわ」

『かかってくるのだよ。返り討ちだ』

〜8ヶ月後〜

「もう勉強やりたくない！庇ってよノア」

「姫さま勉強に戻りましょう。ご自分のためです」

「勉強よりゲームやりたい。ノアゲームやりましょ？」

『勉強も大切だからな。今、勉強を中断して普段よりも短い時間しかゲームできないのと、すぐに勉強終わらせていつもより長くゲームするのどっちがいい？』

「長くゲームしたいわ」

『じゃあすぐ終わらせてきな』

「わかったわ！」

「ありがとねノア君。明日テストなのに大丈夫なの？」

『もちろんだ。勉強しないのにゲームやるなんて馬鹿のやることだからな』

「そう。なら良かったわ。明日のテストは、筆記と実技での総合得点とかで軍でどこまでの地位につけるかが決まるから。」
『へえーそうだったのか』

～翌日～

『眠い』

「どうしたミカ？寝不足か？」

「夜更かしは体に良くないよ？」

『いや、輝夜のやつがずっとゲームやめさせてくれなかったから。』

「そーいやお前のところ、お偉方の娘預かってんだったな」

『疲れたぜ』

「そんなのでテスト大丈夫？」

『速攻終わらせて残り時間を睡眠に費やしてやる』

～テスト開始～

『なんか分厚いと思つたら全教科一気にやるんだな。試験時間は大体五時間ぶつ通しか。余裕だない睡眠時間になりそうだ。』

『ちよつとずるいことしようかな。クロックアップ』

クロックアップと唱えると俺の周りの動きが遅くなった。否、俺が速くなったのだ。これは自分を結界で囲ってその中の速度だけ速くするっていう技だ。

～通常時間で20分後～

俺の中じや五分くらいしか経ってないけど、全部終わっちゃった。寝るか。

～五時間後～

『よく寝たなー』

「お前結局何分で終わったんだ？」

『20分』

「やばいな」

「あれを20分なんてすごいね」

『次は実技か。まあ頑張るか』

「大体入って来るときにやったやつがテスト項目だな」

『なら余裕だな』

く射撃終了く

「初めてやったけど、意外といけるものね」

『そっかルーミアはこれが初めてだったか。余裕だよな』

「そうね」

「やっぱりこの2人おかしい」

「俺も同感」

『次はくつと…格闘か』

「楽に終わりそうね」

『そうだな』

「…」

『ついになんも言わなくなったのか』

「いや…なんかもう…いいかなって」

くテスト完全終了く

『終わったな』

「そうね」

「そうだね」

「そうだな」

『帰るか』

「そうしましょう」

「テストの結果明日出るらしいよ」

『これで俺らが軍でどの程度の地位に立てるか決まるんだな』

「そうだな」

今回はここまで！次回は和人がテストの結果で啞然とします。
それではまた次回！

総隊長だ？バツカジャネーノ！

〜テスト結果発表当日〜

「私3番隊だつてさー」

「俺もだぜ。これからもよろしくな、凜」

「よろしくねー魁斗」

「私は1番隊のようね」

「ルーミアさんもでしたか。私もです」

「よろしくね依姫」

「よろしくです」

「そういえば1番隊の隊長のところは何も書いてないけどこれはどんな意図があるのかしらっ？」

「1番隊隊長は、昔から総隊長がやってるんですよ」

『俺の名前が…ない…』

「師匠！あれを…師匠が総隊長になってますよ！」

『マジで!?俺が総隊長!?バツカジャネーノ！月夜見の奴…もとよりこのつもりだったか』

「月夜見様と何か関係が？」

『ん？いやこつちの話だ。ちよつとしばかなきやらんやつがいるからちよつと行つて来るわ』

〜タワー最上階〜

『あいつを驚かせたいからな…ちよつとあれやってみるか』

俺は数歩下がってとても頑丈そうなドアに向かって飛び蹴りをした。

『おつ邪魔しまーつす！』

「ノア!？」

「ノア君!?何やってるの!？」

『永琳もいたのかちようどいいお前らに話が』

「な、何かしら？」

『月夜見さん？あなた前に俺に体調になれとかなんとか行つてやがっ

「たよな?。」

「え、ええ」

『俺が断った時からこのことを考えてたよな?』

「な、なんのことかしら?」

『正直に答えろ。さも無くばこの都市を半分消すぞ。』

「あなたが言うのとシヤレにならないわ!」

『すまんすまん。お前ら相手だといふざけたくなる』

「怒るわよ!?!」

「絶対ふざけてなかった:今の目は本気だった:」

『ごめんで。総隊長は引き受けてやるから怒んな』

「そう:ならいいわ」

「(ほっ)」

『それだけだから。ドア壊して悪かったな』

「ちよっ!直していきなさい!」

『じゃなー』ヒュン

「相変わらず速いわね」

く合流く

『月夜見に確認してきて、ミスじゃないことがわかった』

「師匠ならこうなりますよね」

『知ってた。「じゃあなんで…」遊びに行ってた』

「月夜見様が不憫で仕方ないです」

『いいじゃねえか。それにあいつも楽しんでたぞ?』

「楽しんでません!!!」

「なんか聞こえた気がするけど無視しとこう。だって気がするだけだもんな」

「御神楽ノア殿ですね?ちよつと来てください」

『なんだ?月夜見の部屋のドア壊したことか?』

「そのことではありません。この度前総隊長殿の退役により空いてしまった席にノア殿が着いたのですが、毎回総隊長は、他の部隊の人たちへの挨拶として、講堂で話をするのです」

『俺にやれと、「その通りです」オーケーわかった。任せとけ』
「よろしくお願いします」

く講堂く

アナウンス「これより新総隊長御神楽ノア殿より就任のあいさつが始まります。」

『俺が今回総隊長をすることになった、ノアだ』

何十人も俺のことを睨んできてる。ワーコワイナー（棒）

『俺が気に食わないやつが沢山いるようだが、俺は好きでこんなところにいるわけではない。だからといって譲るつもりもない。要するに…』

『俺がこの座についたことが気に入らん奴はかかって来い。いつでも相手してやる。勿論、この座をかけてな』

く終了後く

「何やってるんですか師匠！」

「本当あなたって頭はいいのに馬鹿よね」

『これで楽しくなりそうだ』

「呑気だなーミカは」

「相変わらずだねー」

『お前らも総隊長の肩書き欲しけりやかかってきてもいいんだぞ？』

「勝てないとわかってる相手に挑むほど私達は馬鹿じゃないわよ」

『ハッハッハ！そりや良かったぜ！』

今回はここまで！総隊長になってしまった和人は、これから何人の人間を相手にするんでしょうか。次回に続く！

最高支配者の兄と、人妖大戦開幕の兆し

俺が総隊長になってから16年経ったが、まだ月夜見に本当のことを話していない。忘れてもゲフンゲフン言うのを渋っていたのだ。

そんなことより、俺は今霊力を使つて飛ぼうとしている。

『これをこうして〜こうじゃ!』フワ〜ドシン

『また失敗かー』何をしてるんですか? 師匠』飛ぼうとしてる』

『以前飛んでませんでしたか?』

『あれは能力を使つてたからなんだよ。霊力でも飛べるようになったきたいからさ』

『私もやってみたいです!』

『オーケーまずは自分の中に白い塊をイメージしろ』

『次にそれを上に動かそうとしてみる』

『こうですか? あれ? 師匠みたいに浮かなかった』

『俺ももう一回やってみよ』

『これをこうして〜こうじゃ!』フワ〜

『凄いです師匠!』

『ようやく飛べたぜ』フワ〜トン

『依姫は今のを続けてて。俺ちよつと豊姫連れてくるから。』

『その必要はないですよ師匠』

『来てたか』

『面白そうなことしてるのね』

『お前もやるか?』

『勿論』

〜一時間後〜

「:」フワ〜

「:」フワ〜

『凄いな:もう飛べるようになった』

『やりました師匠!』

『やったわ』

「何やってるの？」

『おうルーミア。今霊力で飛ぶ練習してたんだよ。お前もやるか？』

「私は元から飛べるわよ？」

『衝撃の事実』

「知らなかった…」

「やっぱりルーミアさんは凄い人ね」

『俺ちよつと用事あるから出かけてくる。ルーミアも来てくれ』

「わかったわ」

くタワー最上階く

『お！ドア直ってる。そりや16年も経てば直ってるか』

そう言つてまた俺は後ろに数歩下がって…

「何をするつもり？」

『こうするの…さ！』

また壁にライダーキックを放った。

『おつ邪魔しまーつす！』

「ノア!? またですか!？」

『よう月夜見。ちよつと話すことがあるから来たぜ』

「それで何故ドアを壊すのですか!？」 『気分』 もういいですよ…」

『一応紹介しよう。こいつはルーミア。俺の刀に宿ってる使い魔? 式

? みたいなもんだ』

「よろしくね」

「こちらこそよろしくお願いします。それで? 話つて何ですか?」

『こつから先は俺らだけの秘密だ。絶対誰にも言わないって約束でき

るか?』

『約束できますが…もし誰かに言つてしまつたら?』

『消す』

「これ以上ないくらいの返事ね」

「わかりました…誰にも言いません」

『よし…お前らには俺の正体を教えようと思つてな』

「本当の…」

「正体？」

『ああ。お前には教えるべきだと思ったからだ「永琳には？」言うつもりはない。』

「で？あなたの正体って何？」

『その前に何個か月夜見に質問をしよう』

「はい」

『天照と須佐男は元気か？』

「(何故2人の存在を?) え、ええ元気だと思います」

『ここに都市を作るときに伊弉諾と伊弉那美にあつたか？』

「(他の2人のことも知ってる...) いいえ？会わなかったです。」

『この力に覚えはあるか？』

俺はそういうと、霊力から神力に切り替えた。

「ツ！この底が見えないほど膨大な神力：暖かくて包み込んでくれるような感覚：もしかしなくてもお兄様ですか!？」

『よく覚えててくれたな。久しぶり？月夜見。』

「お兄様！」ダキッ

『おっと：どうした？』

「何故今まで騙っていたのですか…」

『騙していたわけじゃない：立場上、地上に降りてくるには力を隠さなきゃならなかったからな』

「どういうこと？ノアの力が神のそれに変わってから月夜見の態度が急変したのだけれど…」

『俺は本当は御神楽ノアって名前じゃないんだよ。俺の本当の名前は九条和人』

「あの絶対神の？」

『そうだ。そして月夜見の兄でもある』

「初めて知ったわ：何故私にまで教えたのかしら？」

『これからお前とは長い付き合いになりそうだしな。だからだ』

「知らないうちに私は絶対神に挑んで負けていたのね」

『そうなるな。月夜見、ルーミア。これからもここにいる間は御神楽ノアとして扱ってくれ』

「わかりました」

「わかったわ」

『これからもよろしくな。2人とも』サワヤカイケメンスマイル

くその頃森ではく

「1ヶ月後に最大戦力を持ってあの都市に攻め入って、人間どもを食い散らかせ！」

妖怪たち 「「ウオオオオオオオ！」」

今回はここまで！次回は軍会議からの人妖大戦です。それではまた次回！

和人&ルーミア&綿月姉妹 VS 妖怪軍団

月夜見とルーミアに正体明かしてから1ヶ月が経った。
今は軍会議の最中だ。

「近年、この辺りに穢れが増えてきました。これを期に月への移住が決定しました」

「月への移住手段は何を使うんだ？」

「永琳博士が開発した、ロケットを使います」

「なるほど。永琳博士が作ったのなら安心だな」

永琳への信頼は相変わらずである。

『俺がこの都市周辺の索敵をしたところ、妖怪たちが、集合してきているのがわかった。おそらくこの都市を襲撃するのだろう』

「なんだと!?!」

「間違い無いんだな？」

『当たり前だ。おそらく、月移住のタイミングで襲撃してくるだろう』

「なんと…」

「それでは軍で向かい打ちしましょう。いくら妖怪と言えども数には勝てまい」

『それが、この付近に集まっている妖怪の数は10億体だ』

「なんだと!?!」

「それでは負けてしまう…」

『この度の妖怪大襲撃を俺の一番隊の最も優秀な奴らで向かい打つつもりだ』

「ふざけてるのか!」

「お前総隊長になったからって調子に乗ってきて無いか?」

『お前らのクソ雑魚隊が相手するよりもよっぽどましだ。俺1人でもこの都市の軍隊を相手取ることだって容易だ』

「この野郎!」 「よしなさい」 「月夜見様!?!」

「この人の言ってることは本当よ。彼一人でもこの都市を消すことができるわ。それに彼の隊には私より強い人が後1人いるわ」

「そんな筈は…」

『わかったか？雑魚は黙ってるよ。お前のようなやつが国を滅ぼすんだ』

「ぐぬう…」

『ついでに豊姫も借りてくぞ』

「ええ。編成は好きにしてください」

「月夜見様！何故このような奴に何故好き勝手やらせるのです?！」

「彼にはそれほどまでの実力があるということよ」

『文句があるんならかかってこいよ。就任の挨拶の時にも言ったろ?』

「わ、わかった」

『他に文句あるやつはいるか？いないんなら解散だ』

（永琳家）

『お前らは月移住作戦知ってるよな?』

「はい」

「ええ」

「知っています」

『その時に妖怪たちが攻め込んでくるらしい』

「どの程度ですか？千？万？その程度でしたら余裕では?」

『10億だ』

「じゅ、10億!?!」

「それでも余裕じゃないかしら?」

『その中の一割から二割は大妖怪の上位だ』

「それは…」

『まあそいつらの相手は俺がやるんだけどな』

「散らばって来たらどうするんですか?」

『こうやる。禁忌「フォーオブアカインド」』

俺が4人に増えた。

「…」

「これは…」

「相手が可哀想ね」

『ちなみに俺一体につき普段の俺とおんなじ力があるから』

「負ける気がしないわね」

『油断はダメだ。特に豊姫と依姫。お前らが心配なんだ』

『どうして!? 私たちは師匠の修行で強くなってるのよ!』

『それでも2人同時でルーミアに勝ててなかっただろう? ルーミアは一応大妖怪最上位だが、相手にももしかしたら同じくらいのやつがいるかもしれない。そんな時お前らに勝てるのか?』

「…」

「無理ですね」

『依姫が言ったように無理だ。それに俺らは四方に散らばってるんだ。俺かルーミアじゃなきや応戦に來れないぞ』

「わかりました…それじゃあ私たちは作戦開始までに何をすればいいですか?」

『作戦開始まであと三日だ。それまで瞑想をしている。それでようやくまともに戦えるだろう』

「わかりました…」

「はい」

『ルーミアはそいつを研いでおけ』

「わかったわ」

俺はルーミアに刀を作った。その名も「夜刀」「黒夜」。

能力は、壊れない程度の能力、影を斬撃で斬る程度の能力、影を斬撃として飛ばせる程度の能力だ。

ルーミア専用と言っても過言ではない。

〜三日後〜

『禁忌「フォーオブアカインド」。いいか?俺らは妖怪どもをロケットに近づけてはならない。わかってるな?』

「はい」

「わかってます」

「わかってるわ」

『それじゃお前らのところに俺を1人ずつ置いとくから。それじゃ…散

会！』

俺が1番でかい門、ルーミアが二番目、豊姫が三番目、依姫が四番目の門の前に到着し…

『きたか…』

「お前らいくゾオオオオオ！」

「ウオオオオオオオ！」

俺のところにはおおよそ5億程度の妖怪がなだれ込んできた。

『めんどくさいな。零閃編隊「60機」一機につき15体倒せ』

「ギャアアアアアア！」

それでも減ったような感じかしない

『1%解放…イオグランデ』

俺はイオグランデでおおよそ二千体の妖怪を倒した。

「あいつクソ強いぞ！全員でかかれ！」

『全員が相手でもかわらねえよ。「ブラックホール」』

また三千体程度の妖怪を消しとぼした

〜ルーミア視点〜

『よっしややるか！ルーミア』

「そうね」

「ウオオオオオオオ！」

…ここにはおおよそ三億体が来てるようだ。

「闇に沈みなさい。ノア直伝…ブラックホール」

悲鳴をあげるよりも早く二千体の妖怪を消しとぼした。

『俺もやるか。「破道の九十一，千手皎天汰炮」』

俺の背後から無数の光の矢が降り注いだ

この攻撃でおおよそ四千体倒した。

〜豊姫視点〜

「なんだ？俺たちの相手は女2人かよ（笑）」

ちよつとイラツときたな。

『俺は男だアアアア!!喰らいやがれ！「20連発月牙天衝オオオ！」』

「ギャアアアアア!!」

「恐ろしい威力ね」

今の攻撃で、まとまっていた妖怪たち七千体を倒した。

『グラビトンボム!!!』

追加攻撃で、さらに二千体を倒した。

〜依姫視点〜

「きましたね」

『そのようだな』

「人間達を食い散らかせ!!!」

「そんなことはさせません。「次元斬」」

今喋った妖怪の頭を切り落とした。

『恐ろしいことするなあ。依姫少し離れてろ』

「はい」

『厄災「徹甲弾の降る夜に」』

これは空から無数の徹甲弾を降らせる技だ。この攻撃で六千体の妖怪が吹き飛んだ。

「凄いですね…」

「隙だらけだぜ!」

「え?」

『依姫危ない!「烈風!」』

俺は咄嗟に一番速い斬撃を飛ばして依姫への攻撃を中断させた。

「ツ!助かりました師匠!」

「めんどくさい技が使えるんだな」

『あの雨からどうやって逃げた?』

「教えないよ」

『そうか…じゃあお別れだな。』

俺は即座に瞬歩で背後に移動して、妖怪の心臓を握りつぶして、燃やした。

〜和人視点〜

『どうやら他の俺が頑張ってるようだな。あれ?俺が一番討伐数少なくね?やばくね?』

「何をごちやごちや言ってるんだ『うるせえ』グチャ」

『雑魚どもがア！喰らいやがれ！「超位魔法フオールンダウン！」』

ゴオオオオオオオという音が聞こえ始めた。どうやらロケットが飛び始めたようだ。豊姫と依姫を中央に向かわせよう。

『豊姫！依姫！ロケット発射台へ至急迎え！』

『でも師匠！まだ敵が！』

『そうよ！敵が残ってるじゃない！』

『残りは俺の分身がなんとかする！今すぐロケットに乗るんだ！』

『師匠は!?』後から行く！』それなら私は最後のロケットに乗ります！』

『オーケーわかった。やってやろうじゃねえか！』

『オラア！喰らえや！「メドロア！」』

『リアリティ・スラッシュ！』

『次元断絶／ワールドブレイク！』

残り一体の妖怪を残して俺の4人の分身は消え去った。

『チツ、時間か。』

というのも、俺のこの技は借り物なので時間が決まっているのである。

『依姫と豊姫はとりあえずロケットに迎え。あとは俺とルーミアでなんとかする』

『わかりました』

『わかったわ』

『あいつらも向かったな。それで？なんでお前が参加しているんだ？
茜エー！』

『もう一度お前と戦いたくなかったからな』

『今回ばかりは消しちゃうかもしれないぞ？』

『それでもいい。もう一度お前とやりたいんだ。』

『もう全員乗ったぞ！出してくれ！』

『師匠！なんで！』

『永琳と月夜見によろしく伝えてくれ！』

ゴオオオオオオオ

「よかったのか？」

『これで気兼ねなくやれるってもんだろ？』

「そうだな！」

『じゃあ』

「さつさと」

『「始めますか！」』

『ルーミア！ちよつとだけ離れてろ！』

「わかったわ」

「鬼神化……」

『いきなりか。じゃあこっちも……喰種化』

俺は尾赫を8本出して、臨戦態勢に入った。

「こっちから行くぞ。」

そういうと、茜はものすごい勢いで突っ込んできた。

『ツ！くそっ！』

尾赫を盾にして茜の拳をなんとか受け止めた。

『随分と強くなってるようで』

「ああ。お前と再戦するためにつけた力だ」

『そうかよ……じゃあ圧倒的な力でねじ伏せてやるよ！』

「楽しもうぞ」

『いやだね！喰らいやがれ！「桜花気刃斬！」』

「くっ！オラア！」

『ゼリヤア！』

拳同士がぶつかり合い、2人とも同時に吹っ飛んだ。

『本当に強くなりやがって！』

「前より弱くなっただんじやないか？」

『ほう……言ってくれんじやねえか。ぶっ殺してやるよ！「ドラゴンラ

イトニングー！』

「ふん！」

『拳で雷を砕きやがった。俺もできるけどさあ』

「三步必殺！」

「七重の極み！」

『ぐああああ！』

また2人とも同時に吹っ飛んだ。

『クソが！「零閃編隊150機！」』

「オラオラオラオラア！」

『隙ありだぜ！「雷光一閃！」』

「ぐっ！」

『1%解放…メラガイアー！』

「ぐああああ!!」

『俺がこれだけやっても立ってられるって本当お前強いよ』

「勝ったと思うなよ！」「三步一撃！」

『きかねえよ！武装硬化！オラア！』

「クソ！」

今回は茜だけが吹っ飛んだ。

『勝てると思うなよ？』

「それでも勝つ！」

『そうか…なら仕方ない…『メドロア』』

「くそおおおおお！」

『なんでだ？なんで立ってられるんだよ…』

「思いが強いからじゃないか？」

『『ギガグラビトン』』

「どうした？まだ動けるぞ？」

『知ってた。だから少しばかりの足止めだよ』

「？」

『…『エヌマ・エリシュ』』

『破道の八十八『飛竜撃震天雷砲』』

「!?ぐああああああ!!」

茜の体は半分切り刻まれ、半分が焼け焦げていた。

『これで生きてるんだもんな。本当強いよ、お前は』

ヒューー

何かが落ちてくるような音がするので上を見た。

『原子爆弾!?!あいつらの後の人類に技術を残さないつもりだ! 茜!は動けないのか。ルーミアこっちに来い! すぐにだ!』

『どうしたの!?!』

『近くにいろ』

『わかったわ』

『一割解放!』

俺がそう宣言すると、地面が、空気が、雲が揺れていた。

『九条無限結界!!』

目の前に爆弾が落ちると同時にものすごい閃光と衝撃波に襲われた。

閃光と衝撃波は、俺の結界を何枚も容易く割っていった。

そこで、俺たちの意識は途絶えた。

今回はここまで! ついに都市編が終わりました! 次回からは旅編です。それではまた次回!

目が覚めたら二億年後だった。

「……お前は強い。お前がつけた力は人を誰かを助けるために使
うんだ。……」

(もちろんだよ親父。)

「……お前の力は誰かを傷つけるためのものじゃない。……
(わかってるさ。)」

「……もうこれ以上俺のようなやつを増やさないようにするんだ。
いいな?……」

(俺のような?何を言ってるんだ?)

俺は自分が今動けることを知り、動いて親父の顔を確認しようとし
た。

(親父?大丈夫か?)

ふと親父の背中から何かが出てることに気がついた。

「……これからは誰かを傷つけるんじゃない、誰かを救うために力
を使い!……」

(ツ!親父!背中から刀が!誰にやられたんだ!)

俺は親父の正面に行こうとしたら……

刀を親父に刺している俺がたっていた。

(俺が親父を?でもなんで……)

こうなった経緯を探ろうとすると、頭にもものすごい激痛が走った。

(くそっ!なんでだよ!なんで俺が!親父を殺さなきゃならないんだ
よ……)

「……いいか?……」

(親父?)

「……お前にも将来救いたいと思うやつが出来るだろう!……」

(親父!)

「……そいつに傷を一つも付けさせるな!……」

『親父!!』

「どうしたの?ノア。随分とうなされてたけど……」

『ルーミア……ルーミア!』ダキッ

「きゃあ！ど、どうしたの？」

『すまない…少しの間だけこうさせてくれ…』

「震えてるわ？大丈夫よ。恐ろしい夢を見ていたの？」

『ああ…』

「（ノアがこんなに震えてるところ見たことないわ）どんな夢だったの？」

『親父を俺が殺していた夢…』

「ツ！大丈夫。私がついてるわ」ナデナデ

『ありがとう…ルーミア…』

〜五分後

『ありがとう。落ち着いたよ』

「役に立ててよかったわ」

「えーともう入っていいかな？」

『ああ』

「見られてたのね」

「五分も人の前でいちやつきおつて」

『イチヤついてない!!』

「えー？本当かー？」

『殺す…』

「悪かった！悪かったから刀を抜くな！」

『わかった…で、あれから何日くらいだったんだ？』

「二億年だ」

『へ？二年？』

「二億年よ」

『ま・じ・で・す・か』

「私たちが起きてから三十年くらい起きなかったのよ」

『三十年も看病してくれただな…ありがとう、ルーミア』
「もちろんよ」

『流石に二億年もたつてると、植物が生えてきてるんだな』

「そうね」

「お前らはこれからどうするんだ？」

『ちよつと体がなまってるかもだからここで少し修行したら、とりあえず諏訪に行こうかなって思ってるんだよね』

「そうか。私はここでまた鬼の村を作ろうと思っている」

『互いに道は違えど進む道は決まってるんだな』

「そうだな」

『少ししか時間が残ってないが、これからもよろしくな』

「ああ！」

〜十年後〜

『行くぞルーミア！いざ行かん！諏訪の国へ！』

「茜。またね」

「ああ、またな！」

今回はここまで！ルーミアがヒロインっぽくなってきたんじゃないでしょうか？まだ決まってませんが。次回からは諏訪編です。

諏訪編

諏訪子思ってたよりもちっちゃいな

『諏訪ってここからどうやっていきやいいんだ?』

「知らないわ」

『どうやって行こうかなー。諏訪の手前まで飛んで行くか』

「そうしましょ。瞬間移動っていうのもありだけど景色を楽しみたいの」

『そうだな』

俺たちは取り敢えず飛んで進んだ。途中で幻想的な景色や、綺麗な滝を見つけたら、眺めたり、水遊びなどをして順調に諏訪へ向かっていた。

『ここからは歩いて行くか』

「そうね。誰かに飛んでいるところを見られたら道に入らないものね」

↳ 諏訪到着

『ここが諏訪か。案外栄えてんな』

「あそこで休憩しましょ?」

『そうするか』

俺たちは視界に入った団子屋で休憩と情報集めをする。

『おっちゃん、団子30個くれ』

「あいよ! あんちゃんら見ない顔だけど旅の人かい?」

『そうなんだよ。さつきここについたばかりでね、何か良い情報はないか?』

「そうだな…: そういえばこここの神様が出雲から帰ってきたみたいだね。って言ってもあんちゃんらには良い情報じゃないね」

『いや? かなり良い情報だ。これは情報量だ。ありがとう』

「こ、こんなにかい!」

『んじや行くぞールーミア』

「ええ」

〜洩矢神社前〜

『ここかな?』

「神様って言ったら神社でしょ?」

『悲報、創世神が神社持ってない件』

「それはあなたの責任よ」

『無情なり』

「上に誰かいるわよ?」

『あ? 誰だ?』

「行ってみましようか」

『まあ、そうなるな』

〜上到着〜

『君は誰だ?』

???' 「私ですか?」

『そうだよ (便乗)』

「私は東風谷紗枝です」

『俺は御神楽ノアだ。よろしくな紗枝』

「え、ええよろしくお願いします。」

『この神は奥にあるのかな?』

「そうですね:もしかして諏訪子様を攻撃しにきたんですか?」

『もしそうだとしたら?』

「私が止めます。『ほう君がかね?』ええ。あなた程度の霊力の持ち主であれば私でも勝てますよ」

『他人の実力を自分で決めつけるのは良くないよ?それに俺の本職は人間じゃないし』

「ツ!まさか!妖怪!」

『違うよ。正解を教えてやろう。創世神の授業だ。ありがたく受けろよ?』

「え?」

俺は霊力から神力に切り替えて、姿も変えてみた。

『これが俺の本当の姿だ。』

「紗枝!急に現れたこの力はなに!」

『お前が諏訪子か』

「お前は誰なんだ？この力の大元っぽいんだけど…」

『俺か？俺は御神楽ノア改め九条和人だ』

「創世神様!?!なぜこのような辺境の地に…」

『旅をしてるから』

「そちらの女性は？その方ももしかや最高神ですか？」

『こいつはルーミアだ。神なんてもんじゃない』

「ご紹介に預かりました。ルーミアです。影妖怪よ」

「妖怪!?創世神様!なぜ妖怪なぞを」

『こいつは俺の式みたいなものだ。それに誰を連れてようが俺の勝手だろ』

「も、申し訳ございませんでした」

『敬語やめてくれ。むず痒くて仕方ない』

「創世神様にそのような態度を取るわけには」

『俺がやめろって言うてんだよ』

俺は人間の姿に変わった。

『この姿なら良いだろ?』

「わかりま…:わかったよ」

(なあルーミア)

(なにかしら?)

(諏訪子が想像以上に小さかったんだが…)

(ほんとね、もう少し大きいと思ってたわ)

「ノアたち失礼なこと考えてない?」

『ナンノコトカナー』

「まあいいよ。それよりどうするんだい?これから」

『大体後に200年くらいここに滞在して、そのあとまた旅に出ようかな』

「泊まる場所はあるのかい?」

『ルーミアがいるからな…:俺一人なら最悪野宿でも』

「じゃあこの神社に来なよ。部屋は一部屋は空いてるんだけど、もう一部屋開けるとなるとちよつとめんどくさいかな」

『俺とルーミアは同じ部屋でいい。いいよな？ルーミア』
「構わないわ」

「わかったよ。それじゃあようこそ！諏訪の国へ！歓迎するよ！」
『これからよろしくな！諏訪子！』

く二ヶ月後く

『王手』

「また負けてしまいましたか」

『俺は生まれてこのかた将棋で負けたことないんだよ』
「すごいですね」

「なんじやこりやああああああ！」

今回はここまで！次回は諏訪子の特訓と諏訪大戦です。

それではまた次回！

諏訪子の特訓開始と諏訪大戦勃発の予兆

「なんじやこりやああああああ！」

『うるせえ』

「うるさいわよ」

「うるさいですよ」

「あ、ごめん。じゃないよ！ちよつと見てこれ」

『ん？なになに…諏訪の信仰をよこせ。さもなければ大和の全勢力を持って潰す…か。相手の勢力ってどんなもんかわかるか？』

「ええと確か200万の神兵と、50の神だね」

『どうだ？ルーミア』

「私1人じゃ無理だけど、あなたなら余裕ね」

『そうだな、その程度なら10秒あれば余裕だな』

「10秒!?あつちには武神の須佐男と最高神の天照がいるのに!」

『なんだ、須佐男と天照いんのか久しぶりに会いたいな』

「え？」

「あなた人脈広いわよね」

『お、そうだな。あの兄不孝者に1発入れてやりたいって思ってたんだ。大和への使者として俺が行こう。構わないか？』

「う、うんいいよ。お願いするね」

『開け渡すつもりはないよな？』

「もちろん！」

『ならば俺がその願いを叶えてやろう。行ってくるぜ』

～大和の国～

「その人間！生まれ！ここから先は関係者以外立ち入り禁止だぞ」

『俺は諏訪の使いだ。通してもらおう』

「そうだったか。正しい選択をしたんだな。よし通れ」

『?まあいいか』

～神々の会議室のようなもの～

『あんなところに壊して欲しそうな襖があるな…ならすることはひとつだろ』

俺は数歩下がってライダーキックをぶちかました。

『おつ邪魔しまーっす』

『何者だ！』

『諏訪からの使いでーす』

『そうかそうか。信仰を渡しにきたのか。うむ、正しい選択だ』

『私は天照。あなたは？』

『名乗るほどのもんじゃないですよ』

『そうですか。それにしてもあなたがた諏訪は賢いですね。あなたがたでは私達には勝てないと判断できた』

『俺らじゃお前らに勝てない？勘違いするなよ。今日ここに来たのは宣戦布告をするためだ。俺らに喧嘩売ったこと後悔させてやるためにな』

『なにをふざけたことを、あなた程度に我々が負けると？』

『だからそうだって言ってるじゃねえか』

『あなたは今絶望的状况に立たされていることに気づいてないのです？』

『それはこっちのセリフだ。『一割解放』』

俺は一割の力を解放した。二億年前よりも力は相当強くなっていくので、地面が激しく揺れ、空気が振動を起こしすぎて電気を発し始めた。

『お前らじゃ俺にや勝てんよ』

『ッ！なるほど。諏訪はとんでもない化け物を寄越したわけですね。諏訪に貴方のような力の持ち主がいたとは誤算でした。それでも私の全力には少しだけ劣っていますね』

『聞いてなかったのか？一割だって言ったんだよ。太陽ニートがそこまで成長してなかったとは思ってなかったぜ。いいか？よく聞け愚神ども。俺ら諏訪はお前ら大和に宣戦布告する！』

『愚かなのはそちらだ！』

『来いよ雑魚神ども。決死の覚悟でかかってきな！』

〜諏訪〜

「なにをやってるんだい！宣戦布告なんて馬鹿じゃないのか!？」

『いいや馬鹿じゃない。どちらかといえば天才だ』

「貴方の場合は天災よ、ノア」

『酷いぜルーミア。まああながち間違ってるないが』

「あんたに任せなきゃよかったよ」

『いいじゃねえか。一割解放しただけでビビるような雑魚神ども相手に加減なぞしなくてもいいだろ?』

「もうどうでもいいや…宣戦布告したからにはノアにも戦ってもらからね」

『もとよりそのつもりだ。その前に相手のどんな神と戦っても負けないくらいにまで鍛えなきゃな』

「そうだね。負けちゃ意味ないからね」

『俺がこつちにいる限りは大丈夫だ。負けなんてない』

「随分と自信満々に言ってくれるね」

「実際ノアは負けなしだからね」

「そうなのかい!?そりや助かるね」

『お、そうだな』

「修行つてなにをするんだい?」

『お前はなにを武器として使う?』

「これだね」

諏訪子はそういうと、鉄の輪を取り出した。

『鉄の輪か…特殊だな、それを効果的に使うんなら不意打ちだな』

「不意打ちねえ…私の能力を使って土煙を起こせばいい感じになるかな」

『そーいや諏訪子の能力聞いてなかったな。なんていうんだ?』

「私の能力は坤を想像する程度の能力だよ」

『なるほど…ならそれで行こう。お前にはこれから不意打ちの技術を叩き込んでやる。覚悟しろよ?』

「う、うん」

「安心して、ノアの修行は楽だから」

『そうだな』

「よかったよ」ホッ

『んじや明日から始めましょうかねー』

「よろしくね！」

『俺ちよつと散歩してくる』

「いってらっしゃーい」

俺は諏訪子たちにそう伝えて大和へ向かった。ルーミアがこつそり付いてきてるけど気にしないでおこう。

「もうバレちゃったわね」

く大和く

『こつからでいいか。神格化、絶』

俺は神格化して、気配を絶った。そして門兵にバレないように侵入して、アマテラスのところに向かった。

『ここだな。ん？あれは誰だ？』

そこにちようど天照が来た。

「神奈子ー諏訪からの使者怖かったよー」

「やめてください。天照様。他の神に見つかったら困るのは私なんですから」

「いいじゃないのくダメです。」わかったわよく

(あいつ神奈子って言うのか。)

「諏訪の土着神との戦いは任せたわよ」

「任せてください。絶対に勝ってみせます」

(諏訪子よりも圧倒的に強いな。このレベルまで鍛えてやるか)

「さつきからこちらを観ている者！出て来なさい！」

(一応人間に戻っておくか)

俺は人間に戻り、素直に出た。

『バレちゃったか。「貴方はさつきのー」覚えててくれたか』

「あやつは誰ですか？まさか諏訪の使い？」

『正解！それより天照さんや、俺が怖いようですね』

「き、聞かれてた」

『太陽ニートさんは怖がりなようだ』

「だ、誰が太陽ニートですか!」

『お前だよこの兄不孝者が!俺に黙って太陽に行きやがって!月夜見から後で聞いたわ!』

「どう言うことですか?なぜ貴方が私が黙って太陽に行ったことを知ってるんですか?」

『やべ、口が滑った。まあいいや。教えてやろう、この馬鹿妹。これが俺の正体だ』

『神化』

俺は天照の目の前で和人に変わった。

「ッ!?!お兄様!?!」

『驚き過ぎだ。月夜見は感動の再会みたいな感じで抱きついて来たのに』

「月夜見にもあったのですね。と言うことは月に行ったのですか?」

『いや?二億年前にはあいつ地上にいたからな。その時に会いに行つた』

「そんなにも前から…」

『もういいや。ルーミア!いつまでも隠れてんなよ』

「わかつたわ」

「!あいつが居たことに気づかなかつた!」

「神奈子でも気づかないくらいに気配を消せるとは…」

『あの程度の絶に気がつかないとはその程度か。』

「名も知らん神に言われたくないぞ!」

『ほう…お前程度の神が俺にそんな態度を取るとはな。お前はさつきのお話を聞いてなかったのか』

「なに?…」

『俺は天照の兄だ。名をば九条和人と言うんだが…』

「創世神!?!天照様の兄上はそのような方だったのですか!?!」

「そうよ」

「あれ?さつきの諏訪の使いが天照の兄上だったってことは相手陣に

いるってことになりますよね…」

『まあそうなるな』

「お兄様！なぜ諏訪なんかについてるんですか?!」

『気分だよ。それに大和なんかにつくよりもよっぽど楽しい。一つ絶対神からの頼みがあるんだが、その…神奈子だったか？お前が諏訪子と戦ってくれ。もし違うやつを出したら俺が消す』

「わ、わかりました…」

『それでいいんだ。よし帰るぞルーミア』

「わかったわ」

「お兄様は変わらないわね…」

く諏訪く

『これより特訓を始める！』

今回はここまで！次回は諏訪子の特訓と諏訪大戦勃発です。
お楽しみに！

諏訪大戦勃発!

『今日から特訓を始める!準備はいいな?』

「いいよ!楽しみだ」

『まずは飛驒まで走ってそのあと飛驒山脈の頂上まで走ってもらおうぞ
〜この程度だから余裕だろ』

「私もついて行くわ」

『おおい。走る人は多い方がいい』

「ほんとに飛驒まで行く気かい!」

『そのつもりだが? (よ?)』

「化け物か…」

『今更だな。こちらら10億の妖怪を倒してんだ』

「想像以上にやばい人達だった…」

「ひどいじゃない。化け物はノアだけで十分よ」

『俺の攻撃を二度も三度も避けた奴がなにを仰りますやら』

「話についていけないよ。とりあえず走るんだね」

『そうだ。疲れたら言えよ?止まって休むから』

「わかったよ」

〜飛驒山脈山頂〜

『いい景色だな』

「そうね」

「疲れた…」

『ここに家建てるってのもありだな』

「なにかと不便じゃないかしら?」

『俺たちなら不便とかなくね?』

「それもそうね」

「なんで疲れてないんですかねえ…」

『鍛えてるからだよ。依姫もこの程度だったら行けるだろうな』

「その依姫ってのが誰かは知らないけど他にも凄い人がいるんだ
ねえ」

『いや?あいつはまだまだだ。俺の攻撃を避けれないからな』

「判断基準がおかしい…」

『よし、それじゃ帰るぞー』

「ええ」

～諏訪～

『次は鉄の輪をずっと投げ続けてもらいます。命中精度がどれくらいか見たいからな』

「わかったよ」

～20分後～

『命中精度はそこそこだな。百発百中となるとかなり時間かかるから、9割当てれるように鍛えるか』

「なんなら手裏剣使わせれば？」

『そうだな。あれなら鉄の輪より投げにくいもんな。やってみつか』

「わかった」

～20分後～

『ガタ落ちだな』

「仕方ないじゃないか。初めて使ったんだ」

『まあ、そうなるな。これからはこれで鍛えよう』

「次はなにをすれば良い？」

『次は不意打ちの練習です。俺に当てれたら神奈子には必ず当たるだろう』

「ノアに当てるのなんて無理だけど頑張ってみるよ」

『がんばえー』

「2人とも頑張ってる」

『開始イ!』

「くらえ!」

諏訪子は巨大な岩の手を作り、蚊を叩くかのように手を振り下ろした。

『これだったら不意打ちされないようにこうするな』

俺はその手を壊して前に進んだ。

「なに!?!」

『攻撃時は隙ができるよな』

俺は諏訪子に回し蹴りをかました。

「ぐふっ！」

『まあそうなるな』

「やられちゃったかー」

『俺には通用しないからなー』

「それじゃあやりようがないでしょ」

『ならルーミアがやるか』

「良いわよ？手加減は出来るだけするわ」

「へえ、私一応神様なんだけどなー」

「それでも私より弱いでしょう？」

「ぐぬぬ…そうだけど…」

『頑張れよー』

『開始イ！』

「行くよ！」

「かかって来なさい」

「くらえ！」

「ダメね…「影縫い」」

「う、動けない!?!」

「ナイトバード」

「きやああ！」

「これじゃダメね」

「ぐぬぬ…」

『お前じゃまだ神奈子に勝てないな』

「これからはみっちり鍛えてあげるわ」

「お願いするよ」

〜一ヶ月後〜

『こんなもんだろ』

「そうね。私に当てられたなら神奈子にも当てれるわよ」

『そうだな。ルーミアと神奈子は大体おんなじかルーミアが上って感じだろ』

「頑張るよ！」

く 諏訪大戦会場？く

『ちゃんと神奈子が諏訪子と戦うんだよな？』

「もちろんです」

『なら良いんだよ。約束を守るってわかったからな』

「そうですか」

「じゃあ始めましょうか」

『ルーミアが待ちきれないって感じだから始めるか、戦争をなあ！』

「絶対お兄様に勝つ！」

『やれるもんならやってみやがれ！ドラゴンライティング！』

「アトミックフレア！」

『良いのか？初っ端からそんな大技使っちゃって』

「良いですよ。今回は負けられませんので！」

『ゼログラビティ！虚刀流薔薇！』

「くっ！なぜ止まらないのです!？」

『俺は今こっさり能力でお前の空気抵抗をなくしたんだよ』

『空気抵抗がなくて、無重力だと等速直線運動をするんだよ。つまり

お前は飛べなかつたら止まれねえんだよ！』

「なんだ、飛べば良いんですね」

『やっぱ飛べやがったか。零閃！』

「火炎刃！」

『酸素という概念を消滅』

「火が!？」

『酸素なきや燃えねえよなあ！』

ー ルーミアサイドく

「やつぱり200万の神兵相手はちよつときつかもね」

「お前が天照姉さんが言っていたルーミアか」

「そうだけど？」

「俺は須佐男だ、大和に敵対するものは倒す！」

「ちよつときつかいわね」

「くらえ！」

須佐男は上段から剣を振り下ろした。

「おっと危ないわね」

「流石にこの程度のは当たらんか」

「ノア！こつちに分身を一体貸してくれないかしら！」

『良いぞー！』『フォーオブアカインド』』

「どうした？仲間を助けを呼ぶのか？」

「いえ、あなたの相手を任せるのよ。私じゃ勝てないようだからね」

「ほう：逃げるのか」

「いいえ？戦略的撤退よ。その前に、くらいなさい！幻影「零閃」！」

「くっ！オラア！」

須佐男は零閃を真正面から受け止め破壊した。

「馬鹿力ね」

『剣術は勝手につけやがったか：まあいいや。無刀流「零閃」』

「ガツ！刀が無いのに斬撃を飛ばしただと!？」

『まあこれが剣術を極めたものの終着点だよ』

「まあそうなるわね」

「負けるかあ！『遅いんだよ。雷光一閃！』ぐああああ」

く和人サイドく

『そろそろ酸欠になってきただろ、戻してやるよ』

『酸素の概念を復元』

「ハア：ハア：危なかった：」

『隙だらけだな。「紫電」！』

「これは零閃と同じ飛ぶ斬撃ですか：危なかったですね」

『当たらなかつたか。とりあえず、メドロア』

「とりあえずで消滅魔法撃ちますか!?!アトミックフレア!!」

『1%未満で相殺か：たかが知れたな。時間を夜に変更。『星降る夜

ん』

「くっ!!メラガイアー!!!」

『喰種化：『鬼皇乱打』』

俺は尾赫を出し、天照に連打を浴びせた。

「きやああ!!」

くルーミアサイドく

『次元斬!』

『草薙剣!』

『紫電!』

『零閃!』

『紫電は零閃よりも威力が高いんだよ。俺とお前の実力差があれば尚更な』

『くそ!天叢雲剣!』

『鬼神化ア!鬼神乱刃!』

『クソオオオオ!』

『オラオラア!どうしましたかあ?弱いですねえ?おかしいなあ』
『ムカつく!』

『これを待ってたぜ。お前の負けだ。ルーミア離脱だ!極大五芒星魔法『マダンテ』!』

『わかったわ!』

『なに!』

『周りのやつごと吹っ飛ば!』

俺はマダンテで周りの200万の神兵ごと須佐男を消しとばした。

『終わったな』

『そうね』

『あー疲れた、こんなに疲れたのは久しぶりだよ』

『ほんとお疲れ様、助かったわ』

く和人サイドく

『何ですか!?!あの大爆発は!?!』

『どうやらあつちは終わったようだ。ならこっちも終わりにしよう』
『負けません!』

『遅いんだよ』

俺は瞬歩で天照の背後に回り込んだ。

『虚刀流「雛罌粟」から「沈丁花」まで打撃技混成接続』

「カハッ！」

『縛道の六十三！鎖状鎖縛！』

『超位魔法！ソード・オブ・ダモクレス！』

「きやああああ!!!」

『終わりだな』

『そろそろ諏訪子たちにも始めてもらおうか…』

今回はここまで！次回は諏訪子対神奈子です！

お楽しみに！

洩矢神社壊滅の危機!?

『そろそろ諏訪子たちにも始めてもらうか』

「そうね」

『おい諏訪子くそろそろ始めろよー』

「わかってるよ。そっちは？」

「天照様と須佐男様はどうした！」

『殺った』

「殺ったわ」

「早いねえ」

「馬鹿な!?!あの御二人が負けたのですか!?!ほかの神兵どもは？」

『須佐男と一緒に吹き飛ばした』

「すごかったわよ」

『もういいだろ、始めるぞ』

「行くよ！」

「ああ！」

諏訪子は神奈子に鉄の輪を投げて攻撃した。

「それじゃあダメだね」

神奈子は御柱を作り出し、鉄の輪を防いだ。

「やっぱり防ぐよね、ならこれはどうだい!?!」

諏訪子は地面を吹っ飛ばし、不意打ちをしようと近づいた。だが諏訪子はこの時まで気づいてなかった。神奈子が背後に御柱を作り出していたことに。

『諏訪子が負けるな』

「そうね」

「くらえ!!」

不意打ちが完全に決まると思っていた諏訪子は防がれてしまい動きが止まった。

「なに!?!」

「おりゃー！」

神奈子は御柱を諏訪子に降らせて勝負が決まった。

『終わったな』

「くそっ！私のせいで！諏訪が…」

「諏訪の信仰はもうぞぞ」

『だが一つ問題がある。諏訪子…いやミジヤグジは崇り神であり、諏訪の人間は信仰の対象を変えてしまうとミジヤグジの崇りがあると恐れている。さてこれはどうしたもんかなー』

「ノア、解決策は考えてるんでしょ？」

『勿論だ。表向きの業務は神奈子がやって、実際は諏訪子がやるつてのでいいんじゃない？』

「そうだね。それがいいと思うよ」

「ノア…ありがとう！」ダキッ

『よしよしどうした？』

「私…神奈子に負けて…自分の国も守れなくて…」

『もう大丈夫だ、お前と神奈子が力を合わせればどんな局面でも立ち向かえるさ』

「お前は意外と優しいんだな…」

『意外には余計だがそうだな、俺は優しいのかも知れない。どう思うよルーミア』

「あなたは戦闘だと優しくないけど普段は結構優しいわね」

『優しくない方がいいかな？』

「絶対！今の方がいいよノアは！」

「そうだな。私もそう思うよ」

『そうかならこのままでいいか』

「そうねそのままの方がいいわね」

『神社の名前は少し変えた方がいいな』

「そうだね」

「じゃあ洩矢を守矢に変えればいいんじゃないかしら？」

『いいなそれ』

「それで行こう」

く翌朝く

「神奈子！それ私のおかずだよ！」

「早い者勝ちだよ」

「やんのか!?!」

「上等だよ!」

『…』

「あ…」

「あの…」

『君達?』 超絶スマイル

「は、ハイハイ!」

俺は諏訪子と神奈子の取っ組み合いによつて宙を舞っていた味噌汁を頭からかぶった。

『表出ろや!教育してやるよ!』

諏訪子と神奈子を庭に連れ出し、

『破道の三十一!赤火砲!』

赤火砲をぶちかました。

『食事の場で喧嘩してんじやねえよ!』

「ご、ごめんなさい…」

『わかればいいんだよ、わかれば。』

諏訪での楽しい日常が今日も続く

今回はここまで!次回は旅に出ます!お楽しみに!

死、そして旅立ち

諏訪に来てから大体三年の月日が経った。

諏訪では今、力自慢大会のようなものと、格闘技の大会のようものが行われている。

「さあ！始まりました、力自慢大会！今回の優勝商品は…諏訪の三大美女、東風谷紗枝さんとのデート券です！」

男衆「ウオオオオオオオオ！」

なんか紗枝とのデートの権利で盛り上がっている。紗枝が苦笑いを浮かべている。それでいいのか、紗枝よ。

「皆さまごぞつて参加くださいー！」

「俺が一番のりだ！」

あの男は50キロを持ち上げて声を荒げた。

「50キロが出ました！さあほかにいませんか？」

「俺がやるー！」

この男は100キロを震えながら持ち上げた。

「100キロ！素晴らしい記録だ。ほかにいませんか？」

「100キロだと…俺には無理だな」

「俺もだ」

「俺も」

男どもは100キロ以上を持ち上げられないようだ。紗枝が嫌な顔をしていたので、俺が出ようとしたところ、

「俺がやるよ」

この男はとても不清潔感が漂っていて、紗枝はすごくデートしたくなさそうだった。この男が立ち上げたのは230キロ。

「230キロ!?230キロが出ました！ほかに挑戦する人はいますか？」

このままではこの男が勝ってしまうので、俺は神鳳と紫電を亜空間にしまい、参加することにした。

「それでは…この男の優勝でよろしいd『俺がやろう』ここに来て新たな挑戦者だ！」

『ここで一番重いのは何キロだ?』

「700キロが2つ」

『じゃあそれ2つとも付けてくれ』

「無理しないでいいんですよ?」

『無理をしてるだど?この程度だろうが』

「:わかりました、どうなっても知りませんよ」

『どうもならないよ』

俺は軽々と片手で1400キロを持ち上げた。

「片手!?1400キロを!?こ、これ以上重い重りが無いので強制的にこの男性が優勝となります!」

「ノアさん!」

『よう紗枝』

「ありがとうございます。」コソツ

『気にすんな』

「お二人は知り合いのようですが、どんな関係ですか?」

男どもの嫉妬の視線がめんどくさいので、早く帰ろう。

『俺は今神社にお世話になって、紗枝はその巫女さんなんだよ。』

『その程度』

「それじゃあノアさん。早速デートを始めますか」

『そうだな』

俺たちは早速デートを始めた。

「そういえば今日は力自慢大会の他に格闘技の大会のもやってるんですよ?・やります?」

『よっしゃやってみつか』

く格闘技大会会場く

「さあ!盛り上がりすぎてまいりました!ただ今連勝中のプレイヤーがこの人!全戦全勝の敵なし!彼に挑むものはいるのか!」

『俺がやろう』

「おっとここで美少年の挑戦だ!幸運祈る!」

『よろしく』

「その綺麗なツラを今すぐにぶっ潰してやりたくなるよ」

『怖いねー』

『それでは…始め!』

『オラア!』

『遅いなー。虚刀流飛花落葉!』

『グツ!』

俺がみぞおちに両手の掌底を打ち込んだら、倒れて動かなくなつた。

『あつけないなー』

『す、すごいですね!』

『普通だな。こんななら帰ろうか?』

『私もやってみたいわ』

『ここで美女の参戦だ!』

『お前も来てたのか…ルーミア』

『2人には何か繋がりがあるようだ、それじゃあ始め!』

『行くわよ』

ルーミアはいきなり飛び蹴りをして来た。

『危ないなあ、雷鳴拳』

俺は雷をまとった拳で攻撃した。

『あなたもね、当たったらタダじゃ済まない威力ね』

『それでもないぞ。蹴突。』

俺は足に力をためて、一気に地面を蹴って直線蹴りを放った。

『カハッ!ぐっ!恐ろしい速さと威力ね』

『まずはワンヒットだな』

『ダークフィスト』

『三步一撃、雷鳴拳』

ルーミアの闇の拳と俺の雷を纏った三步一撃がぶつかり合ってルーミアが吹っ飛んだ。

『きやああ!』

『まだ倒れないんだもんな』

『当たり前でしょ、まだ始まったばかりだからね』

『武装硬化、鬼皇乱打』

ルーミアは拳があたるギリギリまで動かなかった。

「降参よ」

『危ないな、ギリギリまで溜めるんじゃないよ』

『あなたなら止められるでしょ？』

『まあそうなるな』

「またしても、派手な技が決まり、美少年が勝った！」

「こうなるでしょうね」

「こうなりますよね」

『まあ、こうなるな。飽きたから帰ろうぜ』

「そうですね」

「そうですね」

く守矢神社く

『たっだいまー』

『たっだいまー』

「たっだいま戻りました」

「お帰り」

「紗枝どうだった？力自慢大会は」

「ノアさんが優勝しましたよ」

「ノア：参加したのかい？」

『？なんかダメだったか？』

「いや：いいんだよ、で、何キロ持ち上げたんだい？」

『確か：1400キロ』

「もう驚かない。驚いてなるもんか」

「さすがだね、どうやってそんな筋力をつけたんだい？」

『長年の筋トレの成果と言っておこう。』

「そういえばあなた前に刀がとても重いつて言ってたけど、大体一本

あたり何キロなの？」

『大体：2トンくらいだな。紫電に関しては3トン。人間に使うとき

は重さ消してるけどな』

「普通に考えて2トンで叩かれたら死ぬわね」

「想像以上にアレだった：」

「すごいねえ」

『使ってる材料とかで仕方なくてね、神鳳に使ってる金属は、256倍圧縮チタン合金と緋緋色金を使ってるから必然的に重くなる。』

紫電は6倍圧縮グラドニウム、ミスリル、黒夜石を使ってるから神鳳よりも重い。』

「途中なんだかわかんないものが出て来たけど、緋緋色金と黒夜石を使ってるのか。伝説の鉾石を使うだなんて、贅沢だねえ」

『俺が創った石だからな、いくらでも生産できる』

「ええ!? 伝説の鉾石を創ったって!？」

『そうだよ（便乗）』

〜180年後〜

飛びすぎだった? 知ってた。

紗枝が不治の病にかかった。

何故180年もたっているのに紗枝が生きているのかって? それは紗枝の能力だからなのだよ。

不老である程度の能力。

紗枝は結婚し、子供を産んだ。

「お母さん! いやだよ… 死なないですよ…」

彼女の名前は東風谷沙奈。紗枝の娘で、10歳だ。

「紗枝… 死んじやだよ…」

「ノア、お前の能力で救えないのか?」

『俺の能力じゃ無理だ。（大嘘） 限度がある』

「くそ…」

「ノアさん、諏訪子様、神奈子様、ルーミアさん。今までありがとうございました。私はとても幸せでしたよ…」

『ああ…』

『東風谷紗枝、現時刻を持って臨終だ。』

「紗枝ええええ!」

「お母さああああん!」

「紗枝…」

「お疲れ様…」

(貴方なら生き返らせることなんて容易いでしょう？何故やらないの？)

(そんなことをすれば、人間の定義が崩壊する。だからやらない。)

(そう…貴方は本当にいい人よ)

(ありがと)

俺は、徴兵で出て行った紗枝の夫に会いに行き、ぶん殴った。そして、紗枝が死んだことを伝え、諏訪に戻った。

『俺らは旅に戻るぜ』

「そうかい…」

「寂しくなるね」

「ノアお兄ちゃん行っちゃうの!?!」

『ああ』

「あのね、お母さんがね、伝えてって言ってただけど…お母さんはずっと前からお兄ちゃんのことを好きだったんだって」

『ツ…そうだったのか…』

「行きましょうか…」

『そうだな』

今回はここまで！次回は旅の道中の話です。

次回もお楽しみに！

聖徳編

雑魚妖怪に出会いすぎる旅

『どこに行こうかな』

「行くあてがないならとりあえず西に行きましょう?」

『そうだな、それでもダメだったら外国行こうか』

「そうね」

「あんなところに人間が2匹いやがるぜ」

「久しぶりの飯だな」

『楽しみだぜ』

「そうだな、俺の合図で一斉に襲うぞ」

「わかった」

『よし』

「じゃあ行くぞ…ってお前誰だ!」

『ありやくバレちゃったか』

「こいつさつき見つけた人間のうちの1匹だ」

『もういいやお前ら消えろ。破道の三十一、赤火砲』

「ギャアアアアアアア」

「あつけないわね」

『まあ、そうなるな…あつしまった!こいつらにこの近辺の情報聞くの忘れてた!』

「もう仕方ないわ、とりあえず行きましようか。」

『お、そうだな』

〜20分後〜

『また雑魚妖怪に見られてるな』

「さつきのやつらとは違ってたくさんいるわね」

『それでも雑魚には変わりないけどな』

「人間だ!行くぞ!お前ら!」

妖怪たち「よっしやああ！」

『ドーモコンニチハ、サヨウナラ。イオグランデ』

妖怪たち「ギヤアアアアアア!!」

「本当にあっけないわね」

『固まってる逆にやりやすい時つてあるよな』

「じゃあまた歩きましょうか」

『そうだな』

〜30分後〜

『村みつけ』

「あら本当」

『ちよつとお邪魔させてもらって、情報収集でもするか。』

「そうね、ちよつとお腹も空いてきたし」

俺たちは村に入っつていった。

「あんたらなにもんだい？あんちゃんの方からいやな感じがするんだけど」

『俺は陰陽師をやってるんだよ。こつちのは嫁さん』

(ちよつと！なに口走つてんのよ！／＼)

(しようがないだろ、こうでも言わなきゃ通してもらえなさそうだったから)

(それにしても嫁さんつてなによ！／＼)

(すまん嫌だったなら謝る)

(別に嫌つてわけじゃ…)

「そうだったのかい！陰陽師さんかよろしくね」

『よろしく。俺の名前は御神楽ノアだ』

「俺はこの村の村長だ、何か聞きたいことがあったら言ってくれ」

『じゃあ1つ、なんかいい情報はないか？』

「そうだなあ…なんでも、10人の話を同時に聞けるつていう聖徳太子つて人がいるらしいよ」

『どこの国にいるかわかるか？』

「奈良の方だつて聞いたよ」

『ありがとう、とりあえず今日はこの村で一泊させてもらおうか』

「ええ、そうね。そういえば、二百体の中級妖怪がこの村に向かってきてるわよ」

『いつ頃ここに着きそうだ？』

「今夜ね」

『とりあえず村長に伝えるぞ』

『村長』

「なんだ？」

『この村におよそ二百体の妖怪が向かってきてる。村で戦える男ども以外は家の中に入るように伝えてくれ』

「あ、ああ！わかった！俺たちで対抗するんだな」

『いや？あんたらには村人が入ってる家の守備だ、妖怪の退治は俺がやる』

「二百体をか!？」

『そうだ』

「もし村になんかあったら…」

『なにも起こらんよ。逆にあんたらがいたら殲滅できなくなる。そっちの方が村に被害がくるぞ』

「わ、わかったよ」

く夜く

『きたな』

妖怪たち「行くぞオオオオ！」

俺は炎と雷を纏った。

「なんだよ、人間。お前1人か。」

『俺1人で十分だからな。これから起こるのは、お前らによる人間虐殺じゃない。俺による一方的な蹂躪だ』

「嘗めんなあ！」

『散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪 動けば風 止まれば空

槍打つ音色が虚城に満ちる…破道の六十三雷吼炮』

「ギヤアアアアア」

「全員でかかれ！」

『まともまってくれてありがとう。破道の三十一…赤火砲』

妖怪たち「ギヤアアアアアア!!」

「…炎雷帝…」

『終わりか…つまらないな』

「お疲れ様」

『ああ…』

「ノア殿、村を救っていただき、ありがとうございました。あなたをこの村の守り神として崇めたいのですが…」

『それなら御神楽ノアじゃなく、九条和人を崇めてくれ』

「それではあなたが…」

『間接的に俺にくるからいいんだよ』

「そうですか…わかりました」

『それじゃあもう寝るか』

「そうね」

今回はここまで！次回は聖徳太子登場です。

次回もお楽しみに！

聖徳太子が現れた!

『そんなじゃ奈良に行きますか』

「そうね、どんな街なのか見てみたいわ」

「お二人さんありがとうございます」

『例には及ばんよ』

「この人は戦闘狂だからやらせとけばいいのよ」

『まあ、そうなるな』

「そうかい：お気をつけて!」

『あんがとよー』

『こつから歩いてくのもめんどくさくなってきたから、空飛んでくか』
「そうね」

『：乗ってく?』

「乗るって?」

『俺に乗ってくか?』

「どうやって?」

『こつやる』

俺は黒い龍に変身した。見た目はモンハンフロンティアの黒レイ
ア参照

「じゃあ乗らせてもらうわ」

『行くぞ!』

「きゃあ!」

「すごい楽しいわ!」

『そうか。楽しんでもらえて何よりだ』

「もう奈良が見えてきたわ!」

『そろそろ人間に戻るか』

人間の姿に戻った。

『ふう』

「あの龍の変身ってどうやったの?」

『俺半神半龍なんだよ』

「そうだったのね、楽しかったわ！ありがとう」
『また言ってくれればいつでもやってやるよ』
「じゃあまたお願いするわ」

『任せとけ』

～奈良～

『着いたー』

「あっちになにかあるわ、行ってみましょう！」

『こらこらそんなにはしやぐとぶつかる…』

「きやあ」

やっぱりぶつかってこけた。

「おいどこみて歩いてんだ」

「ごめんなさい」

「いい女じゃねえか」

「ちよつと俺らと遊ばないか？」

「ちよ、ちよつと…」

「いいじゃねえか」

『良いわけねえだろ』

「あ？誰だお前」

『こいつは俺のツレだ、手エ出してんじゃねえよ』

「なんだと…！」

『お前らごときにこいつは勿体ねえよ』

「この野郎！」

『遅いな、虚刀流薔薇！』

「ぐああああ」

～???視点～

「なにやら先程からあちらがうるさいですね、行ってみましょうか」

『虚刀流薔薇！』

「ぐああああ」

「何をやってるんですか!?!」

『あ?』

〜和人視点〜

「何をやってるんですか!？」

『あ?』

なんか怒られた。

「何をやってるんですか!？」

『突っかかってきたからちよつと飛ばしただけだ』

「ちよつとつて10メートルほど蹴り飛ばしてますけど!？」

『やろうと思えば跡形もなくできるが：やってみるか?』

「やめてください!」

『まあまあ怒んなよせつかくの可愛い顔が台無しだ』

「へ!?!／／／」

「新たな犠牲者が：」

『どうした?顔が赤いぞ?風邪引いたのか?』

「なんでもないです!／／／」

『そうか。俺たちは今聖徳太子つて人を探しているんだ』

「あ、それ私ですね」

『へー、そーなのかー』

「何ですかその適当な返事。それよりもあなた：一体何者ですか?」

『はて何のことやら』

「あなたの欲が読めないのです」

『そりや俺の能力のせいだろうよ』

「それはどんな」

『自分に対するありとあらゆる他人からの一切の能力を無効化する』

「それは：私が欲を読めない訳ですね」

『まあそうなるな：』

「ノア!お腹すいたから団子屋行きましよ!」

『そうだな。じゃあな』

今回はここまで!次回は聖徳太子宅侵入ミッションです

次回もお楽しみに!

聖徳宅侵入ミツシヨン

「都市の団子屋さんも美味しかったけど、ここのも美味しいわね」

『そうだな。おっちゃんみたらし20個くれ』

「わかったよ」

「ほんとみたらし好きね」

『そうだな、あの甘じよっぱい感じが好きだな』

「私は海苔団子派ね」

『結論。団子はうまい』

「いろんなお店の団子を食べてきたけど、あなたが作ったのが一番美味しいわ」

『そりやどうも』

〜30分後〜

『腹ごしらえも済んだし、ちよつと町を歩いたら聖徳太子に悪戯してみるか』

「やるんなら夜にしましょう？そっちの方が雰囲気が出るわ」

『まあ、そうなるな』

『諏訪ほどじゃないけど榮えてんな』

「そうね、案外人で溢れてるわね」

『そーいやルーミア』

「何かしら？」

『人間って美味しいのか？』

『どうしたの？いきなり』

『いや、お前って一応人喰い妖怪じゃん？そんなもって結構な美食家じゃん？』

「そうね：個体によるとしか言いようがないわね」

『今度食ってみよ』

「お腹壊すかもしれないわよ？」

『俺も一時的に喰種になれるから多分大丈夫だろ』

「喰種ってどんなの？」

『前に俺から尻尾みたいなの出てただろ？ああいう奴』

「そうだったのね」

『もう暗くなってきたから、作戦開始だ』

「楽しみましょう」

〜太子宅前〜

『こっから絶だ』

「わかったわ」

俺らは気配を消して屋敷に侵入した。

「どうなされました太子様？お気持ちが悪くないのですか？」

「屠自古…いえ、そういう訳じゃないのですよ。昼に会った少年が気になって…」

「恋の病でしょうか？」

「そうではないのですよ。能力が効かなかったのが少し気になってしまっただけです」

「太子様の能力がですか。でもそれは少年の能力のせいだって言っただけじゃないですか」

「そうなのだけれど…」

(もう隠れなくていいか)

『気にすんなよ』

「ッ！曲者ッ！」

『えっ!?どこどこ?』

「お前だ！」

『何だと!』

「太子様を狙うものか！くらえ！」

屠自古は持つていた剣で切りかかってきた。

『どうもこんばんは！喰らわねえよ！』

身を翻し、避けた。

「なにッ！」

『未熟者があ！鍛錬してからかかって来いや！虚刀流百合！』

「カハッ！」

俺が回し蹴りを当てたら壁に激突した。

「なにをやってるんですか！」

『切りかかってきたからちよつと蹴り飛ばしたただけだ』

「ちよつとで壁まで飛ばしますか!？」

『いいねえ、俺この一連の流れ好きだわ』

「またあなたですか！」

『ばんわー』

「なんで侵入してるんです？」

『聖徳さんに会いに來ただけです』

「聖徳さんという名前じゃないです。私は豊聡耳神子です」

『名乗るのが遅れたな、俺の名は御神樂ノアだ』

「なぜ会いに來たのですか？」

『気分』

「そうですか…」

『お前は戦えるか?』

「戦えますが…」

『じゃあやろうぜ』

「…わかりました」

『よし』ニイ

「ッ！」ゾワッ

今回はここまで！次回は神子戦とかです。

次回もお楽しみに！

V S・ 神子とその他諸々

『お前は戦えるか?』

「ええ、まあ」

『じゃあやろうぜ』

「いいですけど…」

『よし』ニイ

「ッ!」ゾワッ

『始めるか』

「そ、そうですね」

『決死の覚悟でかかってきな』

「行きます!やあああ!」

『当たらんよ』

「これなら!」

『よつと』

「くそつ!」

『無闇矢鱈に振り回すだけじゃ足りないぞ』

「分かってます」

『刀つてのはな、こうやって使うんだよ。零閃』

「ッ!? 斬撃が飛んだ!」

『そんな驚くなよ。今時飛ぶ斬撃なんて珍しくもない』

「できる人の方が圧倒的に少ないのに驚くななんて無理ですよ」

『お前は頑張ればできると思うぞ』

「多分無理です」

『そうか…残念だ。お前が斬撃を飛ばせるくらいに強くなれば、人々を救いやすくなると思っただが…』

「…」

『お前自身にその気がないなら無理だな。お前の人々を救うなんていう夢見事』

「私の夢を無理と決めつけないで!」

『でもお前は頑張らないんだろ?じゃあ無理だ』

「頑張ればいいんでしよう!」

『果たしてお前にできるかな?』

「やらなきやわからないでしょう!」

『そうだな。やってみないとわかんないよな。でもお前はさつき零閃に関してお前は無理だつて言ったよな』

「そ、それは…」

『それは我儘つてもんだろ?』

「…」

『まあお前ができるかどうかはお前の努力次第だ』

「そうですね」

『頑張りましたまえ、若者よ』

「なにを言ってるんですか。あなたも若いじゃないですか」

『若い?俺が!?やったぜ。おい聞いたかルーミア、俺若いんだつて』

「はしやがないでよ年寄り。二億年以上生きてるんだから」

『正確には13億程度だがな』

「じゅ、13億!?冗談でしょう?」

「冗談じゃないわよ?彼は一応神様だから」

『一応つてなんだ一応つて』

「だつてそうじゃない。ほとんど神格化しないんだもの」

『そりやめんどくさいからに決まってるんだろ』

「一瞬で終わるのにめんどくさいつて…」

『たとえ一瞬でも時にはそれが長く感じるんだよ』

「あのー話についていけないんですけど…」

『無理について来ようとしなくていいぞ。長い付き合いのやつしかわからないから』

「流石にルーミアさんは若いんですよね?」

『こいつは…俺からしたら若いな』

「そりやみんなそうでしょう」

『こいつは多分二億ちよいくらいだろ』

「そうね。多分そのくらい」

「…」

『まじ若いよなー羨ましいぜ』
「どんなに年をとつても老いないあなたの方が羨ましいわ」
『そうか？多分少しずつ老いてると思うぞ』
「二億年前から全く変わってないわよ」
『精神が年老いていくのだよ』
「そんなの知らないわよ」
『ですよー』
「そういえばここにどれくらい滞在するの？」
『んー、多分五十年くらいじゃね？』
「そう」
「そんなに滞在するんですか」
『おう。嫌だったか？』
「い、いえ。そういうわけではないです。そんなに滞在して旅はいいのかなって」
『ほぼ無限にあるような命なんだ。別に大丈夫だろ』
「そうですか…」
「次はどこに行くの？」
『気が早いな。その時になったら教える』
「分かったわ」
『ここに滞在する間、この家にお世話になるからよろしく』
「ええ!?!ここにですか!?!」
『そうだよ（便乗）』
「はあ：わかりましたよ」
『溜め息をつくとき幸せが逃げるぞ〜』
「溜め息ついただけで逃げる幸せなんていりません」
『案外その幸せが自分にとって相当なものだったりするんだよ』
「そんなことあるんでしょうか…」
『年長者の言ってることは信じた方がいいぞ』
「あなたの場合年長者って感じしないわよね」
『それを言っちゃあかんよ』
「あら、失礼」

今回はここまで！次回は物部布都登場です。
お楽しみに！

物部布都登場と久々の天界へ

『ふあああくよく寝たー』

「おはようございます」

『おう、おはよう』

「ご飯はまだ作ってないです」

『そうか。なら俺が作ろう』

「久々にノアのご飯が食べれるわ」

『おはよルーミア。そんな久しぶりか?』

「もうかれこれ五十年は食べてないわね。あなたの料理は美味しいから毎日食べたいのだけけど」

『なら作ってやるよ』

「やった!」

☒?。「太子様ーこやつらは一体何者なのじゃ?」

「あら布都。この人たちは旅の人でしばらくここにいるわ」

「なぜ屋敷にいるのじゃ?」

『成り行きじゃ』

「おお!そうであつたか!」

『それでいいのか…』

「いいのじゃ。太子様が決めたのだったらな」

『別に神子が決めたわけじゃないぞ』

「そうなのか!?ならば…」

「布都、やめておきなさい。あなたではこの人たちに勝てないわ」

『そうだな』

「そうなのか!おぬしらそんなに強いのか!」

『ああ強い。おそらく生物内で最も』

「そうか!そんなことより腹が減ったな」

『待ってろすぐに作ってきてやるよ』

「あれをやるの?」

『そうだな』

「あれって?」

「見ればわかるわ」

『よっしゃやいっちょやりますか』

〜台所〜

『キュ○ピー秒速クッキング』

「ものすごい速さで料理してますね」

「人間業じゃないな」

〜20秒後〜

『できたぞー』

「いただきますーす」

「いただきます」

「いただくぞ」

「:」

『どうした?』

「う、うまい!」

「やっぱり美味しいわね」

『じゃんじゃん食えよ』

〜20分後〜

「:」

『お粗末様』

「つい食べ過ぎてしまったぞ」

「ほんと美味しかったですね」

「あれが20秒でできるなんてすごいですね」

「あれどうやってるの?私もやってみたいわ」

『あれは俺の周りの時間を早めてやってんだよ。時間操れるやつじゃないと無理だな』

「なら私は無理ね」

『そうだったけ?お前時間操れなかったのか』

「前に挑戦したんだけどできなかったわ」

『そうか』

〜夜〜

『晩飯も食ったしもう寝るか』

「そうね」

『おやすみー』

「おやすみなさい」

「貴方達寝るの早いのね」

『そうじゃない。明日はちよつと朝早くから行くところがあるからな』

「そうなんですネ。おやすみなさい」

〜翌朝〜

なんか疲労感のある目覚めだ。それになんか夜までは隣の布団で寝てたルーミアが俺の布団に入ってきてた。

『まさかな』

『そんじゃ出るか』

〜街中〜

『日の出の直前だからってのがああるから人通り少ないな』

突然俺の視界が暗転して浮遊感に襲われた。

『は?』

〜30秒後〜

『見覚えのある場所だな。以前に二百年くらいいたことがあるような場所だな。なあ、雅よ』

「久しぶりじゃな、和人や」

『で?なんで俺をここに強引に連れてきたんですかねえ』

「仕事がちよつと片付かなくなってきたてしまつて…」

『本音は?』

「寂しくなつたんじやよ」

『なら普通に呼んでくれよ。そしたら1秒でくるから』

「今度からはそうさせてもらおう」

『どうせ書類も溜まつてんだろ?やっつてやるよ』

「ありがと」

『それにしてもあれだな。お前まったく変わってないよな』
「そういうおぬしもな」

『俺は少し身長伸びたぞ？お前と違ってな』
「ぐぬぬ…」

〜15分後〜

『書類片付けたぞ』

「前より速くなったな」

『そりやな。そーいや久し振りに和人って呼ばれたな』

「そうなのか？」

『ああ。誰も和人って呼んでくれないんだよ』

「それはおぬしが正体を明かしてないからじゃないか？」

『明かした奴らにも呼ばれないんだよ。悲しみ』

「書類片付け終わったんならゲームしよう」

『そうだな。久しぶりの対戦だよ』

「どれくらいじゃ？」

『大体二億年ちよつと』

「儂なんて13億年じゃよ？」

『俺とやったのが最後かよ…ボツチなのか？』

「グフツ！そんなこと言わないでくれ」

『ごめんごめん』

「それじゃ始めるぞ」

『ああ！』

今回はここまで！次回は雅とゲーム対戦後ルーミア戦です。
お楽しみに！

雅さんゲーム弱くなつてね？ルーミアさん戦闘強くなつてね？

『さあゲームを始めよう』イケヴオ

「無駄にカッコいい声を出すな」

『やるぞ』

「わかつたぞ」

〜20勝負後〜

『スマブラ俺の全勝、マリカも俺の全勝、スト4も、その他も俺の全勝…弱くね？』

「格ゲーは仕方ないんじや！特にスマブラ！おぬしフレームかなんかの変わる時の攻撃禁止じや！」

『狙つてやったわけじや無いよー（棒）』

「くそう…」

『フハハハハ！我に勝とうなんざ10年早いわ！』

「ムカつく！」

『んじや俺地上に戻るわ』

「もう行つてしまうのか？」

『ああ。ルーミア達が心配する前に帰らないとな。また来るよ近いうち絶対』

「そうか…わかつた！またな！」

『おう。またな！テレポーターション』

「行つてしまったか…また寂しくなるな…」

『今戻つたぞー』

「お帰りノア」

「おかえりなさい」

「おかえり」

『なあルーミア…お前昨晚俺になんかしたか？』

「な、何もしてないわよ」

『本当に？』

「え、ええ」

『ならいいんだ』

「今ちよつと体動かしたい気分だからやりましょう？」

『いいぞー』

「行くわよ！」

『かかってきな！』

「ダークマター」

『マスタースパーク』

ルーミアの放った黒いレーザーと俺が放ったカラフルなレーザーは相殺された。

『そんな技持ってたか？』

「この前新しく技を作ったのよ」

『なるほど。じゃあ次は俺からだ。零閃編隊…5機！』

「零閃10機」

『実力の差で負けるってわかってるから多めに出したんだな。いい判断だ』

「ナイトバード！」

『ライトニング』

「影縫い」

『俺自身の影を消滅』

「ミッドナイトバード…6羽！」

『紫電…6機！』

「ブラックホール」

『スーパーノヴァ』

「1発も当たらないわね」

『当たらないってだけなら良かったんだけどな、俺開始地点から動いてねえぞ？』

「動かしてあげるわ！ゴッドナイトバード！」

『ドラゴンライトニング』

「黒雷一閃！」

『雷光一閃』

「ナイトバースト！」

『ブラッドストーム』

『いい加減決着つけようか』

「そうね」

『全力でこい！』

「もちろん！ナイトメアバースト」

『二刀流…』

俺は紫電を抜き、二刀流になった。

『ソードスキル…ナイトメアレイン！』

ルーミアが放った闇の衝撃波と俺の闇を纏った斬撃がぶつかり合
い相殺された。

『強くなったな。これで最後だ』

「ありがとう、これで決めるわ！」

「シヤドウレイ！」

『1%解放…ジ・イクリップス！』

勝負を制したのは俺だった。

『ほんと強くなったな』

「でも1%しか引き出せなかったわ」

『今の1%は昔の1割だから結構な解放だと思っぞ？』

「そう…なら良かったわ」

『お疲れ』

「楽しかったわ。またやりましょう」

『そうだな』

「お二人とも流石ですね」

「うむ！見事であった！」

「すごかったですよ」

『まあ、そうなるな』

「まあそうなるわね」

『団子作って来る』

「私も手伝うわ」

「なんででしょう…あの2人が夫婦に見えてきましたよ」

〜台所〜

『ここは別に秒速クッキングしなくていいか』

「そうね」

〜15分後〜

『できたぞー団子の盛り合わせ』

「好きなのを食べてちょうだい」

「いただきます」

「いただきます！」

『俺らも食うか』

「そうね」

〜20分後〜

「ごちそうさまでした」

「ごちそうさま！」

「お粗末様でした」

『お粗末様』

『片付けは俺がやるよ』

「お願いするわね」

☒? 「あれが豊聡耳神子…」

今回はここまで！次回は霍青娥登場です。

お楽しみに！

霍青娥出現！

『暇だな…』

「そうですね…」

『ヤろうぜ』

「いいですよ」

『始めるか』

「始めましょう」

『決死の覚悟でかかってきな』

「ぜやああ！」

「隙が大きすぎるわよ！」

『よつと。どうしたルーミア』

「ちよつと助言をしてるだけよ」

『お前も混ざるか？』

「私は次にやるわ」

『結局戦うのな』

「よそ見をしていていいんですか？」

『強者だからこそその余裕だよ』

「足元掬われないでくださいね！くらえ！」

『蹴突』

神子の上段からの振り下ろした刀が俺に届くよりも先に俺の直線蹴りが神子に命中した。

「グフツ！カハツ！」

神子は壁に激突し、肺の中の空気を自分の意思に反して吐き出した。

『上段は相手に隙がある時にやるべきだな』

「あなたの場合隙なんてないでしょう？」

『それは違う。俺は隙がある状態からの復帰が速いんだよ』

「今度試してみるわね」

『今度と言わず今からでも』

「そうね」

『お前からどうぞ』

「じゃあ遠慮なく、絶影斬！」

ルーミアは影の斬撃を飛ばしてきた。

「流星改！」

俺は零閃や紫電とは違う飛ぶ斬撃を使い相殺した。

「あなたのそれ結構威力あるようね」

『お前のもな。次は俺から行くぜ！神速…超必殺！飛鳥文化アタック！』

俺は回転をしながらルーミアに突っ込んでいった。

『あ、避けられた。背中痛アアア！』

「何をしてるの？ふざけてるの？」

『ふ、ふざけてなんかないわい！』

「じゃあ今のは何？」

『ちよ、ちよっとした遊び心です』

「ふざけてるじゃない」

『もういい！零閃150機！！』

「拗ねないでよ…ダークマター」

俺が放った150個の斬撃は、ルーミアの極太レーザーによって消滅した。

『紫電60機！』

「ブラックホール」

『約束された勝利の剣！！』

『エクスカリバー・ガラティーン転輪する勝利の剣！！』

俺が放ったレーザーとルーミアの放ったレーザーはともにぶつかり、そして天に向かい進んで爆発した。

『お前も似たような技持ってたのか』

「まさかあなたも使えるとは思ってなかったわ」

く霍視点く

「ものすごい戦いが起こってますね…私では到底勝てませんね」

『エクスカリバー！！』

「エクスカリバー・ガラティーン！！」

「どうやっているのでしょうか…」

『さつきからそこで見てるやつ！出てきな！』

「ツ!?バレてましたか」

〜和人視点〜

『さつきからそこで見てるやつ！出てきな！』

「ツ!?バレていましたか…」

「まずは気配を消すことを覚えましょう？」

『ハツハツハ！そんなこと言ってやるなよ！』

「黙って聞いていれば貴方達…」

『いいじゃないか』

「で？貴方は誰？」

『俺の記憶が正しければ、こいつは霍青娥だな』

「なぜ私のことを？」

『神様パワーってことにしてくれや』

「貴方ならありそうね神様パワー」

『あるんだよ』

「そうだったわね」

「…」

『すまん、で、目的はなんだ？』

「い、いえ。私は豊聡耳神子さんにご用がぁあります…」

『仙人か…』

今回はここまで！次回は神子が仙人に!?

お楽しみに！

霍青娥戦と海外へ

『仙人か…』

「やはり知っていましたか」

『俺は知っていただけじゃない。知った上に覚えてるんだよ』

「なぜ覚えているのかはわからないですが、私の計画は邪魔させません」

『お前ごときが俺を倒せると?』

「案外いけるかもしれませんよ?」

『面白いなお前。いいぜかかってきな』

「いえ、貴方からどうぞ?」

『そうか?なら行くぜ…零閃』

「…」

俺が放った斬撃は青娥に直撃したかのように見えた…が、実際は青娥を通り抜けていった。

『当たらなかったか…瞬撃』

「どうしたのです?当たっていませんか?」

俺が一瞬で青娥の前に移動し拳を放ったが、やはり当たらなかった。

『能力か…』

「その通りです。」

『確か壁をすり抜けられる程度の能力か』

「能力までご存知でしたか」

『面倒な能力だな』

「お褒めに預かり光栄です」

『ならその自慢の能力…消してやるよ』

「え?」

『霍青娥の能力を消滅』

「?」

『喰らいな。瞬撃』

「ガハッ!私の能力が…使えなくなってる…?」

『能力に頼りすぎて自らを鍛えることを忘れていたな。言っただろう。お前の能力を消したと』

「ありえませんか！他人の能力を消すなど！」

『知ってるか？ありえないなんてないんだよ』

「そんなの…」

『ここで死ぬか諦めるか…決めな』

「諦めますよ」

『まあ仙人になるのかならないのかは神子に任せるけどな』

「私たちが戦った意味って…」

『俺の気分だ』

「さっすが気分神ね」

『褒めても何も出ないぞルーミア』

「褒めてないわよ？」

『そうだったのか』

「あの！結局私は豊聡耳神子さんに話をして良いのですか？」

『おういいぞ』

「ではこれで」

『何言ってるんだ。俺とルーミアも行くんだよ』

「わかりました…」

「貴方が豊聡耳神子ですね？」

「そうですが…貴方は一体？」

「私は霍青娥。中国の仙人です」

「それで？中国の仙人がなんのご用ですか？」

「貴方…今の仏教に限界を感じていますね？」

「え、ええまあ」

「聖人になりませんか？」

「聖人に？どうして？」

「聖人になれば、人々を導きやすくなるし、ほぼ永遠の寿命を手に入れられるので布教もしやすい」

「…」

「仏教を説いている貴方にとっても必要なことだと思いませんか？」
「ノアはどう思いますか？」

『俺は賛成だな。お前の夢が叶いやすくなるんだ』

「そうですね…ですが布都と屠自古がいますから…」

『その2人ならさつきから外で聞き耳を立てているぞ？』

「やはりノアさんには知られていましたね」

「太子様！我らは太子様に一生ついていきたいのです！太子様が我々を気遣い聖人に、仙人になれないと言うのならば、我らも仙人になりましようぞー！」

「布都…」

「そうですねよ太子様。私たちは太子様について行きます」

「屠自古…」

『いい友人に恵まれたな、神子』

「はい！」

『だそうだ』

「今すぐにでもなりましょう」

「わかりました。今すぐにと言うのであればなれる確率は低いですが、あの方法でやりましょう」

「もしなれなかった場合は？」

「死にます」

「それは…」

『安心しな。成功確率は俺が10割にしてやるから』

「わかりました、ノアが言うのなら大丈夫でしょう。始めてください」

〜十分後〜

「この後500年くらい死んだように眠りますが、確実に目覚めるので安心してください」

「はい」

『安心して眠りな』

「ノア…いえノアさん。短い間でしたがありがとうございます」
『ああ…ありがとうございます』

「ルーミアさんもありがとうございました」

「ありがとうございます」

「布都、屠自古。起きた時にまた会いましょう」

「うむ！」

「はい」

『安らかに眠れよ』

「はい」

『またな』

俺は神子たちが眠るのを待った。そして眠りについた後、地面に洞穴を作り、神子たちを入れた棺桶を入れ、蓋をした。

『ここに居続ける訳にはいかないからな』

「次はどこに行くの？」

『海外に行くぞ』

「海外？」

『青娥が来た中国も海外なんだよ。俺らの知らない文化がある』

「楽しみね」

『そうだな。それじゃあな青娥。また会う時があれば』

「はい。また会う時に」

『んじや行くか！』

「そうね！」

今回はここまで！次回からは海外進出編です！

お楽しみに！

海外編

生物内最強 v s . 西大陸最強

『俺一応名前変えようかな』

「どうして?」

『俺月では有名っぽいじゃん?』

「そうね」

『んでもって妖怪として活動するつもりだからな』

「そう」

『緋凶でいいや』

「なんで緋凶なの?」

『緋はこれから俺が大体の攻撃で火を使うからだな』

「凶は?」

『凶は俺は一応神の種族としては破壊神だから』

「そうなのね」

『そんじや海外に行くぞー』

「はい」

『移動方法は転移しますんで準備はいいですか?』

「いつでも」

『んじや行くぜ：テレポーターション』

〜中国到着〜

『着きました』

「早いわね」

『んじや進んでくか』

「そうね」

〜二時間後〜

『なんか倒れてるな』

俺たちは砂漠のど真ん中で真っ赤な髪の少女に出会った。

「こんな砂漠に倒れてるなんてただ事じゃないわね」

『おーい大丈夫か?』

「んう…ん？あれ？ここは？」

『起きたな』

「!? 貴方は？私に何をしたの？」

『なんもしてねえよ。お前が倒れてたから近くに來ただけだ』

「そうだったんですか…」

『で？なんで倒れてたんだ？』

「倒れてた訳ではなくて、眠かったので寝てたんです」

『紛らわしいやつだな』

「ごめんなさい」

『謝んなや。俺が勝手に勘違いしただけだからな』

「私は紅美鈴です」

『俺は緋凶。隣のはルーミアだ』

「緋凶？聞いたことない名前ですな」

『俺は今日緋凶になったからな』

「へえー今日…今日!？」

『ああ。それに今日中国に來たからな。全くこの土地について知らないから教えてくれや』

「いいですよ。私最近暇なのでずっと着いていきますね」

『わかった。よろしく頼む』

「よろしくね」

「それにしてもノアさん結構鍛えていますね」

『まあな』

「ちよつと手合わせしてください」

『血気盛んだな。いいぜやろう』

『お願いします』

美鈴は中国拳法の構えをとった。

『隙の少ない構えだな。一朝一夕じゃ取れない構えだな』

「いきますー！やあー！」

美鈴は回し蹴りを俺の首の高さに放った。

『よつと、格闘は相手に悟られない二段構えにすると当たりやすくなるし、自分の隙を減らせるぞ』

「なるほど」

『次は俺から行くぜ、瞬撃』

俺は一瞬で美鈴の目の前に移動し、頭の高さへ正拳突きをワントンポ遅らせて放った。

「ツ!?危ない!」

美鈴は咄嗟に頭を仰げ反らせて交わした。

『よく避けたな』

俺が正拳突きを放った場所から100メートルほど砂が吹き飛んだような跡があつた。

「物凄い威力ですね…」

『腕鈍ったなー最近蹴りしか使ってなかったからな』

「そうね。前より威力落ちてるわね」

『ほんとだぜ』

「これで威力落ちてるんですか?」

『ああ。大体前の半分くらいの威力になっちまってるな』

「化け物ですね」

『そりやな。伊達に生物最強じゃねえよ』

「そんな二つ名まであるんですね」

『ああ昔の仲間たちとかからよく言われてたぜ』

「緋凶さんほどの実力者だったらこの大陸最強のあの人にも勝てそうですね」

『ほう…大陸最強なんて奴がいるのか…やりたいな』ニイ

「今ちようど中国にいるみたいですから行ってみます?」

『案内してくれ』

　　～砂漠の街～

『ここにいるのか』

「そうですね…あついましたよ!あの人です」

『意外と年取ってんのな』

「貴方ほどじゃないわよ」

『そりやこの世で俺以上に年取ってるやつなんてほとんどいねえよ』
「どうします?挑むんですか?」

『もちろん。なあそこのおっさん！あんたがこの大陸最強の男なのか？』

『ああそうだが？なんだ？』

『いや：ちよつと相手してほしいなーつて』

『また自分の実力も知らんガキに挑まれるのか』

『多分だが俺はおっさんが今まで相手して来たどんな相手より強いと思うぞ？：鬼子母神も倒してるから』

『鬼子母神をか!?!なるほど、相手をしてやろう』

く砂漠く

『始めようか生物最強対大陸最強のデスマッチを』

『殺し合いでいいのか？』

『どつちがいい？死にたいか生きたいか』

『大した自信だな。なら殺し合いでやろう』

『ほんじゃやるぜ』

『かかって来な』

『それは俺のセリフなんだが：行くぜ蹴突』

『よつと』

『この技を避けたのはお前が初めてだよ』

『お前はろくな奴を相手にしてなかったんだな』

『これは鬼子母神戦の後に作った技だからな、あいつが避けれるかはわかんねえや』

『次はこちらから行くぞ！赤爪せきそう』

空気との摩擦で熱を発した右足を使い、回し蹴りをして来た。

『真つ向勝負だ』

俺はそれを直で受けた。

『なんだよこの程度か』

『まだ本気じゃないぞ？』

『もういいわお前、つまんないからもう死ね。五分解放：瞬撃』

俺が放った正拳突きは美鈴の時よりもはるかに威力が上がっており、反応できなかつたおっさんの腹に風穴を開けた。

『弱いな：これが大陸最強かよ：たかが知れたな』

「貴方が強すぎるのよ」

「そうですよ」

『そうでもない。だってたかが五分解放だからな』

「それでも昔の5割の力なんですよ？ だったら相当強いじゃない。私あの時の貴方よりもまだ弱いんだから」

『そんなことないだろ。お前結構強くなってるからな』

「あの緋凶さん！ 弟子にしてください！」

『なんでだ？』

「私も貴方くらいに強くなりたいからです」

『お前は俺の修行を受けてつけた力を何のために使う？』

（ここで他人を傷つけることに関することを言ったら見込みなしだ）

「私は…守るためです！」

『ほう…気に入った！ いいぜ、弟子にしてやるよ』

「ありがとうございます師匠！」

『よし！ とりあえず20年くらいは鍛えてやる！』

「お願いします！」

今回はここまで！ 次回は美鈴修行編です。

お楽しみに！

美鈴の修行と賞金稼ぎ

『修行始めるぞー』

「お願いします師匠!」

『取り敢えず最初に鍛えるのは脚力だ。これを使うぞ』

俺は岩でできた、縦20センチ、横3メートル、高さ2メートルの壁を作り出した。

「なぜ脚力なんですか?」

『脚力を鍛えると踏み込みが強くなって拳の威力も上がるからな』

「なるほど」

『手本を見せよう。オラア!』

俺が岩壁に蹴りを放つと粉々になり、20メートル先にまで瓦礫が達した。

『これぐらいできるようになってもらおうぞ』

「わかりました!」

『1発1発全力で放て』

「やああ!」ドゴン

『まだ足りないな。そのまま続けててくれ。疲れたら休んでいいぞ』

「わかりました。師匠は?」

『さつきいい金が入るチラシを見たからな。ちよつくら金稼いで来ようかと』

「わかりました」

『ルーミアも来るか?』

「私はここで美鈴を見てるわ」

『わかった。よろしく頼むぞ』

〜十分後〜

『あれが指名手配犯だな。指名手配されてるつてのに呑気に街中歩いてやる』

「ん?なんだお前、さつきから俺の方ばかり見やがって」

『お前は指名手配されている連続殺人の犯人だな?』

「楽に金を稼ごうとしてるガキか…ぶっ殺してやるよ」

『質問に答えろよ』

「ああそうだ！俺が連続殺人犯だ。名前h『名前までは聞いてねえよ』
あゝ？」

『名前聞くつもりはないからもう黙れ』

「テメエ！誰に口聞いてると思ってるんだ『火炎一閃』ぐあああ！」

『これを持ってけばいいんだな』

〜20分後〜

「犯人を捕まえてくださりありがとうございます！お名前を伺ってもよろしいですか？」

『緋凶だ。これは俺の連絡先だ。捕まえて欲しい奴か、殺して欲しい奴がいるんなら連絡してくれ。ほかの奴に頼むよりかは確実だ』

「はい！お願いしますね！」

〜砂漠〜

『戻ったぞー』

「お帰りなさい」

『美鈴の調子はどうだ？』

「センスがあるわね」

『だろうな』

「あの子、相当な腕前よ」

『ならもつと強くしてやる』

「頑張つて」

『ああ。任せとけ』

「そういえばさっきのお金稼ぎ？はどうだったの？」

『結構な額入ったし、楽だし、依頼も来るようになったしで安定だな』

「そうなのね」

「お二人とも何を話してるんですか？」

『金の話』

「さっきのやつですか？」

『そうだ。俺はこれから賞金稼ぎを生業にするつもりだから』

「ちなみにさっきのはいくら入ったの？」

『4500万』

「すごいですね…」

「想像以上だったわ」

『修行に戻るぞ。美鈴には三步一撃って技を習得してもらおうぞ』

「どんな技なんですか？」

『三步全力で踏み込んで三步分の威力を拳に乗せる技だ』

「私にできるんでしょうか…」

『できるさ。なんせお前はセンスがあるからな』

「お願いします！師匠！」

『まずは一歩分でどれぐらいの威力なのかを見よう。俺にやってみろ』

「いきます！やあああ！」

『おお…』

美鈴が放った一撃は俺を5メートル吹っ飛ばした。

『すごいな』

「なんで師匠はピンピンしてるんですか？」

『俺の防御力が高いから。それにしても俺を吹っ飛ばせるとはいい威力だな』

「そうですか？」

『俺を殴り飛ばした奴は久しぶりだな』

「ほとんど飛ばないものね」

『全くだぜ』

「茜以外に初めてね」

『美鈴にはそれほどまでにセンスがあるってわけだな』

「そうね」

『もっと鍛えるか』

今回はここまで！次回は吸血鬼に遭遇します！

お楽しみに！

遭遇！スカーレット家

美鈴の修行を始めてから10年が経った。

美鈴は10年前の少女って感じの雰囲気から、大人の、色っぽい雰囲気変わった。顔も可愛いから綺麗になった。

『美鈴成長したよなー』

「そうね」

『修行開始から10年だもんな』

「早かったわね。10年」

『そうだな』

「やあああ！」ドツゴーンパラパラ

『強くなったな』

「でも師匠ほど瓦礫が飛んでいきませんでした」

『俺は年季が入ってるからな』

「どれくらいですか？」

『格闘術の修行は…前世含めると10億年だな』

「…え？」

『だから、10億年だ』

「ええ!?!10億年!?!」

『そうだよ』

「師匠は10年前に妖怪になったって言ってましたよね?なのに10億年ってどういうことですか?以前は何者だったんですか?」

『前は半神半龍だな』

「…」

『あらら。黙っちゃったよ』

「それは黙るわよ。その見た目なんだから」

『見た目の問題なのか?元神が妖怪になったって事で驚いて黙ってるんじゃない?』

「そつちかもしれないわね」

『おーい美鈴?大丈夫かー?』

「はっ！気を失ってた！」

『黙ってたわけじゃあなかったようだな』

「よかったわね」

「師匠！なんで元々神様だったのに妖怪になったんですか？」

『理由があるんだよ。砂場の山よりも低く、水たまりよりも浅い理由がな』

「大した理由じゃないことだけはわかります」

『ただ、昔の仲間たちにとって俺は死んだ奴になってるから、次会った時にバレない為に妖怪になっただけだ』

「意外とまともだった…ってというか師匠死んだことにされてるんですか？」

『ああそうだ。というよりも昔に暮らしてた都市で俺は身を呈して国を守った英雄ってことになってるし、原子爆弾も喰らってるからな。仕方のないことだ』

「昔から師匠はすごかったんですね…」

「そうよ？昔からノアは負けなしだったのよ」

『おいルーミア！その名前で呼ぶんじゃない！』

「あつ、ごめんなさい」

「ノアって…あの御神楽ノアですか!？」

『ほらやっぱりこうなった…そうだよ俺がその御神楽ノアその人だよ』

「最強の妖怪、鬼子母神を倒して、10億もの妖怪を相手に無傷で勝ったってあの!？」

『無傷ではないがな』

「世界中で師匠は死んだことにされてますよ」

『なに!？』

「その噂を広めたのは鬼子母神です」

『茜エ…』

「これは茜死んだわね」

『殺さねえよ。大切な友人だからな』

「そう」

『もういいだろ。移動するぞ』

「次はどこに行くの？」

『西洋のどっかに行く』

「私も付いて行っていいですか？」

『当たり前だろ。元よりそのつもりだ』

「ありがとうございます！」

『んじやいきますか』

「師匠、この砂漠にはデザートドレイクが棲んでいます。相当強いので、気をつけてください」

『オツケー任せとけ』

「どんな見た目なのか見てみたいわね」

『ああ』

〜20分後〜

『くるぞ気をつけろ！』

「了解！」

『ー！ー！』

『つせえな馬鹿でかい声出してんじやねえよ』

『ー！ー！』

デザートドレイクは口から炎を吐き出した。

『そんな弱い炎で焼き殺せるとでも思ってたのか？だったらもう死ね』

流星火山』

『ー！』

声にならない断末魔を上げ、息を引き取った。

『ただの雑魚じゃねえか』

「あなたが強すぎたのよ」

「そうですよ」

『んじやいきますか』

〜西洋の街〜

『とりあえず情報収集しますかね』

「そうね」

『この店でいいか：なあおっちゃん。なんかいい情報ないか？』

「あんたら旅のもんか…ちよつと遠くなるんだが、吸血鬼が住んでるらしいぞ」

『その吸血鬼の名前ってスカーレットか？』

「そこまではわからないな」

『そうか、ありがとな』

「どうだったの？」

『どうやら少し遠い所に吸血鬼がいるようだ』

「いきますか？」

『当たり前だ』

〜30分後〜

『着いたな…』

「誰かでてくるわよ」

「ん？お前から何者だ？」

『見つかったな。俺らは…俺らって一体何者なんだ？』

「はあ…なにを言ってるのよ…」

「ハツハツハ！面白い奴らだな！」

『おいルーミア、笑われてるぞ』

「笑われてるのは貴方ですよ」

「笑われてるのはお二人ですよ」

『「なに？」』

「ほんと面白い奴らだな。俺はアラン・スカーレットだ」

『俺は緋凶だ』

「私はルーミアよ」

「紅美鈴です」

「緋凶ってあの賞金稼ぎの炎雷帝で有名な緋凶か」

『炎雷帝ってここでも久しぶりに言われたな。ってか俺いつの間になんか有名になったんだ？』

「そりや有名になるだろう！どんな凶悪犯も依頼したその日の内に捕まえてくるし、全員一撃で仕留めてるんだからな」

「すごいですね師匠は…」

『そうでもないさ』

「それで？そんなあんたが来たってことは俺を殺しに来たってことか？」

『いんや？全く。吸血鬼がいるって聞いたからどんなやつなのか見たかっただけだ』

「なんだ…よかったよ」

『なあアランは強いのか？』

「自分ではそこそこだっと思ってるけど…なんだ？緋凶と戦うのか？」

『違うよ？美鈴とやってもらおうかなって』

「えっ？」

今回はここまで！次回は美鈴 vs. アランです。

お楽しみに！

紅美鈴 V S. アラン・スカーレット

「え?」

『いや、ね?美鈴は修行して強くなったから実戦に移そうかなって思ってる』

「それに巻き込まれる俺は一体…」

『いいじゃん』

「いいけどよ…」

『ならやるぞ!2人とも準備しろ!』

美鈴は籠手を、アランはローブをまとった。

『そんじゃ…始めエ!』

「こい!」

「いきます!やあああ!」

美鈴はアランの首めがけて蹴りを放った。それをアランは腕を交差することによって防ぐが、後ろに吹っ飛ばされた。

「なに!」

『流石の威力だな』

「そうね。岩の壁相手にずっと蹴ってたからね

「やあああ!」

美鈴は吹っ飛ばされたアランに追撃をしようと近づいた。

「滅槍!ロンギヌス!」

近づいて来た美鈴の頭めがけて光の槍を放った。

「ツ!危ない!」

それを美鈴は首を傾けて避けた。

「当たらんか…ならば、これはどうだ!シャイニングジャベリン!」

「…」

アランが空に無数の光の槍を作り出し、美鈴に向けて放ったが、美鈴はそれを紙一重で全て避け切った。

「雷鳴拳!」

「マジックシールド!」

美鈴が放った雷を纏った拳は、アランが作り出した魔法の盾によつ

て防がれたが、その盾にはひびが入った。

「この盾にひびを入れるとは…恐ろしい威力だな」

「そちらこそ今ので壊れないなんてすごいですね」

「インフェルノ！」

「空破・震虎拳！」

アランが放った灼熱の炎と美鈴が放った空気の衝撃波はぶつかり合い、相殺された。

「まだまだ！アイシクル・ファール！」

「二重の極み！」

アランが空中に作り出した氷の巨大な塊は、美鈴の拳によって粉々に砕かれた。

『ほんと強くなったよな…』

「次で決めるぞ！」

「ええ！」

「天舟・アンダルタギガルシュ！」

「師匠直伝！三歩一撃！」

アランが天より放った極太のレーザーと美鈴が放った渾身の三歩一撃がぶつかり合い、勝ったのは…

「きやああ！」

アランだった。

『そこまで！勝者アラン！』

「ハア…ハア…魔力を使いすぎた…」

『最後にあんな大技出すからだ。美鈴、大丈夫か？』

「はい…ごめんなさい師匠。勝てませんでした…」

『いいんだよ。負けることは悪いことじゃない。次は負けないようにまた鍛えような』

「はい！師匠！」

「いい師弟関係ね」

「本当に強かったよ美鈴は」

『俺とやるか？』

「やりたいが…もう魔力がほとんどないんだ」

『なら分けてやるよ』

「え？残り少なかった魔力が復活した…」

『これでやれるな』

「ああ！始めようか！」

『普通の勝負と魔法勝負どっちがいい？』

「魔法でやろうぜ」

『そうだな。決死の覚悟でかかってきな！』

今回はここまで！次回は和人とアランの戦闘です。

お楽しみに！

最強に挑む勇敢なる吸血鬼

『決死の覚悟でかかってきな!』

「いくぜ! フレイム!」

『ライトニング』

アランが放った火球と一本の雷がぶつかり、消滅した。

「シャイニングジャベリン!」

『千手皎天汰炮』

俺らが放った光の矢は互いにぶつかり合い、これも消滅した。

『ドラゴンライトニング』

「マジックウォール!」

『インフェルノII』

「エレクトロボルト!」

『ふう…』

「なあ…手加減すんなよ」

『え?』

「手加減したら殺すぞ」

『はいはいわかりましたよ。そのかわり恨むんじやねえぞ?』

「誰が恨むかよ」

『よし…1%解放…ツインマキシマイズマジック…チェインドラゴン

ライトニング!』

「な、なんだこの膨大な魔力は!?!」

『避けねえと怪我するぜ』

「くそっ! 二割消費! マジックシールド!!」

『エクспロード』

「ぐああああ! ば、爆発魔法をこんな一瞬で…」

『コントロール・ウエザー』

「なに!? 雨を降らせるつもりなのか?」

『一応聞いておこう。降参するか?』

「まだだ!」

『そうか…ならしやうがないな。厄災天気予報、局地的な徹甲弾の豪

雨にご注意ください』

「な…なんなんだ…」

『そろそろ降参しないと死ぬぞ?』

「わ、わかった…降参だ!」

『サイコキネシス』

アランが降参したと同時に、俺は超能力で降ってきた徹甲弾を止めた。

「やっぱり強いわね」

「そうですね」

「なんでお前は俺に魔力を分けたばかりなのにそんなに魔法が使えるんだ?俺の魔力量は決して少くないんだが…」

『それは…(どうする?ここで本当のことを言うのか?いやしかし…)』

「どうした?」

『いやなんでもない。俺の魔力量はかなり多い方なんだよ』

「そうなんだな」

『そういやこの後泊まる場所とかどうしようか?』

「そうですね…近くの町に泊まりましようか」

「そうですね」

「なんならうちに来るか?部屋ならたくさん余ってるし」

『ならお言葉に甘えようかな。お前らもいいだろ?』

「ええ」

「はい」

「なら決まりだな。着いてこい!」

『おう』

　　～屋敷内～

『「おお…」』

アランの屋敷はやはり外見に比例してかなり大きかった。

「そんな驚くことか?」

『驚いてるわけじゃない。感動してるんだ。こんなデカイ家俺とルーミアは二億年ぶりだからな』

「二億年!?お前ら一体何歳なんだよ」

「私は二億年とちよつと」

『俺は…大体13億だな』

「桁が違えな…」

「本当ですよ…」

「本当何者なんだ?」

『単なる神だよ』

「神!?妖怪じゃないのか!?!」

『妖力も神力も持つてるんだよ』

「さらに魔力も持つてるってわけか…化け物だな」

『霊力も持つてるぞ』

「真の怪物だな」

今回はここまで!次回は日常と彼の婚約です。

お楽しみに!

日常とは（哲学）

俺とアランが戦ってから半年が経った。

『新しい依頼が来たから行ってくるわ』

『行つてらっしゃい』

『行つてらっしゃいです師匠』

『俺も用事があるから途中までついて行くぜ』

『わかった。なんの用事なんだ？』

『えつと…あの…』

アランが照れた様子でモジモジしだしたので大体把握した。

『なるほどな。想い人に会いに行くんだな』

『お、おう…』

『頑張れよ』

『もちろんだ！』

く街く

『んじや俺はここで、じやあな』

『おう。んじやまたな』

俺とアランはこの街で別れた。

『もう行つたか…面白そうだからちよつと追跡してみよつと』

『さつきからずっとあそこで誰かを待ってんな…あつ誰か来たみたいだ』

『ごめんなさいアランさん。待ちましたか？』

『いえ、俺も先ほど来たところです』

『気障だねえ』

『それじゃあ行きましようかソフィアさん』

『なるほどソフィアっていう娘なんだな。他人の色恋沙汰をそんな長く覗くのは良くないからな。もう行くか』

『ん？今だれかに見られてたな…』

『アランさんどうしたんですか？』

『なんでもないです』

「?そうですか」

『よつし仕事に戻ろつと、今回のターゲットはこいつか…とりあえず探すか。エコーロケーション…最終目撃場所の近くか』

〜20分後〜

『あいつか…めんどくさいから黒炎拳』

「え?ギヤアアアアア!」

『ふう…んじや金受け取りに行きますかねー』

〜30分後〜

『終わったぞ』

「お疲れ様です!今回の報酬です!」

『どうも』

「いつもありがとうございますごぎいます緋凶さん」

『ああ。なんかいい情報はないか?』

「そうですね…そういえば近頃、世界中のヴァンパイアハンターが集結して、この近くにいる吸血鬼を討伐しに行くらしいですよ」

『へえー…え!?この近くのとてあのでっかい建物に住んでる奴か?』

「そうですね、緋凶さんも参加するんですか?」

『違うよ。そのヴァンパイアハンター共の進行の阻止をするんだよ』

「え?」

『近くの吸血鬼は俺の知り合いで、今ちよつと屋敷に住んでるから』
「緋凶さんの知り合いだったんですね…ヴァンパイアハンターの方々
に攻めないように伝えておきますね」

『頼んだぞ。まあ、もし攻めて来たら全滅させるからいいんだけどな』

「あはは…」

『じゃあな。また新しいのが入ったら連絡してくれ』

「一応ありますが…今やります?」

『今日は暇だからな。やらせてもらおう』

「それじゃあお願いしますね」

『おう。二時間以内に終わらせてくる』

「はい。頑張ってください」

『んじやな。エコーロケーション。ちよつと遠いな…めんどいからテレポートーション』

「〜今で言うロシアく」

『ついたな、探すか』

「十分後」

『みつけた。んでちようど人襲ってやがる』

『おい！さっさと金だせよ！』

「やめてください。店内で暴れないでくださいお客様」

「あ？テメエ殺すぞおい」

「ひっ、誰か助けて！」

「デカイ声を出すんじやねえよ！誰か来たらどうすんだよ！」

『お前の方がデカイ声じやねえかよ』

「あ？誰だお前」

『俺のことを知らないのか？』

「真っ黒い、長くて一部だけ紫がかった部分と赤がかった部分のある

髪…女のような見た目…お前は炎雷帝の緋凶か!？」

『知ってたようだな』

「な、なぜ俺を狙ってるんだ？」

『お前は自分の首に賞金がかかっていることを知らないのか？』

「知らなかった…」

『まあいいや。めんどくさいしお前のことを見逃してやるよ』

「あ、ありがとうえ！」

「え…」

『お前はこの店の店主か？』

「はい…そうです…」

『襲われてたのか？』

「そうです」

『そうか…おいそこのお前』

「なんだ？」

『お前のことを見逃すって言ったな』

「あ、ああ！そうだ！」

『あれは嘘だ。火炎一閃』

「ウワアアアア！」

「助けてくださりありがとうございます！お礼にこの店でしか取り扱っていない商品を全て差し上げます！」

『謝礼がほしくて助けたわけじゃないんだが…まあありがたくいただきますよ』

「モンスターエ○ジーです！受け取ってください！」

『え？今モンスターエ○ジーって言ったか？』

「そうですが…お気に召さなかったでしょうか？」

『いや…なんでここで、しかもこの時代にあるのかは知らないが…有難いな』

「ありがとうございます！」

『おう。じゃあな、この店は気に入った。またくるよ』

「はい！」

～30分後～

『終わった』

「一時間内で終わりましたね」

『やっぱレポートは早くていいな』

「今回の報酬です」

『やっぱさつきよりかは少ないな』

「まあかかっていた賞金が少ないですしね」

『もうないか？』

「ないですね。新しいのが入ったら連絡しますね」

『ああ。頼む。じゃあな瞬歩』

～屋敷～

『たっだいまー』

「おかえりなさい」

「お帰りなさいです師匠」

「どうだったの？」

『時間が結構あったから二件受けたんだが…退屈しのぎにもならなかったぜ』

「持つてるその箱はなに？」

『これか？これは店が襲われてて、助けたら謝礼としてもらった』

「へえー何が入ってるの？」

『モンスター』

「モンスターって？生き物でも入ってるの？」

『違う。美味しい飲み物だよ』

「そうなのね」

『まあいいや。んじやまた出かけてくるぜ』

「ついてつてもいいかしら？」

『いいぞー』

　　〳〵街〳〵

『アランがいたな』

「ええ」

『とりあえず絶だな』

「あとをつけるのね」

『そうだよ（便乗）』

　　〳〵夜〳〵

『夜になったな…』

「そうね…」

『今夜は月が綺麗だな…』

「本気にしちゃうわよ？」

『本気にしていいんだぞ？』

「え？／／／」

『あつアランの方に動きがあるな』

「もう！／／／」

『ごめんて。追うぞ』

「わかったわ」

『なんかいい感じの店に入ってたな』

「そうね」

『能力発動、発動者と指定者のみに不可視と防音を付加』

「これで入るのね」

『んじやいきますか』

　　～入店30分後～

「美味しかったですね」

「そうですね」

「…」

「…」

『2人の間に静寂が流れてるな…』

「そうですね」

「ソフィアさん！俺と、結婚してください！」

『おっと…』

「あらあら…」

「はい！喜んでお受けします！」

『能力解除。おめでとう、アランくんや』

「緋凶!?見てやがったのか…」

「私もいるわよ？」

「お前ら…」

「アランさん、こちらの方々は？」

『どうも、お初にお目にかかる。俺の名は緋凶、ただのアランの友人だ』

「私はルーミアよ。」

「この2人は俺の友人で、今屋敷に住んでるですよ」

「どうも、ソフィアです。よろしくお願いします」

『よろしくな』

「よろしくね」

「そういえば今緋凶って言いましたか？」

『言ったが?』

「もしかしてあの緋凶ですか？」

『exactly. その通りだ』

「そんな方が友人ってすごいですねアランさん」

「そんなことはないさ。こいつとたまたま知り合えたっただけです」

『まあともかく、結婚おめでとうお二人さん』

今回はここまで！次回はとある姉妹の登場です。
お楽しみに！

登場！スカーレット姉妹！あと美鈴の就職

アランとソフィアが結婚して、五年が経った。そして2人の子供が生まれた。

「緋凶お兄様！遊んで！」

彼女の名前はレミリア。皆さんご存知のレミリアだ。

『わかったから服を引っ張らないでくれ』

「私も！遊んで！」

彼女はフランドール。こちらも皆さんご存知だろう。

『はいはいわかりましたよ。じゃあ隠れんぼでもするか』

「やるー！」

2人とも元気だ。ちなみにレミリアは4歳、フランドールは3歳だ。

『じゃあ…美鈴！良いところに、かくれんぼの鬼をやってくれないか？』

「いいですよ。何秒後に動き始めればいいですか？」

『30秒後だ。さあ隠れるぞ2人とも！』

「うんー！」

『さて、2人とも行ったところだし、俺も隠れますかなー』

ルールは簡単。隠れる範囲は屋敷の敷地内だけ、飛ぶのは禁止、見つかったらアランの部屋に行くだけ。

『とりあえずここがいいか』

俺は屋根の上に登り身を隠した。ん？屋根の上にはどうやって行ったのかだつて？そりゃもちろんとんでいきましたよ。え？飛ぶのは禁止じゃないのかだつて？飛んだんじゃないんだよ。跳んだんだよ。

禁止したのは飛行であつて跳躍じゃないからね。

〜30分後〜

『どうやらレミリアとフランが見つかったようだな。ん？今あつちの方が光つて…何か飛んできてる？』

俺の視界内でなにかが光ったかと思つたら、銃弾が飛んできた。

俺は唐突の事で反応が遅れ、頭に直撃してしまった。

『痛てえな！クソが！狙撃なんて姑息な真似しやがって、絶対殺す！』

「あ、師匠見つけた。ってなんで怒ってるんですか？」

『あ？美鈴か：俺のことを狙撃しやがった奴がいるからムカついただけだ』

「そうなんですか。で？狙撃者をどうするんですか？」

『無論、殺す。だがちよつと人間を食ってみたかったからな。美味そうだったら食う』

「さいですか」

『んじや行ってくるぜ』

俺は一旦地上に降り、狙撃された方角へ跳んだ。

後に美鈴から聞いたが、俺が消えたと思ったら、2秒後くらいにド
ンツ！っていう音が辺りに響いたそうだ。

「やった！狙撃成功！これで報酬がもらえるのかな…」

『報酬？誰が出すんだ？』

「そりやもちろんこの国の領主様だよ」

『へえー。そんなことよりさ、お前が狙撃したターゲットがとなり
にいるのによくもそんな呑気でいられるよな』

「え!?!なんで生きてるんだ！頭に当たっただろ！」

『頭に当たった程度で死ぬわけないだろ。女の狙撃手だなんて珍しい
な』

「わ、私を殺すのか？」

『殺すのもいいけどな…お前は美味しいのか？』

「え？」

『だから、お前は食ったら美味しいのか？』

「あ…い、いや…食べないで…助けて…」

『じゃあ…お前は俺に忠誠を誓えるか？』

「あ、ああ！誓います！」

『よし、じゃあ着いてきな』

「わかりました」

〜屋敷到着〜

「この人は誰ですか？師匠」

『こいつはさつき俺を狙ってたスナイパーだ』

「狙われた相手を連れてくるのってどうなの？」

『いいじゃねえか。俺に忠誠を誓ってくれるようだしな』

「口先だけの可能性があるわよ？」

『その場合は俺が即座に殺すから大丈夫だ』

「そう」

『そういえばお前の名前を聞いてなかったな』

「エマです」

『ん？ファミリーネームは？』

「ないんです…私は親に捨てられて、拾われたんです」

『そうか…そんな過去があったんだな。お前は今日から九条エマだ。そう名乗れ』

「え…九条って、どうしてですか？」

「そうだぞ、なんならスカーレットと名乗らせれば…」

『こいつは俺の養子にしようと思ってる。だから九条だ』

「でもお前の名前は緋凶で、九条なんてついてないだろ」

『お前らには教えてなかったな。俺の真名』

「師匠の…」

「真名…だと？」

『そうだ。俺の真名は九条和人だ』

「九条和人だと!?あの絶対神のか!？」

『そうだ』

「最強の人間にして最高の神さまだったとは…」

「ん？美鈴今のはどういうことだ？」

「だから、師匠は御神楽ノアっていう鬼子母神を倒した人間でもあるってことですよ」

『あーあ、美鈴言っちゃったよ』

「お前は本当にすごい奴だったんだな」

「ご主人！ありがとうございます！」

『なんだ？ご主人じゃなくて父さんでもいいんだぞ？』

「い、いえ…それはちよつと恥ずかしい…／＼／＼」
かわいいなこいつ

『じゃあたまに呼んでくれ』

「わ、わかりました」

『…』

「どうした？」

『美鈴、お前とりあえずここで門番の職につけ』

「いいですけど…どうしてです？」

『今な、大勢のヴァンパイアハンターがここに向かってきてるんだよ』

今回はここまで！次回はヴァンパイアハンター狩りです。

お楽しみに！

殲滅！ヴァンパイアハンター！

『ここに沢山のヴァンパイアハンターどもが向かってきてる。狙いはもちろんアランだ』

「だろうな」

『エマー！お前は屋根の上から狙撃をしろ！俺とルーミアで前にでる。アラン、お前は門のところから俺とルーミアのバックアップだ。いいか？誰も油断するなよ？』

「緋凶さん！私と娘たちは…」

『お前たちは屋敷の、アランの部屋にいてくれ』

「わかりました！レミリア、フラン、行くわよ」

「わかりましたお母様」

「うん」

『美鈴、お前は門で援護してるアランを援護しろ。近づいてくる敵は、全て倒せ』

「はい！」

『総員！戦闘配置につけ！』

〜30秒後〜

『とりあえず、正門側は俺とルーミア、残りの三角は俺の分身を置いとくから大丈夫だな』

「ええ」

『油断はするなよ？相手は世界各国から集まってきた腕の立つハンター達だ。お前は強いが油断したところを狙われれば、弱い』

「わかったわ」

『ちようど時間は夜だ、もしかしたらハンターたちの中にほかのヴァンパイアが混じってるかもな』

「まあ、頑張らしましょう」

〜戦闘開始〜

ハンター達「行くぞー！」

『行かせねえよバカどもが。バレット・レイン！』

「「ギャアアアアアア」」

「なんだあいつ！化け物か！」

『どうもこんばんは人間諸君。俺の名は緋凶、わざわざ殺されに来てくれてありがとう。んじゃさようなら。イア・ジユブニグラス』

俺はヴァンパイアハンター達のところに行き、死の風を送り、殺した。

『本来この後に黒い仔山羊が出てくるはずなんだが…まあ、借り物だしこの程度だろ。力も開放してないしな』

〜正門〜

『やあやあヴァンパイアハンター諸君。スカーレットになんか用か？』

『その屋敷に吸血鬼がいることはわかってるんだ！速く出せ！』

『あ？誰に向かって口聞いてんだ？』

『まずは私がやるわ。いいわね？』

『ああ、任せた』

『ダークウェイブ』

ルーミアは闇の津波のようなものでハンター達を飲み込み、半分ほど消した。

『新技か、じゃあ俺も、結界発動、デイレイマジック…メテオインパクト！』

俺は正門にきたハンター達全員を結界の中に閉じ込め、そこに流星群を降らせた。

『あなたのも新技ね』

『とりあえずここは終わりだな』

〜裏門〜

『どうやら東側と正門側は片付いたみたいだな。つとすでに何人かエマが倒してくれてるようだな』

『突撃！』

『能のない雑魚どもが、消えとけ、極大消滅呪文…メドロア』

ハンター達「ギヤアアアアアアア！」

『1%開放もしてないで、この威力…ちよつと力増えすぎた感はあるな。ん？屋敷にいつのまにか侵入されてたか…仕方ない、行くか』

〜屋敷内〜

『ッ！まずい！アランの部屋に進んでってる！』

「ここから気配を感じるな…」ガチャ

「え!?なんでここまでできてるの!?緋凶さん達が見逃すわけないのに…」

「お母様…」

「お前ら、吸血鬼だな。討伐対象だ」

「レミアア！フラン！あなた達は逃げなさい！」

「それじゃあお母様が！」

「2人を逃がす時間稼ぎくらいはできるわ！」

「あ？黙ってるよ」

そう言いながら男はソフィアを蹴り飛ばした。

「お母様！」

「お母様とお姉様が殺されるのは嫌！えーっと確か…キユツとしてドカーン！」

すると先程まで無傷だった男が弾けて死んだ。

「え？」

「え？フラン…？今あなた何をしたの？」

『おい3人とも！大丈夫か!?…なんだ？これは』

「緋凶お兄様！私、お母様とお姉様を守りました！」

『フラン、これはお前がやったのか？』

「はい」

『とりあえず、よく2人を守ってくれたな。ありがとう。だが、今の力はあまり使えない』

『どうしてですか？』

『お前だってみんなに怖がられたくないだろ？』

「はい」

『お前の能力にリミッターをつける。これは俺以外には絶対に解除出来なくするが、いいか？』

「いいよー」

俺はフランの頭を軽く撫でた後、肩に手を置き、フランに呪文をか

今回はここまで！次回は日本への帰国です。
お楽しみに！

俺は日本に帰ってきたあああああ！

ヴァンパイアハンター達の襲撃から早15年経った。

『なあ、アランや』

『なんだ？ 緋凶や』

『俺はそろそろ旅に戻ろうと思うんだ』

『ほう…』

『行っていいかな？』

『お前の気分で旅に出ろよ。それがお前らしい』

『そうだな。そうじゃなきゃ俺じゃない。んじゃ旅に出るわ』

『おう。だが、たまには帰って来いよ？ レミリア達が寂しがるから』

『そういうお前も寂しいんじゃないのか？』

『ああ、寂しいな。だがお前のことだ、また会えるって思えるからな』

『泣かせてくれるじゃあないか。大体300年後くらいにまた会いにくるぜ』

『ああ…またな！』

『おう！ またな！』

〜大広間〜

『俺、旅に出るわ』

『そんな！ 突然すぎるよお兄様！』

『もつとたくさん遊んでもらいたかったのに…』

『師匠！ 私もついて行っていいですか？』

『だめだ。「なぜ！」お前にはここを守ってもらいたいんだ。俺が人間の時に初めてできた帰る場所をな』

『師匠…』

『頼めるか？』

『はい！ 絶対に守ります！』

『いい子だ』

『あつ…』

俺が頭を撫でてやると、気持ち良さそうな声を出した。

「あつ！美鈴ずるい！お兄様、私も！」

『はいはい、順番にね』

俺はフランとレミリアを撫で、次を待った。

『どうしたんだ？エマ、お前も来いよ』

「い、いえ…私はいいですよ」

『遠慮すんなって。な？』

「は、はい／＼／＼」

『よしよし。お前もここを守ってくれ』

「う、うん！わかったよ。お、お父さん／＼／＼」

か、かわいい！

『はっはっは！可愛い奴め！』

「：／／／」

『つとそうだ忘れてた。エマ』

「なに？」

『お前に妖力をやるよ』

「なんで？」

『そうじゃないと、俺が帰ってきた時にお前がいないと寂しいんだよ。俺にできた初めての娘だからな』

「う、うん！」

俺はエマに妖力を分けた。

『よし、じゃあ行くかルーミア』

「私、一度あなたから離れて旅に出るわ」

『なに!?なんでだ？』

「このままだと貴方に頼りつきりになって、強くない気がするの」

『そうか…わかった。じゃあまたな！』

「ええ！また300年後にここで会いましょう」

『おう！』

ルーミアは西洋に、俺は日本に旅立った。

『とりあえず日本に行くか。テレポーテーション』

〜日本到着〜

『久しぶりだな…100年くらいしか経ってないはずなのに…』

『久しぶりだな…100年くらいしか経ってないはずなのに…』

『とりあえず適当に歩くか』

〜二時間後〜

俺の前には魔猪が立ちはだかっていた。

『お腹空いたなー魔猪って食べれるのかなー?』

俺は気絶するほどの殺気を魔猪に当てた。

『食ってみるか。豪快に丸焼きで食うかな』

〜20分後〜

??? 視点

わたしはさつきから上級妖怪に食べられかけている。ずっと走って逃げていたせいで体力ももう限界、お腹も空いていて走れなくなっている。

「あれ?あつちの方からいい匂いが…」

美味しそうな匂いに誘われて森を進んで行くと、少し開けたところに人間が、大きな猪を食べていた。わたしは一応妖怪で人間も食べる。

人間の背後からゆっくり近づき、残り15メートルくらいのところで:『お前には無理だ。やめておけよ?』

「気づかれていたのね」

和人視点

さつきから俺の背後からゆっくり近づいてきてる奴がいるな:弱い妖怪か。もう教えてやるか。

『お前には無理だ。やめておけよ?』

「気づかれていたのね」

俺の背後に来ていたのは少女だった。

『気づかれたくなければ気配くらい消せよ?』

「消していたのだけれど…」

『なるほど、それがお前の限界か』

「どうするの?私を殺すの?」

『うーん:お前名をなんというんだ?』

「八雲紫です」

『ゆかりんか』

「ゆかりん言うな」

『お前はなんの妖怪だ?』

「スキマ妖怪です。って言っても私の種族は私しかいないんだけどね」

『なるほど…スキマ妖怪ね。どんな能力があるんだ?』

「私以外にできる人がいないのはこれですね」

紫は空間を開いて目が沢山ある亜空間のようなものを出した。

「まあこの空間は人1人しか入らないんですけどね」

『お前以外にできないのね…亜空間切断』

俺は空間を裂き、亜空間をむき出しにした。

『俺もできるぜ』

「…」

紫は落胆した様子を見せた。

『俺のやつは…果てまで行ったことないからわからないけど、多分世界一つ分くらいはあるな』

「化け物ね…そういうえば貴方の名前はなんて言うの?」

『ん?俺は…』

俺はどの名前を使うべきか悩んだ末に

『俺は緋凶だ』

緋凶の名を使うことにした。

「緋凶ですって!?!あの世界最強の!?!」

『せやで』

今回はここまで!次回はゆかりんが弟子になります。(ゆかりん言うな)

聞こえませんか。お楽しみに!

4 人目の弟子

「緋凶ってあの世界最強の!？」

『せやで』

「なんでそんな妖怪がこの国に来てるのよ」

『この国が生まれ故郷だから』

「一度も聞いたことないわ、貴方ほどの妖怪の故郷がここだなんて」

『そりやな、俺は元々人間だし、世界中で死んだことにされてるからな』

「なんで?!」

『そんなの、10億の妖怪どもを相手にして、更に原子爆弾まで食らってんだ。そうなるだろう』

「え?10億の妖怪を相手にしたって…それは生物最強って言われた御神楽ノアじゃないの!」

『あつ自分でドジ踏んだ』

「どう言うこと?」

『それはだな…二億年と大体五百年前、俺は、元々御神楽ノアっていう人間だった。そんな俺は昔に存在した都市で人妖大戦が巻き込まれ、その都市の人間たちはみんなロケットで月に移住したんだ』

「…」

『俺は、弟子を騙してロケットに乗せ、俺は乗らずに発射させた。そのせいで俺は命を犠牲にして都市を救った英雄となったらしい』

「つまり?」

『俺はかつての仲間たちにとって死んだ奴になったから、名前を変えたってことだ』

「なるほどね」

『おっさんの長話に付き合ってくれてありがとな』

「私も珍しい話が聞けたからいいわ。じゃあね」

『少し提案があるんだが…お前俺の弟子にならないか?』

「どうして?」

『お前はどうかやら上級妖怪に襲われてるらしいし、俺ならお前の能力

を鍛えられるからな』

「ならお願いするわ」

『師匠と、そう呼べ』

「わかったわ師匠」

『まずお前の能力量を見る。座禅を組んで集中するんだ』

「はい」

『体が力で満ち溢れて、体外に漏れ出すようなイメージをするんだ』

「…」

『物凄いな…潜在的な妖力量がとてつもなく多い…』

「どうでしたか？」

『お前自分は妖怪の中でどれ位の位置にいるかわかるか？』

「私は下級妖怪だと思ってますけど…」

『お前の妖力量は中級上位クラスだ』

「やった！」

『だがお前は戦う術をあまり持っていないようだからな、これから俺の結界術とかを教えていくぞ』

「お願いするわ」

『とりあえずここじゃあれだから街を探るか。この近くに街はあるのか？』

「私が知る範囲で、この近くにはないわね」

『なら諏訪に行くかな。あいつら元気にしてるかなー』

「あいつらって？」

『諏訪にいる諏訪子と神奈子って奴だよ。俺の友人達だ』

「諏訪子と神奈子…神さまが友達って…」

『神の弟と妹がいるけどまいいや、行くぞー』

「え？あつ師匠待って！」

（諏訪）

『懐かしいな。ルーミアも連れてきたかったぜ』

「そのルーミアってもしかして常闇妖怪のルーミア？」

『そうだ。元々あいつと旅してたんだよ』

「ルーミアさんはどうしたの？」

『あいつは一度俺から離れて旅に出るって』

「そうなのね」

『んじゃあいつらに会いに行きますかね』

今回はここまで！次回は2人との感動の再会と紫の修行開始です
お楽しみに！

奴らとの再会と、修行開始

『どんな反応を見せてくれるか楽しみだ』

「名前しか聞いたことないからどんな感じなのか楽しみだわ」

『まあとりあえず守矢神社に行かないとな』

「そうね」

『つと忘れてた』

「何を？」

『いま出してる力霊力混ざってたわ。危ない危ない』

「なんで危ないの？」

『あいつらの前で霊力と神力しか出してなかったけど、今一応妖怪だから、妖力だけにしとかないとな』

「ふーん」

『大体、出してる力によってバレたらつまんないからな』

「そうなのね」

〜守矢神社階段前〜

『おっと早速上に誰がいるな。これは…紗奈のじゃないな』

「誰？その紗奈って人」

「紗奈は、俺の友人の娘だ』

「へえー」

『まあ大体予想はついてるけどな』

〜神社階段上〜

『君は誰だ？（唐突）』

「ん？ツ！妖怪の力！妖怪め！何をしにきた！」

『お前は誰だって聞いてんだよ』

「わ、私は東風谷小夜です…」

『小夜ねおつけ覚えた。ってか俺妖力ほとんど出してなかったのによく気づいたね』

「いえ、それが私の能力ですから」

『どんな能力なんだ？』

「力を感じる程度の能力」

『ほう…それよりも友人の久しい帰還に顔すらも出さない薄情者を引きずり出すかな。妖力解放』

俺が妖力を解放すると、激しく空気が揺れた。

「一体何事だい!?!お前は誰だ?」

『あらあら寂しいこと言うじゃないか。少し見た目が変わったくらいで忘れてるのか?』

「生憎、私には妖力を持った知り合いはいないんでね」

「おいどうした諏訪子、何かあったのか?妖怪か…何が目的だ」

『お前もかよ…忘れてんなら思い出させてやるよ』

「え?」

『妖力から神力に変更。どうだ?思い出したか?この馬鹿共が』

「…ノア…」

『思い出したか?見た目が変わった程度で忘れんなや』

「私たちはノアが妖力を持つてることを知らなかったからね」

『そうだったか?』

「そうだよ。で?その少女は?」

『俺の4人目の弟子』

「また弟子を取ったのかい」

『まあな。お前らと別れた後にこいつ含め2人弟子を取ったからな』

「そのもう1人の弟子はどこにいるんだい?」

『俺の技を5つも盗んだからな、もう免許皆伝にした。まあもつともそいつはまだ弟子のつもりらしいけどな』

「ノアの技を盗むなんて相当な実力者だね」

『紫、自己紹介だ』

「はじめまして、八雲紫です。ねえ師匠、諏訪子って人こんなに小さかったんだね」

「…」

『言ってやんなよ。こいつも気にしてんだから』

「あらごめんなさい」

『俺に免じて許してくれや』

「はあ…わかったよ…」

『よし！じゃあお前ら！久しぶりだ、かかってきな！』

「まじですか」

「ヤバイね」

『さあ来いよ』

「まずは私からだ、喰らえ！」

神奈子は御柱を3つ作り出し、俺に向けてレーザーを放った。

『うーん…これでいいや、イオン・ミラーフォース』

俺はレーザーを別の方向に反射させた。

『次はこつちだ、発勁』

「カハッ！」

「次は私だ！おりゃ！」

諏訪子は巨大な岩の手を作り出し、俺を叩き潰そうとした。

『ブラックホール』

俺はその巨大な手を空間に作り出したブラックホールで吸い込み、消滅させた。

『紅蓮拳』

「ぐふっ！」

『お前ら弱くなってるな、鍛錬が足りないぞ』

「ノアは技の種類が増えてるね」

『まあいいや、ちよつとしばらくここに住ませてもらうわ』

「いいよ」

『じゃあ紫、修行を始めるぞ』

「はい！」

『妖力弾をどれだけ出せるのか見せてもらおうぞ』

「わかりました」

『俺に向かってやってみろ』

紫は視界内が埋まるほどの妖力弾を放った。

『まじか…すごいな』

「私、紫にも負けるかもしれない…」

『消滅、対象妖力弾』

「意外とできたわ」

『お前、結構才能あるな。俺はこれからお前に戦うための技と守るための術を教えるからな』

「お願いします」

今回はここまで！次回は紫の修行の続きと大和へ遊びに行きます。
お楽しみに！

妹たちとの再会

『まず、お前に教える術は二重結界だ』

「二重結界ってどうやるの？」

『まあ待て。お前はスキマ妖怪だ。スキマ妖怪は境界を操れる。お前が普段から使ってるスキマはあれはお前が無意識に空間の境界を弄っている。まあつまり、境界を弄って結界を生み出せばいいんだ』

「まあやれるところまではやるわ」

『まあ実際に攻撃されれば出しやすくなるだろ、行くぜ』

「え？ちよつと待って！」

『普通のパンチ』

「(普通なら大丈夫よね) 二重結界」

『えい』

「なっ!?!きやあああー!」

紫の展開した結界は俺の『普通のパンチがいとも容易く割り、紙一重で止められた拳の風圧で、紫は神社の庭の端まで飛ばされた。

『油断しやがって。お前俺が寸止めしなきゃ少なくとも死にかけてたぞ』

「なんで：普通のパンチじゃなかったの？」

『普通だよ。力をほとんど入れてない普通のな』

「じゃあなんで風圧で20メートルも吹っ飛ばされないといけないのよ」

『俺の普通は神にとっても死にかけるような威力だからな』

「化け物ね」

紫はそういうと立ち上がった。

『師匠に酷いこと言うじゃないか。仕置をせねばな。瞬撃』

俺は紫の目の前に一瞬で移動し、頭の高さに正拳突きを寸止めのつもりで、放った。

「ッ!?!」

紫は咄嗟に拳の進行方向にスキマを作り出し、自らの反対側に出口を作ったが、拳の直線上にあった山の一部が消滅した。

「ものすごい威力になったね…」

「私たちにやったのはかなり加減をしてくれてたんだね…」

「敵じゃなくて良かった…」

「今のはどうやったんだい？」

『ただ単純に拳圧で空気を大砲のように押し出しただけだ』

「ご、ごめんなさい…」

紫は膝を震わせながら謝ってきた。

『気をつけろよ？弟子になったからには少し厳しめで行くからな』

「はい」

『今度は油断せずに全力でやってみろ』

「二重結界！」

『普通のパンチ』バリッ！バキ！

「やっぱり壊されちゃうのね」

『まあ仕方ないだろうな』

「全力で結界を作ったから、すごい疲れた…」

『じゃあ休んでおけ。俺はちよつと行く場所があるから行ってくるわ』

わ』

「いってらっしゃい」

く大和く

『久しぶりに来たぜ…まあとりあえずあいつらがいる場所まで行くか』

く神々の住処く

『また門番に捕まるのはめんどくさいからな。能力発動、発動者に不可視を付加。絶』

『みつけた』

「はあ…暇ですね…久しぶりに龍華お姉様のところに行きましようか…」

『暇だからって理由で来られる龍華が可哀想だな』

「んー暇だー」

『ちよつと驚かせてみようか。妖力解放』

「ッ!? 妖怪!? 門番は何をやっているのかしら…あれ? どこにもいない? 妖力はあるのに…」

『面白い反応をしてくれるな。絶解除』

「! 気配が出てきた! サンライズシュート!」

『いきなり攻撃かよ! 消滅 対象 我を狙う火』

「!? 火が!」

『もうそろそろ出てやるか。能力解除』

「ようやく正体を現しましたね!」

『どうも』

「どうもじゃ無いです! 妖怪がここに来て生きて帰れると思っているんですか?」

『思ってるな。実際帰るからな』

「ふぎけないで! アトミック…フレア!」

『マヒャドです』

天照が放った巨大な炎の球は俺が放った氷の魔法で凍り、砕けた。

「何!?!」

『はあ…弱いなあ…もつと強くなってると思ってたのになあ…』

「喰らえ! フレイムブラスト!」

『お、新技か。なら、ブラッドライトニング…バースト!』

天照が放った灼熱の炎と俺が放った超高圧の赤雷は互いに相殺したかのように見えたが、俺が勝った。

「きやあああ!」

『中々な技だな』

「くっ…」

『やあ天照よ』

「…誰ですか?」

『かあく酷いなあお兄ちゃん泣いちやうよく』

「え? いや…泣かないでくださいよ」

『わかった』

「もう…」

『妖力から神力に変更。やあ天照よ』

「お兄様！」ダキッ

『おーよしよし。暇だったんだな、遊んでやろう』

「ありがとうございます！」

『俺はよく遊びを知らないからな。戦闘くらいしか知らん』

「戦闘は遊びじゃないと思いますが…やりましょう！」

『じゃあやるか！』

「私からいきます！ライジングサン！」

『閃光8連斬』

『零閃』

「フレ임シールド！」

「ブレイズスラッシュ！」

『ダークブレード』

『いくぜ？』

俺は天照から15メートルほど離れた。

『結界魔法“サンライズゾーン”、強化メラガイアー』

「フレームバースト！ブラストバーン！」

俺らが放った灼熱の炎は相殺し合い、消滅した。

「姉さん何をしてるんですか？…って兄様!？」

「あら須佐男」

『よお』

「久しぶりですね兄様。だいたい4億年ぶりくらいですか？」

『いや？えっとー…多分200年ぶりだ』

「え？200年前というと…諏訪大戦でしょうか？その時には兄様は

いませんでしたよね？」

『いたぞ？諏訪側にな』

「え!？」

『お前ルーミアっていう妖怪を覚えてるか？』

「大戦の時に私に斬撃を飛ばして来たやつですよ？そいつがどうかしましたか？」

『ルーミアが お前と戦っても負けるって思ってお前との戦いをノアってやつに任せたよな？』

「そうでしたね」

『そのノアが俺だ。今は緋凶って名前でやってるけどな』

「緋凶!?世界最強の妖怪じゃないですか」

『まあそうなるな』

「知らなかった…」

『お前もやるか?』

「ええ!是非!」

今回はここまで!次回は姉弟タッグ vs. 和人です。

お楽しみに!

姉弟タツグ V S . 兄と竹取の予兆

『お前もやるか?』

「はい!」

『かかってきな』

『行きます!ゼヤアア!』

須佐男は上段から刀を振り下ろした。

『雷光一閃』

俺はそれを横薙ぎに防いだ。

「隙あります!フレイムシユート!」

『零閃32型』

天照が放った炎の槍は俺が放った斬撃によつて破壊された。

『いくぜ須佐男。武装硬化、三步一撃』

「くっ!うわああああ!」

俺が放った拳を須佐男は刀で受け止めたが、踏ん張りきれずに吹っ飛ばされた。

『天照、油断するなよ?瞬歩』

「ツ!?消えた」

『後ろだ。虚刀流…薔薇』

俺の体重を乗せた回し蹴りで天照は前方に吹っ飛ばされた。

「ぎやあああ!」

『やっぱ戦いは楽しいな!』

「そうですね」

『さあこいよ須佐男。お前の全力でな!』

「ええ!天叢雲発動!」

『一気に戦闘力が跳ね上がったな。じゃ俺も、喰種化!』

今までは8本だった尾赫が今は12本に増えていた。

「いきます!絶・雷光一閃」

『尾赫武装硬化、紅蓮一閃』

『鬼皇乱打』

「九頭龍閃!」

『天照、参加してもいいんだぞ?』

『そうですよ姉さん。2人でやらないと勝てません』

「わかったわ。巻き込んだじゃうかもしれないけど…:しょうがないわよね!」

『こい!』

『ブラストバーン!』

『空破・雷鳴拳!』

『零閃!』

『紫電』

「姉さん!協力技です!」

「わかったわ!」

そういうと、天照は須佐男の剣に炎を纏わせ、溜め始めた。

『見てみたいからな。待とうじゃないか』

「その必要はありませんよ!だってもう溜まりきったんですから!」

『そうか。ならいくぞ!』

「はい!」

『鬼神連斬!』

「紅蓮…:九頭龍閃!」

2つの剣撃がぶつかり合い、互いに相殺していた。が、片方が圧倒し始めた。そして剣撃が破れたのは…:俺だった。

『ほう…:』

「やった!やりましたよ姉さん!」

「ええ!」

『この俺の攻撃の上を行くとは…:なら俺は1%を解放しないとな』

「え!?!」

「もうあれ以上の技は出せない…:」

『そうか。なら終わりにしようか』

「はい…:」

『いやーお前ら本当に強くなったな!』

「でも2人でも勝てませんでした…:」

『そりやしょうがないさ。俺は何億年間鍛えてたと思ってるんだ?』

「そうですね…次は勝ちます！」

『その意気やよし！時間があればいつでも相手してやろう！』

「はい！」

『じゃあな。俺は帰るぜ。天照、暇な時じゃなくても龍華のところに遊びに行くんだぞ』

「はい。お兄様こそ。龍華姉様が会いたがってましたよ」

『oh…わかった。今度帰るって言つといてくれ。じゃあな』

く 諏訪く

『だっだいまー』

「おかえりー」

「お帰り」

「おかえりなさい師匠」

『おう』

「どこに行ってたんだい？」

『大和』

「何をしに行ってたの？」

『妹と弟に逢いに行つて、遊んでた』

「へえ…大和に妹と弟が…」

『諏訪子と神奈子は知ってるよな』

「私は天照様しか知らないな」

「私もだよ」

『弟は須佐男だ』

「須佐男様!? やっぱり規格外だね…」

「逢いに行つてどんな遊びをしてたんだい？」

『戦闘』

「遊びじゃないよ…」

『楽しかったぜ。2人とも強くなつて嬉しかったよ』

「そうかい」

『ちよつと街に出かけてくるぜ』

「まったく…嵐のようなやつだね」

く 街く

『なんかいい話ないかなー』

「なあ知ってるか？京の都の絶世の美女の話」

「ああ知ってるぜ…あまりの美女だから貴族たちが一斉に求婚したんだってな」

「なんでも帝も求婚したらしいぜ」

『面白そうな話だな…京か…行ってみようかな』

く神社く

『俺ちよつと京に行つてきます』

「そりやまたどうして？」

『面白そうな話を聞いたからな』

「そうかい…行つてきな」

『行つてくるぜ』

今度はここまで！次回は成長した輝夜が登場します。

お楽しみに！

竹取編

竹取編始動！再会するは輝夜姫

『京…もう多分金閣はできてるだろうな』

俺は誰も居ないはずの虚空に話しかけたが、返事は返ってこなかった。

『…はあ…もういいや…じゃあな紫。瞬歩』

「(なんでバレちゃったのかしら…)」

～京到着～

『まあ毎度のごとく、新しい街に来て行くところって言えばあそこしかないでしょ』

～団子屋～

『おっちゃん団子とりあえず60個くれ』

「60!?そんなに持てるのかい?」

『いや?ここで食べる』

「わかった。ちよつと待っていてくれ!」

「団子盛り合わせだよ」

『あんがとさん』

～20分後～

『もう256個食べたからいいや』

「お勘定だね」

『そうだが…お土産用で団子各種合計60本くれ』

「わかったよ」

～十分後～

「遅くなったね。合計で…」

～勘定終わり～

「毎度あり!」

『とりあえずあのでつかい建物に行ってみるか』

そう言いながら、俺は空中に水色の波紋を作り出し、その中に団子を入れた。

〜屋敷前〜

『遠くから見ても大きかったけど近くだとより大きいな…ここに絶世の美女？とやらが居てくれたら助かるんだけどな…』

「何かお困りですか？」

『ん？』

俺が高い塀を前にボヤいてると隣から貴族感漂う青年に話しかけられた。

「俺は藤原不比等だ。お前は？」

『俺は九条ノアだ』

俺の名前はどれもビッグネームになってしまったので、使えなかったから、適当に混ぜて名乗った。

「ノア殿だな。」

『俺は旅して居たんだが、この街に着いたはいいものの、地形がまったくわからなくてな。とりあえず遠目から見えたこの屋敷を目指してたんだ』

「なるほど…ノア殿は旅をしてあったのだな…一つ頼みごとがあるんだが…聞いてはくれんか？代わりと言っちゃなんだが、ノア殿はこの街に来たばかりだと言うことは泊まる場所がないだろう？」

『まあ、そうだな』

「うちに来てくれ」

『お！そりや助かるね。して、その頼みごととはなんだ？』

「俺の娘に旅の話の話を聞かせてやってくれないか？」

『いいぜ。任せてくれ。どんな旅人よりも長く旅をして来たからな』

「ではまず屋敷に行きますか」

〜屋敷到着〜

『ワーオこちらもあるの屋敷に負けず劣らずの大きさだな』

「娘はこっちにいる。着いて来てくれ」

『はいよー』

「妹紅？入るぞ」

「お父様こんばんわ。そちらの方は？」

『どうも。妹紅お嬢さん。私は九条ノアと申します。貴方のお父様に頼まれて、貴方に旅のお話をしに参った所存です』

「ノア様ですね。ノア様は緋凶という妖怪をご存知ですか？」

『ゴツホゴツホ』

「どうなされたのだ？」

『いや：突然緋凶という言葉聞いたのでね：はい。知っていますよ』

「では緋凶について教えてくださいませんか？」

『それはどうしてですか？』

「緋凶はすぐく有名な妖怪だと聞きましたので、どんな方なのかと気になって」

『妹紅お嬢さん。いや、妹紅、ここに妖怪がいても驚かないか？』

「え？はい、おそらくは…」

『緋凶は実は俺なんだ』

「ええ!？」

『じゃあ妹紅。お前に教えよう。未だ完全には語られていない、緋凶の旅の話を』

「わーい！」

『緋凶は今からおよそ13億年前に…』

〜緋凶説明終了〜

『というわけだ。』

「すごい方だったのだな、ノア殿は」

「ありがとうございます！ノア様！」

『なあ：妹紅、その喋り方を続けるの疲れないか？』

「うん疲れるよ」

『やめていいんだぞ？』

「でも、この喋り方だと1人前の女性になれないって言われて…」

『少なくとも俺の知り合いには砕けた喋り方の1人前の女性が3人はいるぜ』

『ならずつとこの喋り方にするね』

『おう。あと、しばらくここに住まわせてもらおうからよろしくな』

〜3日後〜

「ノア殿、かぐや姫は知っていますかな？」

『ああ、知ってるぞ。絶世の美女だっていう噂を街で聞いたからな。そいつがどうしたんだ？』

「多くの貴族たちが一斉に求婚してるそうだ。俺も求婚してみようと思ってるんだ」

『そりやまたどうして？』

「妹紅の母親は…妹紅の幼き頃に亡くなってな、どうにかして母親代わりの人を探してたんだ」

『なるほど…不比等が行くときに俺も一緒に行くぜ』

「それはどうして？」

『俺の知り合いに1人同じ名前の奴がいるから、その確認だ。別に求婚するわけじゃないさ』

「そうか…ノア殿が居てくれたら心強いですな！」

〜2日後〜

「それじゃあ行きますぞ」

『おう』

〜2人移動中〜

「ノア殿の知り合いとはどのような人なのですか？」

『あいつは…遊び好きで面倒くさい事とか勉強が嫌いだな』

『なるほど』

『おつとそろそろ見えてきたぜ』

〜到着〜

『俺と不比等含めなかったら4人か…案外少ないな』

「まあ今までの求婚者は全て断られて、もうほとんど居なくなっただけでしょうな」

『まあ、そうなるな。んじゃ行きますか』

〈面談?・開始〉

「みなさんようこそお越しくださいました。私は輝夜です。まずはみなさんに自己紹介と目的をお聞きします」

「こんにちは。私の名は大納言大伴御行と申します。かぐや姫に求婚しに来ました」

「私は石作皇子です。かぐや姫に求婚しに参りました」

「俺は右大臣阿倍御主人です。かぐや姫に結婚を申し込みに来ました」

「私は中納言石上麻呂足と申します。かぐや殿に求婚に来ました」

「俺は藤原不比等です。求婚をしに来ました」

『私は九条ノアと申します。結婚を申し込みに来たわけではなく、ただ、あなたと話がしたいと思い、参りました』

「じいやちよつと…九条ノア様、お話の件、今からでもよろしいですか?」

『はい』

「みなさんには、2日後、課題を出します。課題を達成できた方と、結婚いたします。ありがとうございます」

『不比等、家でな』

「ああ」

「それではノア様、こちらに。お話をしましょう」

今回はここまで! 次回は、輝夜に正体を明かした後、難題が渡されます。お楽しみに!

輝夜驚愕!?! 和人の難題

「それではノア様、お話をしましょうか」

『そうですね』

「私、貴方にいくつか聞いてみたいことがありますの」

『答えられる範囲でしたらお答えします』

「では…貴方の、ノアという名前…聞き覚えがあるのですが…」

『御神楽ノア、ですね。偶然ですよ』

「そうなのですか。次に、貴方のような見た目の人を1人知っているのですが」

『もういいか。久しぶりだな、輝夜。覚えててくれたなんてな』

「ノアっ！忘れるわけじゃないじゃない…貴方がロケットに乗らずに地上に残ったって聞いて、本当に悲しかったんだから!」

『よしよし…ごめんな？俺はどうしても残らなくてはいけなかったんだよ。とある鬼のリベンジを受けるためにな』

「そうだったのね…でもこうしてまた会えたからよかったわ!」

『お前は変わらないな』

「そういえばルーミアは?」

『あいつは修行の旅に出たぞ。多分そろそろ戻って来てくれると思うてる』

「そうなの」

『そういえばお前、求婚の難題についてどうするつもりだ?』

「うーん悩んでるのよねー」

『なら緋凶の首、絶影龍の逆鱗とかはどうだ?』

「なんで?」

『2つとも、俺絡みだから』

「どういうこと?緋凶ってあの世界最強で、伝説の賞金稼ぎでしょ?それがノアにどう関係してるの?まさか…」

『そう、そのまさかだ。緋凶は俺だ。ついでに、絶影龍も俺だ。ちよつと見た目変わるけどな』

「へえー」

『お前、結婚はするつもりはないんだろ？』

「もちろんよ。私、ノアが好きだもん」

『面と向かって言われると結構くるな…』

『どうしたの？』

『気にすんな。それより絶対に手に入れられないやつっていったら火鼠の皮衣だな』

「なんで？」

『もうこの世にいないんだよ。絶滅したんだ』

「なるほどね、じゃあ…」

俺と輝夜は日が暮れるまで貴族たちにどんな難題を押し付けようか話し合い、誰に何を取りに行かせるかまでも計画した。

『貴族たちには3日後に集まってもらうか』

「そうね」

『取り敢えず俺は今から少なからず入手可能なやつを取り押さえてくるぜ』

「わかったわ」

『あ、一応作戦も伝えておこう。貴族たちが集まってる場所に俺も一緒にいるから、俺にも適当に課題を出してくれ。すぐにとってくるから』

「わかったわ。行ってらっしゃい」

『また明日な。遊びに来るぜ』

〜3日後〜

俺と輝夜の作戦が始まるまでの二日間俺は輝夜の家遊びに行き、時間を潰した。そして作戦決行の日になった。

「みなさんには課題を出しますので、それを達成し、証拠品を一週間後に持ってきてください。」

大伴御行様は緋凶の首を、「御意」

石作皇子様には仏の御石の鉢を、「わかりました」

安倍御主人様には火鼠の皮衣を、「承知しました」

石上麻呂足様には燕の子安貝を、「はい」

藤原不比等様は蓬萊の玉の枝を、「了解です」

九条ノア様には太陽の畑の向日葵を、「はいよ」持ってきていただきます」

「ノア殿、俺じゃ蓬萊の玉の枝を手に入れられないであろう」

『俺に頼むのか?』

「いや違う。作ろうと思っておる」

『…(これ駄目なやつだ。後で輝夜に教えといてやろう)いいんじゃないかないか?』

「そんなことより災難だな、あそこの向日葵を取ろうとしたら殺されるらしいぞ」

『なるほど、守護者がいるのかな? まあ、楽しくなりそうだ』

今回はここまで! 次回はフラワーマスター登場です。

お楽しみに!

我、対峙するはフラワーマスター

『太陽の畑…まあ、飛べば見つかるだろ。いろんな花がいっぱい咲いてる場所らしいし』

〜搜索中〜

『なあ…紫…バレない為のコツを教えただろ?』

俺は誰もいないはずの虚空に話しかけた。

「…」

そこから帰って来るものは何もなかったのだが、

『バレないようにするには気配を消せってな』

『消してるのに気づく師匠がおかしいのよ』

『ハハハ!まだ足りないな。もつと鍛えてやるよ』

『わかったわ』

『着いてきたいんなら着いてこい。巻き込まれても知らんがな』

『太陽の畑に行きたいんでしょ?師匠。案内するわ』

『そうか?なんでお前が太陽の畑の場所を知ってるんだ?』

『それは私の友達があそこにいるからよ?』

『へえー…え!?お前友達いたの!?!』

『失礼ね!たとえ師匠でも殴るわよ?!』

『おつと…それはいかん。それにしてもお前に友達だなんて本当に驚いたぜ』

『なんでそんなに驚くのよ…』

『だつてお前すつごい胡散臭いし、上から目線だし、愛想ないし』

『ひどい言いようね…』

『ごめんごめん。んじや案内頼むわ』

『そういえばあの子すつごい戦闘狂だから、気をつけてね。師匠に限って負けるなんてことはないけどね』

『忠告ありがと。氣イ引き締めて行くわ。』

『じゃあ行きましよう?』

『おう』

〜太陽の畑〜

「うーんよ」

『おお…』

太陽の畑の感想は美しいの一言で済んだ。色とりどりの花が咲き誇り、幻想的な景色に、声が出なくなつた。

「あら、紫じゃないの。どうしたの？」

「こんにちは幽香。今、ここに私の師匠を案内する為にきたのよ」

「紫の師匠？どんな人かしら」

『どうも。紫の師匠をやらせてもらつてる緋凶だ』

「緋凶!?紫は物凄い妖怪に弟子入りしていたのね…はじめまして、風見幽香です」

『いやーまさか紫の友人がこんな美女だったとは…おじさん驚いちやうねえ』

「び、美女だなんて…／＼／＼初めて言われたわ／＼／＼」

『?なんで顔赤くしたんだ?熱でもあるのか?』

「っ!顔が近いわよ…／＼／＼」

『そうか、すまん。若い娘の扱いは難しいな…』

「師匠エ…」

『この畑の管理の代表者は誰なんだ?』

「私よ」

『幽香が一人で管理してるのか。すごいな』

「そうでもないわよ」

『ここの向日葵を一本もらいたいのだが…』

「それはダメよ。私と戦つて勝てばあげるわよ」

『はあ…戦わなきゃダメなのか?』

「ええ。紫の師匠が、伝説の妖怪緋凶がどれだけ強いのか知りたいの」

『わかつたよ。決死の覚悟でかかつてきな』

「行くわよ!」

幽香はいきなり持っていた日傘で殴りかかつてきた。

『いきなりだな…仕方ない、喰種化』

俺は尾赫を一本出し、迎え撃ち、鏢?迫り合いになつた。

『うーん』

「くっ…ビクともしない…」

『力が足りないな』

「まだまだ！」

幽香は傘の先端で突きを何度も放った。

『物凄い威力の突きだな…』

それを俺は目だけで追い、紙一重で交わしていった。

「なんで1発も当たらないの…よ！」

先ほどの突きよりも更に威力の高い突きを放った。

『そりゃ当たりたくないからな。右手武装、無刀流、ヴォーパルスドライブ』

幽香の強烈な突きと俺の固めた拳がぶつかり合い、火花が辺りに散った。

「本当に強いわね…」

『これで満足したか？』

「まだよ！マスタースパーク！」

幽香は色鮮やかな極太レーザーを放った。

『おっとその技は…。ダークマター』

俺は漆黒の超極太レーザーを放ち、相殺させた。

「アハハハ！楽しいわ！もつとよ！」

『紫の情報は本当だったんだな』

『行くわよ！マスタードライブ！』

幽香は日傘を投擲してきた。

『槍を製生。刺し穿つ死棘の槍！』

幽香の投げた日傘と、俺が放った槍はぶつかったが、忽ち幽香の日傘は弾かれ、俺の投げた槍は幽香の心臓部目掛けて勢いを止めずに直進した。

「やばっすぐに逃げ…」

幽香は少し反応が遅れたが、少し動けた。だが、槍は軌道を変え、幽香の心臓部をとらえ続けた。

「幽香！危ない！」

『出す技間違えた!!間に合え!!グングニール!!』

俺は掌に光の槍を作り出し、投げ、俺が先ほど投げた槍の腹に当たり、破壊した。

『間に合って本当に良かったぜ…怪我はないか?』

「凄く怖かったわ…」

俺は幽香を抱きしめた。

『よしよし…ごめんな?怖かったよな…』

「(いいなあ…)」

『どうした紫?』

「な、なんでもないわ…」

『そうか?変な奴だな』

俺は幽香が落ち着くまでずっと頭を撫で続けた。

〜十分後〜

「た、大変お見苦しいところをお見せしてしまつて…」

『いいんじゃないか?別に。女の子はそういうところがあつた方がいいと思うぞ』

「そ、そうかしら?」

『ああ』

「じゃあたまに緋凶さんにあ、甘えてもいいかしら?」

『おう!いつでもいいぜ。むしろ毎日甘えてくれてもいいんだぞ?』

「そ、それは…ちよつと…恥ずかしい／＼／＼」

『そうか。あ、そうだ忘れてた。向日葵なんだが…こんなに仲良く咲いてるのに、持つてくなんて可哀想だからな』

「じゃあどうするの?」

『俺が、全力で複製すればいいんじゃないやね?つてなつた』

『どうやるの?』

『こうやるんだよ。』トレース・オン 投影

「すごいわね…一瞬で全く同じものができた…」

『これ持つてけば多分バレないだろ。ここの向日葵特有の秘められた力みたいなものもあるが、それは俺の力を流すからなんとかかなりそうだな』

「どこに持つてくつもりなの?」

『輝夜のところ』

「輝夜：あの有名な輝夜姫？」

『せやで』

「緋凶さんも求婚を？」

『違うよ。俺は、輝夜の求婚拒否を手伝ったんだよ。で、一応怪しまれない為に俺にも課題を出させたんだよ』

「それがここの花畑の向日葵ってことね」

『そうだ』

「別に緋凶さんにならあげてもいいんだけど…」

『幽香。さん付けはやめてくれ』

「どうして？」

『なんかむず痒い。』

「でも：緋凶じゃ呼びにくいからね…」

『じゃあノアって呼んでくれや』

「ノア？なんで？」

『俺の人間時の名前が御神楽ノアだからだよ』

「生物最強の!?!世界最強の妖怪は、生物内最強の人間だったのね…」

『やっぱ驚かれるのか』

「そりや驚くわよ。だって世界中で死んだとされてる人間なんですもの」

『その割には案外あっさり認めてくれたな』

「まあ、ノ、ノアならありえるかなって思ってたね」

『名前、そうやって少しずつ慣れてってくれ』

「わかったわ」

『じゃあな』

「次ここに来たら私の家に案内するわ。今度はお茶でもしましょう？」

『はいよ。お誘いとあらば行かないわけには行かないな。じゃあ明後日あたりにまた来るよ』

「お待ちしてるわ」

「幽香から直々のお誘いなんて、モテモテね」

『紫？師匠は馬鹿にするもんじゃないぞ？（威圧）』

「ご、ごめんなさい」

『謝れるのはいいことだ。このまましばらくついてくるか？』

「うん！」

『紫といると気がまぎれるな』

「それ褒めてる？」

『勿論だ。これからもよろしくな？紫』

「ええ！師匠！」

「久しぶりにこの国に帰って来たわね…待ってなさいノア。今度こそは勝つんだから」

今回はここまで！次回はとある常闇の存在が帰ってきます。

お楽しみに！

和人死す!?!ルーミアとの再会

俺と紫は竹林の中にいた。

『まだ課題提出には時間が結構あるからな…しばらくここで修行するか』

「わかったわ。まずは何をすればいいの?」

『またあれでいいかな』

「あれって?」

『実践もどき』

「わかったわ」

『いくぜ。オラア!』

「二重結界!」バリンバリン!

俺の拳は紫の結界を容易く破壊した。

『この間よりも少し硬くなってるな。次に教える技に移るか』

「お願いします」

『次の技は二重結界の上位互換だ。が、消費妖力が3倍ぐらいの技だ。』

まあ、お前の妖力はかなりの量あるから大丈夫だろ』

「へえー」

『手本を見せるぞ。まずは頭の中に二重結界の術式よりも複雑に構築する。そしてそれを空中に作り出す。多重結界!』

「凄い…」

『まあこれの応用みたいな技もあるが、それはまた今度だ。じゃあやってみろ』

「わかったわ。…多重結界!」

紫は俺の手本通りに術式を組み上げ、空中に作り出した。

「くっ…抑えきれない…」

だが俺の様には行かず、崩壊してしまった。

「はあ…はあ…」

『二重結界をもう少し極めてからにするか?』

「いえ…同時にやります!」

『頑張るのはいいことだが、やりすぎは良くない。お前にはまだ多

重結界は早すぎた』

「そんなこと……!」

『だから今は少し抑え気味に行こう。お前のためだ。お前の修行だが、俺は師匠だ。俺にはお前を労わる権利があり、義務がある。だから、な? 無理はあまりしないでくれ。お前が壊れるところを見たくない』

「わかりました……」

『多重結界が無理でも二重結界を複数個作れば、必然的に脳内に複数の術式が生まれる。できるか?』

「やってみるわ」

紫は集中して、自分の周りに二重結界を4個作り出すイメージを取った。

「二重結界!」

結果は成功だった。

『4個が作れたか。まあ恐らくその分硬度は低くなってるだろうな』
「試してみてください?」

『そうだな。いくぜ? オラァ!』バリーン! ピシッ!

『まじか……力入れて撃ってないにしてもかなりの威力のはずだが……多重結界の失敗からの問題点の改善が恐ろしく速い……』

「やった! ようやく師匠のパンチを止められたわ!」

『最初の時の疲労感もあんまりない様だな。これから結界の量を増やすか』

「ええ」

〜4日後〜

紫は驚異的な成長を見せ、二重結界を25個展開できるようになり、更に、多重結界も展開できるようになった。

二重結界の硬さは1枚目にして俺の拳を止められるほどにまで成長した。

『……』

俺は今、気配察知の強化に勤しんでいる。紫には気配を出させ、スキマ移動をしてもらっている。

『……後方右斜め、およそ120メートルにいるな』

「なんでこの距離で気づくのよ……」

『次は違う方法で……ッ!? 紫! スキマにすぐに入れ!』

「どうしたの!?!」

『襲撃だ。急げ! 早く!』

「わかったわ!」

紫はスキマに飛び込んだ。すると、巨大な影の手が襲ってきた。

『斬影一閃!』

俺はその手を斬り、防いだ。

『随分と荒っぽい再会の挨拶じゃねえかよ……ルーミア!』

「まさか1キロ離れてる状態で気づかれるとは思ってなかったわよ。

久しぶりねノア」

『で? 襲ってきた理由を聞かせてもらおうか。場合によっては……わかるよな?』

「あら怖い。私がいなくなってからどれだけ弱くなったのか知りたかっただけよ」

『ひどい理由だ。で? 感想は?』

「弱くなるどころか強くなってたわね」

『そうか』

「久しぶりにやりましょ?」

『いいぜ? 決死の覚悟でかかってきな!』

「いくわよ! ダークストライク」

ルーミアは闇を纏い、更に刀を作り出し、突進攻撃を放ってきた。

『ぐっ! ものすごい速度になったな』

「それでも貴方よりも遅いでしょ?」

『次は俺からだ。瞬撃”雷鳴拳”』

俺はルーミアの目の前に一瞬で移動し、雷を纏った正拳突きを放った。

「危なかったわ。前よりも速度と威力が上がってるようね」

『お前も反応速度が格段に上がってるな。それが俺から離れて修行した成果ってわけか』

「いえ？まだ序の口よ。貴方にはもつともつと味わってもらわよ」

『そうかならお前に残機をやるよ』

「残機？」

『死んでもまた復活できるやつだ』

「それは知ってるわよ。私が聞きたいのはなんでそんなものを私にくれるの？」

『お前の全力に答えるためだ』

「へえー私を殺せるのかしら？」

『面白いことを言ってくれるな。まあこの星が壊れない程度に殺してやるよ。せいぜい耐えてくれや』

「その余裕を絶対に壊す！ダークブラスト！」

『よつと』

「それはフェイクよ！影縫い。」

『俺自身の影を消滅』

「そうくると思ってたわよ！黒縄鎖縛！」

『くっ！』

俺はルーミアが巻きつけてきた漆黒の鎖を引きちぎろうとした。

『なに!? 掴めない!』

「影は掴めないわよ」

そういうと、ルーミアは空高く跳び上がった。そして…

「シャドウロングヌス！」

ルーミアは複数個の影の槍を作り出し、動けなくなってる俺の心臓部に投げた。

『クソがあー!』

ルーミアが投げた槍は全て、俺の心臓部に命中した。

『ガフツグフツ! ま…だ生きて…るぞ?』

「知ってるわよ。トドメよ。ナイトメアスパア」

ルーミアは先ほどよりも一回り大きな槍を俺の頭に投げ、命中した。

『…』ガクッ

「師匠！嘘よ！ねえ！嘘だって言ってるよ…」

「なに？ 貴女ノアの新しい弟子？」

「よ…も」

「え？」

「よくも師匠を！ 絶対に許さない！」

「貴女ごときに負けないわよ。ナイトメアバースト」

「くっ！ 二重結界!!」

「へえ…ノアの結界術…」

「くらえ！ 単霊子砲！」

「呑み込め。ブラックホール」

「くそっ！ ごめんなさい…師匠…」

「じゃあね。新弟子さん。ダークマター」

ルーミアが紫に向かつて漆黒のレーザーを放とうとした瞬間に、和人が死んだ場所から巨大な火柱が上がった。

『テメエ…俺の大事な弟子に手エ上げやがったな？』

「師匠！」

「まだ生きてたのね。頭を飛ばしたのに何故かしら」

『お前のせいで残機を無駄に1減らしちまったぜ』

「残機のお陰で生きていたのね」

『それよりもだ。俺の弟子に手を上げた罪は相当でかいぜ？』

「貴方が後どれくらい残機を残してるのかは知らないけれど…殺し続けてあげるわ！」

『やれるもんならな。1割解放…』

俺が1割力を解放すると、地面が激しい振動を起こし、空気が揺れ、雲が裂け、突風が発生した。

「これで1割なんだもの。本当に凄いわね」

『お前が降参するまで殺し続けてやるよ。』

「殺せればね！ ダークストライク！」

『クラレント・ブラッドアーサー
我が麗しき父への叛逆』

「きやあああ！」

『どうだ？ 降参するか？』

「ま、まだよ…」

『そうか。じゃあ仕方ない。エヌマエリシユ』

『きやあああ!!』

『どうだ?』

『こ、降参するわ…』

『そうか。早めに降参してくれて良かったぜ。惚れた女を殺すのは心が傷むからな』

『え?今なんて…』

『気にすんな。時が来たら伝えるさ。久しぶりだな、ルーミア』

『え、ええ久しぶり』

『本当に強くなつたな。俺を殺したのはお前が初めてだよ』

『師匠!良かった…本当に…』

『ごめんな。心配かけたな。俺は死なないから安心しな』

『さつきはごめんなさい?えつと…』

『八雲紫です』

『ごめんね?紫』

『え、ええ』

『これからお前どうするんだ?』

『どうしようかしら…』

『なら来い。また旅でもしようぜ』

『わかったわ』

『暇だから輝夜のところに遊びに行くか』

『輝夜が地上に来てるのね』

『そういえば理由を聞いてなかったな。まあ大方想像はついてるが』

今回はここまで!次回は月人の襲撃と永琳との再会です。

お楽しみに!

襲撃！月の民、古き友人との再会

ルーミアとの戦いのすぐ後、俺らは輝夜のところに遊びに来ていた。

『よお輝夜。課題のやつもう獲得したから遊びに来たぞー』

「あらノア。速いわね」

『1日で仕事を終わらせるのがノアこと緋凶だからな』

「それで世界中でも有名になったのね。月でも緋凶の名前は聞いたわ」

『いや一月にも名が轟いてるなんてな。参っちゃうぜ。あ、そうだ忘れてた。お前に紹介してなかったな。俺の弟子の紫だ。出て来い』
すると空間が裂け、紫が現れた。

「八雲紫です。以後、お見知り置きを」

『胡散臭いけどまあいい奴だ。』

「ちよつと師匠！」

『後、いい加減俺の影から出て来い。』

「わかったわ」

俺の影からルーミアがスーツと出てきた。

「久しぶりね。輝夜」

「ルーミアさん…久しぶりね」

『こいつさつき俺を殺したんだぜ？本当強くなってたよ』

「ノアを!?!じゃあなんでノアは生きてるのよ!」

『残機』

「あつなるほどね」

「ちなみに後どれぐらい残ってるの?」

『んー…大体4億かな』

「恐ろしいわね」

『やっぱり十くらいにしておこうかな。』

「どうして?」

『死なさ過ぎるのもつまないだろ。』

「死ぬことに面白みを感じてるのはおそらく貴方だけよ。」

「そうね」

『酷いなあ…まあ別にいいか。そういえば輝夜。お前はなんで地上に降りてきてるんだ？』

「それは…」

『まあ大体の予想はついてる。お前…蓬莱の薬を飲んだんだよな？』

「なんでそれを…！」

『なんで知っていたかかって？それはな、俺はこの展開を覚えていたからだよ。』

「この展開？何を言っているの？」

『分からないだろう。だがそれでいいんだよ。お前らには絶対に知り得ないことなんだからな』

「貴方が神である事と関係あるの？」

「え？」

『関係あると言えばあるがないと言えば無いことになる。実際俺にもよくわかってないんだよ。思い出せないほどに古い記憶なんだ。』

「10億年以上なの？」

『いや…天界の時間経過は世界の時間経過の約4億倍だった筈だから』

…今の俺の年齢は大体813億か。だから…相当昔の記憶だ。』

「…」

『いやー俺もびつくりだぜ。自分がここまで年取ってたなんてな！』

『そんなにも昔なら覚えてる方がおかしいわよね』

『少しは覚えてるんだけどな、流星に全部覚えてるなんて事は無い』

『逆に覚えてたら尊敬するわよ…』

「…」

『紫は未だに哑然として喋らないし』

『まあ紫はまだ幼いからな。しょうがないだろ』

「はっ！気を失ってた…」

『俺の年齢は813億だ』

「…」

『また気絶した。』

「紫で遊ぶんじや無いわよ」

『ごめんごめん。おい紫、起きろー』

「はっ！また気を失ってた…」

『一旦帰るか。また明日遊びに来るぜ』

「帰っちゃうの？」

『まだ紫の修行があるからな。じゃあな』

く竹林内く

『多重結界の応用技を教えよう。』

「この間言ってたあれですね」

『そうだ。手本を見せるぞ。術式は多重結界と同じだが、展開方法少し違う。」ローアイアス』

俺の手から紫色に光る花のようなものが出てきたと思ったら、その花の中心から円形の透明な盾が現れた。

『それじゃあやってみろ。』

「わかったわ。ローアイアス」

紫はアイアスを展開した。

『まさか1発で出来るとは…』

「やった！私こっちの展開方法の方がやりやすいわ！」

『得手不得手があるからな。流石だ。』

「ちよつとこの盾の耐久を知りたいわ」

『じゃあやるか。』普通の”パンチ』ガシャン！バキッ！バリッ！

「やっぱり止められないわね…」

『今回のは前のと違って力少し入れて打ってるからな。紫、ちよつと妖力全開放してみろ』

「わかりました。」

紫は自分の妖力を体の周りに留めた。

『やっぱり妖力量がかなり増えてる。今のお前は大妖怪最上位くらいだな。』

「やった！」

「私は？」

『お前は伝説の妖怪レベルだな。今のところは俺、ルーミア、茜の3人だ。』

「やっぱり茜は伝説の妖怪なのね」
『まああいつは俺を含めなければ最強に近いからな。お前もだけど。』
「私と茜は貴方にしか負けて無いものね」
『俺に有効打を与えたのもお前らだけだもんな』
「ルーミアさんってそんなに強かったのね」
『そうだぞ？こいつは昔から強かったんだ』
「昔から一度も負けてない貴方に言われたく無いわよ」
『そうだな』

〜2日後〜

今日は輝夜に出された難題を持ってくる日

『とりあえず俺の分身を1人妖怪化させて置いてくぞ。』分身』
「わかったわ」

「それでは大伴御行様から証拠品を見せてください。」
「これです。」

こいつは明らかに偽物の頭を持ってきた。

「偽物ですね」

「なぜわかる!」

「それはですね。緋凶、来なさい。」

『どうした姫』

「あれは貴方の首ですか?」

『違うな。偽物だ』

「違う!お前が偽物だ!」

『ほう:お前ごときが俺を否定するか:』

大伴御行は連れていた陰陽師をふっかけて来た。

「そいつを殺せ!」

「御意!」

『雑魚は引っ込んでろ。(威圧)』

「うるさい!」

『はあ:面倒だ。瞬撃”雷鳴拳”』

俺は陰陽師を吹っ飛ばした。

「くそっ！」

大伴御行は逃げ出した。

『じゃあ俺は寝てくるぜ姫』

「わかりました。次は石作皇子様ですね。」

「こちらです。」

本来、仏の御石の鉢は鉢の中に光が存在している。だが、石作皇子の持ってきた鉢の中には光がなかった。

「明らかに偽物ですね。次の方」

「これです」

燕の子安貝は俺がもう回収済みなのでこれは明らかな偽物だ。

「こちらも偽物ですね。次、藤原不比等様」

「これです。」

不比等が持ってきたものは、蓬萊の玉の枝そっくりなものだった。

「こ、これは…」

『(あつ、輝夜にあれが作られた物だと伝えるのを忘れてた)』

「不比等様！まだ蓬萊の玉の枝制作費を頂いておりません！」

「貴方方は？」

「我々は、不比等様に頼まれて蓬萊の玉の枝を造った者です」

「不比等様？これは一体…」

不比等は逃げていった。

「じゃあ最後にノア様」

『これだ。』

「本物ですね。唯一本物を持ってこられたノア様と結婚いたします。」

〜終了〜

「ノア、ありがとね」

『気にすんな。大事な友人の頼みだ。』

「じゃあそんな友人からお願いがあるんだけど…」

『どうした？月の民がお前を連れ帰りにくるのか？』

「なんでわかったの？」

『読心』

「隠し事ができないわね」

『俺が意識しないと読めないから安心しろ。』

「そう。絶対に実験道具にされるから帰りたく無いのよ。守ってちよ
うだい?」

『仰せのままに姫さま。助けて緋凶って叫んでくれたら光速でくる
よ。』

「お願いするわね。来るのは明後日の十五夜よ。」

『わかった』

〜2日後〜

月の民が輝夜を連れ帰りに来る日になった。

『紫はスキマに隠れて見てろ』

「どうして? 私も強くなったのに!」

『月の奴らの攻撃は妖怪特化なんだよ。お前の結界も恐らくだが、容
易く割られてしまうだろう。そんなお前が勝てるのか?』

「それは…」

『無理だろう?』

「はい…」

『ルーミア! 戦闘準備だ。お前まだ黒夜持つてるか?』

「持つてるわよ。」

『お前ならレーザー斬れるだろ。一応持つてこい』

「影の刀じゃダメなの?」

『影の刀は妖力で作ってるだろ? だったらレーザーで消されるぞ』

「対妖怪レーザーはそんなにも強いのね」

『ああ。もしかしたら俺の5割妖力弾も消せるかもな。』

「やばいわね」

『まあ俺は1発、レーザーは100本くらいで同等かな』

「ノアの5割でしょ? 相当ね」

〜輝夜視点〜

そろそろ月の奴らが攻めて来る。

「もうすぐね…ノアを信じてないわけじゃないけど…大丈夫かしら」
「きたぞー! な、なんだあれは!」

月の奴らはロケットで地上に来ていた。庭にいるのは帝から送られてきた兵士だが、確実に使い物にならない。

「蓬莱山輝夜！屋敷から出てこい！」

「うるさいわね、礼儀も知らないのかしら？」

「姫さま。月へ帰りましょう」

「永琳…いやよ、帰らないわ」

「そうですか」

すると永琳は突然隣にいた兵士を弓で射抜いた。

「永琳殿！なぜ裏切る！」

「わたしは姫さまにずっと仕えるわ」

「仕方ない。永琳殿ごと一度殺して連れていくぞ」

兵士たちは銃口を私たちに向けた。

「いや…いやよ…」

「姫さまだけでもお逃げを…」

「ダメよ！永琳も…」

私たちは逃げ出そうとした。しかし…

「くっ…足が…」

「永琳！」

「助けて…ノア君…」

「これでもう動けないだろ。だが、念のためだ。撃て！」

再び私たちに銃口が向けられた。そして、放たれてしまった。2人の視界は薄紫色の光で埋まった。が、

「助けなさい！緋凶！」

『いいぜ？姫』

突然、どこからか声が聞こえたかと思うと、

『ローアイアス』

私たちの目の前に1人の人間が現れた。そして、私たちに放たれたレーザーを防いだ。

↳輝夜視点out↳

『全然助けを求めないな…』

「助けなさい！緋凶」

今のタイミングかよ！

『いいぜ？姫』

呼ぶのがおそいんだよな…まあ間に合うわけだが。

『ローアイアス』

俺はレーザーを防ぐためにアイアスの盾を展開した。

ん？後ろに輝夜と一緒にいるのって…永琳じゃねえか！やばいな…仕方ない。仮面をつけておるか。

「何者だ！」

『お前らは…確か…六番隊か？』

「なぜ我らの隊を知っている！」

『小さいこと気にしてんじゃねえよ。お前らが今、気にするべきは、どうやって俺から流れるか、だろ？』

「何を妖怪風情が…」

『へえーそんなこと言っちゃうんだ。神力、妖力解放！』

「なんていう力だ…」

『自己紹介が遅れたな。俺は緋凶。炎雷帝だ。そんでお前らを滅ぼすものだ』

「緋凶だど!?なんでそんな化け物がここにいるんだ！」

『この姫様に頼まれてな。いつか月に襲撃に行くから楽しみにしとけよっ。』

「ふぎけるな！全員！レーザー砲、一斉射出！」

俺に対してレーザーが大量に射出された。

『面倒くさいな。仕方ない。出力検索…把握。同出力魔法、ツインマキシマイズマジック、チェインドラゴンライトニング！』

俺が放った雷魔法と、レーザーは相殺された。

「なに!？」

『弱え…弱すぎるぜ…こい！ルーミア！』

「なにかしら？」

『とりあえず3人殺せ。』

「わかったわ。」

するとルーミアは物凄い速度で相手陣に移動し、固まって居た3人

の首を刎ねた。

『いぞ』

「あなた…今ルーミアって言ったかしら？」

後ろに居た永琳が話しかけてきた。

『言ったが、どうした？』

「そのルーミアって…」

「私よ？永琳」

「ルーミア！よく生きてたわね…」

「そりゃ生きてるわよ。あの時はノアに守られたんだから」

「そういえばノアは？」

永琳にそう聞かれたルーミアは俺に確認を取ってきた。

『ルーミア、今は言うな。こいつらを片付けてからでいい。』

「わかったわ」

「なにを喋ってるんだ！」

『お前らをどうしてやろうかについてだ。結論はとっくに出てるんだ

がな。お前ら全員、皆殺し』

「ヒッ！ぜ、全員！撃て！」

レーザーが、再び放たれた。

『もういいやお前ら…喰種化…』

俺の腰から”12本”の尾赫が出てきた。

「あれは…」

永琳がなにか言ってるが、取り敢えず無視するか。

『死ぬ覚悟は出来たか？出来てなくても殺すがな。じゃあなお前ら。

鬼皇乱打』

レーザーを風圧で消し飛ばし、ロケットの所に一瞬で移動し、残骸が微塵も残らないほどに粉々にした。俺は徐ろに、指揮官のような奴がつけて居たヘッドセットを取り、月の都にメッセージを送った。

く月く

「依姫様！六番隊から連絡がありました！」

「見せて」

「どうぞ」

「えつと…女に手を上げていたので滅ぼささせていただきました。今度は俺がお前らの本陣に1人で攻めていくんで、出迎えよろしくな。緋凶より…」

「六番隊が全滅!?あれでも一応精鋭部隊ですよ!？」

「まだ続きがあるようですね…追伸、今度会ったらどこまで成長したのか見せてくれよう…まさか…ね?そんな…」

「どうしました?」

「いえ…なんでもないです。」

　　↓地上

『メッセも送ったし、これでいいか。取り敢えずあいつらを竹林に連れて行こう』

　　↓竹林

「ねえ緋凶さん?あなたは一体何者なの?」

『俺か?俺はただの妖怪さ』

「嘘ね。ただの妖怪が月の兵器に勝てるわけじゃないじゃない。曲がりなりに私設計したんですもの。妖怪に遅れはとらないわ」

『はあ…もういいか』

俺は仮面を取った。

『…久しぶり、永琳』

少し気まずかったのでぎこちなくなってしまうたが、笑顔を向けた。

「ノア君…ノア君!」ダキッ

『どうした?』

「私…あの時、最後まで残ろうとしたのに…無理やりロケットに乗せられて…」

『…』

「それで…月についてからあなたが死んだことを聞いて…悲しくて…」

『俺が死ぬわけないだろ?』

「でも!あなたが残っていた場所に、原子爆弾を落とすって言われて…それで…」

『だがこうしてまた再会できただろ？ 終わりよければなんとやらって奴だ』

『終わるまでの時間が長すぎるのよ……！』

『そうだな……ごめん？』

『なんで謝るのよ……』ポロツポロツ

『永琳！ 泣くんじやない。お前に涙は似合わない……だから泣くな』

『ツ……わかったわ……』

『んじや、これで暗い雰囲気の話は終わり！ 再会は楽しまなくちや』

『そうね！』

『ノアの言う通りだわ』

『なあ、俺って月ではどんな扱いになってるんだ？』

『ノア君は自らの命を犠牲に、10億もの穢れから都市の人間たちを救った伝説の英雄ってなってるわ』

『誰が作ったんだ？』

『魁斗君と凜ちゃんと豊姫と依姫が作ったわ』

『あいつら……今度会ったら覚えとけ……』

『どうしたの？』

『ん？ ああ気にすんな。それより伝説の英雄ねえ……なんか妙な肩書きもらっちゃまったな』

『もう今更じやない。今までどんな二つ名がついたのか覚えてる？』

『まあ覚えてるな。炎雷帝とか、神速だとか色々ついたな』

『貴方は神の状態でもついているのよ？』

『へえー俺は絶対神しか知らないな。どんなのだ？』

『破壊と創造の神だとか、絶影龍だとか』

『へえー絶影龍って神状態でついたのか。てっきり人間の時についてものだと……』

『ちよつと待って？ 2人の会話を聞いてる中で、よくわかんなかった言葉があっただけ……』

『ん？ なんだ？ 神のことか？』

『それよ！ なんでノア君が神みたいな話をしてたの？』

『事実、神だからな。半神半龍の絶対神。九条和人って聞いたことあ

るか?』

「ええ!?!」

「ノア君が神!?!」

「ノアが絶対神の九条和人!?!」

『なんだ? 言ってなかったか?』

「聞いてない!?!」

『ハツハツハ! すまなかったな! 忘れてた!』

「もう何この人!?!」

今回はここまで! 次回は少し時間が飛びます。
お楽しみに!

月面戦争編とその他 天魔登場！天狗の山！

月の民の襲撃から一週間が経った。

俺は今、幽香に甘えられている

「んふふくノア〜」スリスリ

(かわいいなこいつ)

『猫みたいだな』

そう言いながら、俺は幽香の頭を撫でた。

「んう…」

幽香は気持ち良さそうな声を出した。

「すう…すう…」

どうやら幽香は寝てしまったようだ。

『ほんと猫みたいだな…』

「師匠？（ニツコリ）」

『お？どうした？』

「なんで幽香は膝枕されてる状態で寝てるのかしら？」

『それは、幽香が俺に甘えてる最中に、いつの間にか寝てたからだ』

「もう我慢の限界！私も膝枕して欲しい！」

『我慢なんてせずに最初っから言ってくればよかったのに。明日に

でもしてやるよ』

「ホント!? やった!」

『そんな喜ぶ事かね？ よくわからん奴だ。それよりも他に用があるん

じやないのか?』

「あ、そうだった忘れてた。師匠は私が作ろうとしてる世界を知って

らでしょ?」

『人間と妖怪が共存できる世界だろ?』

「うん。それでね? その世界に住ませる住人を探して欲しいの。」

『住人ねえ…人間も妖怪もだろ?』

「うん」

『俺を守り神として崇めてる村とかでいいか?』

「もちろん!」

『なら今度交渉しに行くか。妖怪の方もあてはあるんだが、もう少しだけラインを作つとくか。俺ちよつと行くところができたから行つてくるぜ』

「どこに行くの?」

『人数が多くて、まとまった行動をとる妖怪のところだよ』
「?」

〜天狗の山〜

『多分そろそろ警備の奴が来るだろうな』

『そのもの!止まれ!』

『はいよ。なんだ?』

「ここは我々天狗の領地だ。これ以上先へ進むと言うのであれば排除する。」

『お前らごときがか?』

「なんだと?」

『だから、お前らごときの雑魚天狗が俺を排除できてるのか?』

「侮辱をすることは許さん!」

警備の白狼天狗は持っていた刀で斬りかかってきた。俺は構えずら取らずに上段の斬撃を右肩に喰らった。

『…』

「馬鹿め!反応できなかつたのか?ハハハハハ!…あれ?」

白狼天狗は断ち斬れたと思っていたようだが、俺にはかすり傷すらついていなかった。

『どうした?お前の刀は鈍なのか?まあいい。吹っ飛べ。弱・瞬撃』

俺は俺を斬つた白狼天狗の腹を殴り、後方へかなりの距離吹っ飛ばした。

「侵入者だ!全員でかかれ!」

集合した白狼天狗たちが襲いかかってきた。

『決死の覚悟でかかってきな!』

「ウオオオオオオオ!!」

『弱・瞬連撃』

俺は白狼天狗一人一人に弱めの瞬撃を放ち、吹っ飛ばした。

「何事です!?!」

「隊長! 侵入者です!」

『どうも。突然斬りかかられたので、反撃させていただきました。』

「この人が言うにはこちらが攻撃をしたようですが…」

「侵入者の言うことを信じるのですか!?!」

『逆に話も聞かずに攻撃するのをおかしいと思わないのか?』

「そ、それは…」

「では話を聞きましょう。私は犬走楓と申します。貴方は?」

『俺は緋凶だ。話せる奴で良かったぜ。』

「緋凶!?! あの伝説の妖怪の!?!」

『そうだが?』

「も、申し訳ございませんでした!!」

『いいんだよ。気にすんな。久し振りに大人数と戦えたしな』

「そ、そう言ってもらえると助かります…」

『俺がここに来た理由はな? ここに天狗がいるって聞いたからなんだよ。』

「なるほど…それでこの山に来て、私の部下に攻撃された、と」

『そうだ。まあ斬られたんだが…かすり傷すらもつかなかったんだけどな』

「すごいですね。緋凶さん。天魔様に会いますか?」

『合わせてもらおうかな。』

「では、案内いたします。」

〜天魔屋敷〜

「天魔様、お客様です」

「私に? 今日はそんな予定はなかったはずですが…名前を聞いてもよろしいですか?」

「緋凶様です。」

「緋凶様!?! なぜこのようなところに…入ってください」

「失礼します。」

『お邪魔するぜ』

「ほ、本物……」

『緋凶だ。初めまして』

「ふ、風雅伊織です。は、初めまして……」

『緊張すんなや』

「緋凶さん。それは無理だと思えますよ？」

『できるんじゃないやね？現に楓は緊張してないだろ？』

「そういえば……そうですね」

『だろ？まあいいか。なあ伊織』

「は、はひ！」

『ハハ！声裏返ってんぞ。これからもよろしくな』

「え？は、はい！」

～帰宅～

『ただいま～』

「おかえりなさい。師匠」

「おかえりなさい」

「おかえり」

『はい。ただいま。天狗と和平して来たぜ』

「すごいわね……天狗は手を焼いたのよ」

『そうなのか。結構楽にことが運んだがな』

「師匠は強いからよ」

『お前も強くなつたけどな』

「そう？ありがとうございます」

～2日後～

『んー神社欲しいなー』

「神社？いきなりどうしたの？師匠」

『いやーそういや俺神社無いなって思ってたな』

「別にいいんじゃないの？」

『急に欲しくなっちゃったから……まあ後で探しに行くさ。』

今回はここまで！次回こそは紫が月に攻め入ると思います。
お楽しみに！

和人激怒の予感?! 月面戦争勃発!

『神社欲しいなー』

「んーしようがないわね師匠は：一ヶ所だけ心当たりがあるわ
『本当か!?!』

「ここで嘘をついてもしようがないでしょ?」

『おお：そうだな。気が動転してたぜ』

「珍しいわね、師匠が慌てふためくなんて」

『神にとっては神社は必要なんだよ。それに長年欲しいって思ってた
からな』

「へえー」

『興味無さそうだな』

「だって私神様じゃないからね」

『一応でも最高神の弟子だけ? ちょっとくらいは興味持ってくれても
いいだろ』

「うーん：私は妖怪の緋凶の弟子だからね…」

『一応同一人物なんだけどな：まあいいや。案内頼めるか?』

「いいわよ。行きましよう?」博麗神社へ」

く博麗神社く

『ほう：ここが…』

紫に連れられてついた場所は、春である今が旬の桜が満開に咲いて
いた。

『取り敢えずこここの住人に挨拶せんとな』

「そうね」

俺たちは、境内に近づいていった。すると…

「だ、誰っ!?!」

襖が開き、中から少女が現れた。

『君がこここの巫女か?』

「そうだけど：一体何者? 貴方から変な気配を感じるんだけど…」

『紹介が遅れたな。俺は九条和人。単なる龍神で創世神だ』

「く、九条和人様!?! 嘘でしょ!?!」

『なあ紫、神格化した方がいいのか?』

「した方が信じるんじゃない?」

『おっけー”神格化”』

俺は姿を変え、神の状態の服装に変わった。

「ほ、本物…」

『よかった信じてくれた。』

「本日は一体どの様な御用で?」

『俺がここにきたのはな…この博麗神社で俺を祀ってくれないか?』

「へ?」

『いやー俺神社持ってないんだよね、一応俺創世神だからね、神社は持っておいた方がいいかもなって思っ』

「なぜここなのですか? 貴方様ほどのお方ならば出雲の神社の方が良いのではないのでしょうか…」

『あんな年中うるさくて碌な神がいないところなんて嫌だし、俺この落ち着いた雰囲気とか風景とか色々好きだからかな』

「あ、ありがとうございます」

『うーん…お堅い感じはやめてくれ。むず痒くて仕方ない』

「そう?なら自然体で話すわね」

『いいねー切り替えの早い奴は好きだ』

「ありがとう」

『ところで…紫、さっさと出てきたらどうだ?』

「わかったわ」

『そういえば君の名前を聞いてなかったな』

「私は博麗靈華。この神社の巫女よ」

『よろしく靈華。ところで…神社の件だけ…』

「ええ勿論いいわよ」

『ありがたいな』

「良かったわね」

『取り敢えず、すぐここにこれるように、賽銭箱に細工しとくぜ?』

「好きなように改造していいわ」

『そうか?ならこれからもよろしくって意味も込めてちよつとおじさ』

んが小遣いをやろう』

俺は懐から、手頃な札束を取り出した。

「えっ！こんなにもらっちゃっていいの!？」

『いいんだよ。その束で大体5億6000万円くらいだな。二ヶ月に一回小遣いを上げにくるよ』

「せめて半年でお願い…」

『そうか？ならそうするよ』

「それじゃあ帰りましょうか」

『そうだな。じゃあな、また来るぜ霊華』

「ええ。いつでも来ていいわよ」

『ああ。そんじゃ』

～三日後～

俺は今、紫から相談を受けている。どうやら式にしたい奴が見つかったようだ。

『玉藻前か…どうやら面倒な奴を狙ってるんだな…』

「彼女は上級下位妖怪の実力を持っているからね私の手伝いに丁度いいのよ」

『玉藻は今京にいるからな、ちよっくら行って様子見て来るわ。お前はゆっくり来るんだぞ』

「わかったわ」

『じゃ』

～京都～

『どうやら玉藻は帝に嫁入りしてるようだな…取り敢えず近衛隊に入っところ』

～屋敷前～

「何者だ！」

『新しく近衛に就いた者です。』

「そうか。よし、取り敢えず挨拶してこい」

『わかりました』

なんかすごく簡単に侵入できたな…

『失礼します。新しく近衛になった和人と申します。』

「そうか。ならば少し話し相手になってくれないだろうか？」

『勿論です。貴女のような素敵な女性とお話が出来るだなんて光栄です』

「フツツ、貴方は知っていないながらも口説くのか？」

『ハハハ、貴女のような女性に相手が居ないなんてことはないでしょうが、空いていたのなら是非とも一緒に緒したいですね。帝とは実際には噂になっているような関係ではないようですね』

「…どこまで知っている？」

『貴女の生まれが海の向こうだということ、貴女から少し獣の匂いがしていることかですかね』

「知っているのに捕まえないのか？」

『捕まえるための實力はありますが…俺に利益がない』

「私を差し出せば莫大な富と名声と高い地位が手に入るぞ？」

『もう全て手に入れてしまったんですよ…』

「え？」

『いいえ、ただの戯言です。俺はそれらには興味がないんでね』

「そうか？…つくづく不思議な男だな」

『私からすれば貴女の方が不思議ですよ。何故今そうしてまで人間に化けているのかは到底理解できない』

「やはり正体がバレているんだな」

『そりや勿論。玉藻前という名前は弟子より聞き及んでおります故』

「貴方にはバレているんなら…私の身辺警護をお願いできないか？」

『喜んで。報酬は要りませんので』

「そうか。まあ私は今から水浴びでもしてこよう。見張りは頼んだぞ」

なんでこんなに信頼されてんですかね

『お任せください』

〜二日後〜

俺が玉藻前の身辺警護を始めてから3日が経った。そして何故か今、玉藻前は追い詰められている。

「妖怪、玉藻前！貴様を帝暗殺の罪で拘束する！」

『そうは問屋が卸さないってね。連れて行きたきや俺を倒せや』

「お前1人ですか？こっちは500人だぞ？勝てると思ってるのか？」

『逆に500人程度で俺を倒せるとでも思ってるのか？一人一人が大妖怪最上位でも無いってのによ』

「調子に乗るなあ！」

前衛の何人かが切りかかって来た。

『お嬢、後ろに隠れてろ』

「あ、ああ」

『お前らぐ〜ときに技を使うのはもったいないからな、サクツと終わらせてやるよ！』

「ウオオオオオオオ!!」

雪崩れ込むようにして人が襲いかかって来た。

『オラオラオラア!!』

俺は、神鳳を何回転もしながら振り回し、敵を確実に仕留めていった。

『口ほどにもないな…すぐに終わっちまったぜ…』

「貴方はそんなに強かったのか」

『まあこれでも一応世界最強って言われてましたんでね』

「フツツ、それは冗談かな？」

『信じるも信じないも玉藻次第だ』

「……本当にあの人なのか？」

『ちゃんとした名乗りが遅れたな。俺の名は緋凶。世間一般で言われる殺し屋だ』

「……」

『騙っていて悪かったな。まあそれよりも、だ。先程からその空間から謎の気配を感じるんだが…わかるか？』

「え？…わかんないね」

『じゃあ答え合わせだ。紫、さつさと出てこい』

「なんで相変わらず気づくよ…」

『索敵スキルがカンストだからでしょうかね?』

「かんすと? っつてのはよくわからないけど、相当強化してるのね」

『勿論です。プロですから』

「プロって…なんのよ」

『お前も知ってるあの事実、プロの賞金稼ぎですよ』

「それなら納得ね」

「急に空間が裂けたと思ったら…知らない人が出て来たな…貴方の知り合いか?」

『俺の弟子だ。ほら紫、自己紹介だ。』

「八雲紫よ。よろしく」

『胡散臭いが、信用はできるし、信頼してるから大丈夫だ』

「胡散臭いだなんてひどいわね!」

『しようがないだろ? お前からは胡散臭さが滲み出てるんだから。それよりいいのか? 本題の方は。』

「そうだったわ。ねえ玉藻前、貴女…私の式にならない?」

「えっ…えっ?」

『こいつの目指している場所に辿り着くにはお前の力が必要だっつてことだ』

「なるほど…わかった。式になろう。これからよろしくお願いします。紫様」

紫は即座に式の契約を完了した。

『お前の初の式だな。おめでとう』

「ありがとう。師匠は式作らないの?」

『俺か? 式みたいなやつならもういるから大丈夫かなって』

「えっ…いたの!」

『いたぞ? お前のよく知る人物だ』

「私の知ってる人で…式…わからないわね」

『ルーミアだぞ。』

「へえーその割には口調とか…その辺どうなの?」

『あいつとは対等でいたいからな、あれくらいがちょうどいい。』
「なるほどね」

『じゃ帰ろうぜ』

　　二ヶ月後

「ねえ師匠」

『どうした？急に』

「月ってどんなところなの？」

『そうだな…色んな兵器やら道具やらがかなりあるところだな…そんなの聞いてどうしたいんだ？』

「決めた！月の技術を奪いに行くわ！」

『……………は？』

完全勃発！月面蹂躪！

「決めた！月の技術を奪いに行くわ！」

『……………は？』

「妖怪たちの力を集めて攻め入るわ」

『……………本気か？』

「勿論よ」

『俺は絶対に許さんからな？』

「なんでよ！」

『なんでだど？ふざけてんのか！言ったはずだ！月の兵器は妖怪特攻なんだよ！お前は月に戦争を吹っかけるつもりなんだろ？だがお前はたかが妖怪だ。』

「…」

『言わせてもらうが、お前は雑魚だ。月にはお前よりも強い奴がいる。力を解放してない俺にも勝てない奴が、月の大軍に勝てるのか？どんな奇跡が起ころうとも無理だろう。それでも行くこう言うのなら…』

「もういいわ！」

紫はどこかへ行ってしまった…

～紫視点～

なんなのよ！師匠は！初めから無理って決めつけて！師匠の力なんか借りずにやって見せるんだから！

「さあ…始めましょう？藍」

「はい紫様」

「皆さん、よく集まってくれました。さあ…攻め入りましょう！藍！転移結界を張って！」

「わかりました」

藍は素早く展開してくれた。

「行きましょう！我々に勝利を！」

「「ウオオオオオオオ！」」

～月～

「行くわよ！全軍！突撃！」

「二ウオオオオオオオ!!!」

〜依姫視点〜

「どうやら地上の妖怪たちが動き始めたようですね…」

「依姫様！敵襲です！」

「わかっていきますよ。六番隊はまだ復活してないですし、四番隊を向かわせてください。魁斗と凜も連れて行っていいですよ。」

「わかりました。」

「…嫌な予感がします。やはり私も行きましょう」

「！依姫様がですか！これで百人力です！」

「油断せずに行きましょう」

「わかりました！第四番隊に伝達します。出撃です。準備してください
い」

「では、行きましょうか」

〜紫視点〜

「きたわよ！…馬鹿にしてるのかしら…たかが一個隊で…油断は禁物
だったわね」

「四番隊！構えろ！」

「月の民へ絶望を！突撃！」

「二ウオオオオオオオ!!!」

〜依姫視点〜

「思っていたよりも多いですねまあ魁斗も凜も居ますし大丈夫で
しょう。」

「お願いしますね、魁斗、凜」

「任せてくれよ依姫様」

「任せて！頑張るから！」

「頼もしいですね。」

「まあ私達が居なくても依姫様がいれば大丈夫だと思うけどね」

「そうだな」

「そんなことは…来ましたよ」

「二そのようだな（ね）」

「魁斗、お願いします」

「ああ…四番隊！構えろ！」

「月の民へ絶望を！突撃！」

〜この戦闘シーンはカット〜

「案外手強かったな」

「そうだねー…じゃあそろそろ終わりにしようか」

「くっ…こんなところで…死にたく…ない…」

「じゃあね」

凜が、持っていた薙刀で妖怪の首を飛ばそうとした瞬間に月面に何が降って来た。

『あれ？ちゃんと出迎えてくれたんだな…ってそういうわけじゃないみたいだな』

〜和人視点〜

『あいつ…本当に行きやがった…まあ死にそうになってたら助けに行くか…その前に準備しないとな…』

俺は、新たな刀を作る準備をし始めた。

『材料は…何にしようかな、とりあえず緋緋色金は必要だな…』
想像

俺は、能力で緋緋色金を作り出した。

『うーむ…他には…32倍圧縮赤焰鋼と…8倍圧縮波衝鋼、64倍圧縮緋雷石、2倍圧縮吸血石かな…今回は赤い刀身の刀がいいからな』

とりあえず、俺はそれらを生み出し、一瞬で加工した。

『材料考えんの疲れるわーまあできたからいいや。んお？紫たちやられてんじゃん。そろそろいかねえとな…つとその前に、この刀に名前を付けんとな…こいつは”終焉：禍津神威”だ。よろしくな』

俺は新たに作った刀に名前を付け、月に向かって”跳んだ”

〜月〜

なんか人が集まってんな…あそこに降りるかな

『あれ？ちゃんと出迎えてくれたんだな…ってそういうわけじゃないみたいだな』

〜依姫視点〜

「出迎え…まさか…緋凶か！」

『ご名答！覚えててくれたんだな』

「全員！戦闘態勢！誰か他の隊を呼べ！それまでの時間は稼ぐぞ！」
「ん？総出で出迎えてくれるの？じゃあ待ってようかな。』

なんか穏やかな人ですね…

「貴方が六番隊を滅ぼした緋凶ですか。想像していた性格と全然違くて驚きました」

『そう？ってあれ？紫、大丈夫か？』

「し…師匠…」

「この妖怪を知っているんですか？」

「知ってるも何も俺の弟子だよ。どうやら随分と可愛がってくれたようだな…ちようど他の部隊がすぐ近くまで来てるようだし…紫の敵討ちってやつを始めようか！」

「魁斗、凜、一度下がってください。他のものは全力で攻撃しなさい！」

「くらええええ！」

く和人視点く

雑魚兵がレーザーガンを打って来た。

『零閃』

レーザーを切り裂き、銃と腕を切り刻んだ。

「その技は！」

「まあそれは後だ。他の全ての隊が到着したようだから…かかって来いやー！」

「「ウオオオオオオオ!!」」

『纏めて消すぜ！大いなる天から、大いなる地に向けて、Андタルタギガルシユー！』

俺は天から超極太レーザーを放つことによって、敵の6割を消滅させた。

『弱え…弱すぎるぜー！』

「ば、化け物め！」

『褒め言葉として受け取ろう。さあさあ！俺を楽しませて見せろ！』

「全軍！突撃！」

『イア・シュプニグラス！』

俺は敵陣に、黒い死の風を送り込み、敵を数名残して殺した。

『残りはお前らだけだぜ？』

「やばいね、魁斗…どうする？」

『ん？魁斗？』

「やるしかないだろ、凜、左右でいくぞ」

『凜？』

「2人とも、焦らないで。残り4人とはいえ、まだ私も依姫もいるんだから」

「豊姫様…」

『依姫？豊姫？あーなるほどお前らか。時間が開きすぎててわかんなかったわ』

「貴方…私たちを知ってるの？」

『知ってるも何も…って2人とも俺を忘れたのか？』

「忘れたも何も妖怪の知り合いなんて1人しかいないわ」

「貴方のように恐ろしく強い人間なら知っています、二億年前に死んでいます」

『テメエら…師匠の顔を忘れたのか?!』

「師匠?…まさか…いや、そんなはずは…」

「姉さん…まさか、今私たちの前にいるのって…」

「二師匠?!」

『思い出しやがったか？後、その2人！お前らは忘れてないよな?』

「知らん」

「知らなーい」

『は?何お前らそんな薄情な奴らだったっけ?友人のことを忘れるひどい奴らだったっけ?』

「もしかして…ミカ!？」

「ノア君なの!？」

『お前らもかよ…』

「二「なんで生きてんの?!」」

『なんで殺してんだよ!!』

「だってあの時ノア君は地上にいて、原子爆弾直撃したでしょ!」

『俺がそんなんで死ぬとでも思ってたのか!? もういいや…さっさとこの戦争…いやこの蹂躪を終わらせようぜ? 頑張って緋凶の侵略を止めた英雄になつてくれよう?』

「無理そうだな…」

『あ? どうした? 魁斗。その襟章を見るところ、お前は軍曹になったようだな』

「ああ」

「魁斗はねーみんなから筋骨隆々の鬼軍曹って言われてるんだよ? 面白いよね」

「テメエ凜、バカにすんな!」

『はっはっは! ぴったりじやねえか!』

「ミカは確実に面白がるから言つて欲しくなかったんだけど…」

『依姫と豊姫は…2人とも元帥になったんだな』

「はい! 師匠のおかげです!」

『俺は特に何もしてないよ。お前の努力あつてこそその結果だ』

「そういえば凜も清姫つて呼ばれてたよな」

「やめてよーそれ案外恥ずかしいんだから…」

『似合つてるじゃないか、その二つ名。凜にぴったりだ』

「そ、そう? ありがとう」

『まあ無駄話はそのままでしておいて、決死の覚悟でかかってきな!』

凜は薙刀を構え、魁斗はグローブを付け直し、依姫は剣を隙の少ない構えを取り、豊姫は空中に浮き、弾幕を張る構えをとった。

「いくぞー!」

魁斗のその一言で、凜と魁斗が接近してきた。

「やあああ!!」

凜は下から、強烈な突きを放ってきた。

『武技! 要塞!』

俺はその突きを謎の結界で防いだ。

「隙あり! 轟・正拳突き!」

『おつと危ない』

魁斗は、人間にしては物凄い威力の正拳突きを放ったが、俺はそれを上に飛ぶことによって、回避した。

「くそっ避けられたか…」

『そこそこの威力になったじゃないか。紫の二重結界もこれじゃ壊れるな』

「喋ってる暇あるの？隙を見せたら刺すよ」

『あら怖い、だがな？実力差がありすぎてその脅しは意味ないんだよな』

「なら刺すね！」

凜の連続の突きを全て紙一重で避け、反撃の機会を伺った。

『そう長くは持たないだろう？今すぐ戦線から離脱させてあげるよ。』

”発勁52型”

俺は、一瞬だけ止まった凜の腹部に手を当てて、発勁を打ち込んだ。

「ガッ、ゲボオ」

凜は吐瀉物を撒き散らしながら、200メートルほど吹っ飛んだ。

『やべ、久しぶりすぎて加減ミスった』

「よくもー！」

魁斗は激情に駆られ、右の大振りをしてきた。

『この状況で大振りは良くない選択だな。』

俺は単なる直線蹴りを魁斗の胸部に当て、3メートルほど吹っ飛ばした。

『これは全然有効打じゃないようだな。』

吹き飛ばされた時に起こった砂埃から、魁斗が出てきたが、この体の周りには、赤い光が存在していた。

「これは身体完全強化って技だ。ようやく完成した技さ」

『違うな。その本当の名前はマントラエンチャントだ。』

「マントラエンチャント？なんだ？今思いついたのか？」

『違うよ。それは俺がかなり前に完成させた技だ。まさかお前がそれを使える所まで強くなっていたとはな…予想外だったよ』

「…それは本当なのか？」

『ここで嘘ついてもメリットがない。めんどくさい。ダルい。まあいいや。少しくらいは頑張っちゃおうかな』

「え?」

『残り2人まで減らしておくか。凜と仲良く寝てな。瞬撃』

俺は光速で魁斗の目の前に行き、その強化された身体に正拳突きを放った。

「ぐああああ!!」

『ジャストで凜のところじゃねえか。やったぜ。…さあ、成長した力を師匠に見せてくれないか?』

「もちろんです!行きますよ!姉さん!」

「行くわよ!依姫!」

『新しい刀の実験台になって貰おう!我に終焉をもたらさんとする深紅の剣よ、代償として我の妖力を喰らうが良い!唸れ!禍津神威!』

俺は腰に挿しておいた刀を引き抜き、刀身を露わにした。

「な、なんなのよ…あの刀は…」

「物凄い穢れと神力を感じます…」

『お前らには流石にわかるか。さあ、かかってきな!』

月の最強タッグ V S. 最凶

『さあ、始めようか！お前らがどれだけ成長したのか見せてくれ』

「はい！姉さん、後方からの攻撃お願いします！」

「わかったわ！行くわよ！」

『決死の覚悟でかかってきな！』

「行きます！やあああ！」

依姫は低い体勢で刀を中段に構え、突っ込んできた。

「愛宕様！」

突然、依姫が持っていた刀が火を纏った。

『うお！びっくりしたわ。急に火が出てきたな…どうやら戦法は変わってるようだ』

「分析してる暇、ありますか？」

『あるんだなあ、それが』

「舐めないでください！」

依姫は、火を纏った刀で、中段から横薙ぎした。

『ヒョイっと』

その斬撃を上になく軽く飛ぶことによつて避けた。

「まだです！愛宕様の炎！」

振り抜いた刀から、突如炎が飛んできた。

『避けらんねえな…：しようがない、テレポーテーション』

俺は依姫の背後に転移した。

「そこっ！」

依姫は振り返りざまに上段で切りかかってきた。

『甘いわ！』

俺もそれに合わせて、下段から振り上げ、依姫と鏝迫り合いになった。

『なかなかやるようになったじゃないか』

「師匠は少し弱くなりましたか？」

『ほほう…言ってくれるじゃあないかよ。お前にそんなことを言われるとは思わなんだ』

「私も師匠に言える日が来るとは思ってたんですけど」

『ほんと、来て良かったぜ…まあ戦うのはオマケのつもりだったか
ゼリヤア!』

俺は、話してる途中に飛んで来た靈力弾を斬り、消した。

『野暮なことしてくれるじゃあないかよ、豊姫』

「あら、ごめんなさい?でもまさかあそこまで回転させた弾を切られるとは思ってなかったわよ」

『師匠を舐めてんなー。零閃!』

「岩砲弾!」

俺が放った零閃と豊姫が放った岩砲弾はぶつかって相殺された。

『なるほどな。バカにできるほどの実力はつけて来たってわけか』

「当たり前でしょ?師匠に勝つためにつけたんだもの」

『ならお前は自分で目指しているほどの実力はつけらんねえな』

「どうということ?」

『お前は俺に勝つためって言ったけどよ?そう決めちゃうとそれ以上強くはなれないんだよ。つまり、だ。お前は俺には勝てねえよ!零閃編隊!60機!』

「ろ、60!?無理っ!一時撤退」

そういうと、豊姫はどこかへ転移した。

「隙あり!」

『それはどうかかな?』

「建御雷神様!」

『緋雷石よ!』

依姫が放った雷と俺が放った赤い雷は、ぶつかり合い、相殺されたかのように見えたが、俺の雷が、勝った。

「ッ!危ない!」

『紙一重で避けやがったか…以前とは比べ物にならないくらいに強くなったんだな…次の一撃に持てる力の全てを使ってかかって来な』

「いいですけど…どうしてですか?」

『手っ取り早くお前の全力を知りたいんだよ』

「わかりました…」
創造ガルフアリオと破壊の神!!」

『ガル・ファリオンだと?』

「わかりますか?あの絶対神の九条和人の別名です」

『そんな名前がついてたのか…まあいいや、かかって来な!』

「行きますよ!零閃!」

『結界刃』

「これなら!紫電!」

『へえ…俺を宿したら紫電も使えるようになるのか…いいな!楽しくなりそうだ!』

「行きますよ!」

『喰種化ア…』

「閃光12連斬!」

『紅蓮…8連撃!』

俺らは連撃をぶつけ合い、相殺させた。

「流石ですね…」

『アツハハハハハハハハ!いいねー!楽しいな!最高だよ!つと豊姫来たか』

「なに?来ちやダメだった?」

『いやーお前は楽しませてくれなさそうだからな』

「なら無理矢理にでも楽しませてあげるわよ!」

豊姫は大量の霊力弾を放った。

『…ライトニングバースト』

大量の霊力弾を高圧電流の超放出によって全て消した。

『弱くなったな。烈風』

「ツ!速っ!超大玉霊力弾!」

俺が放った速度重視の斬撃を、ガスタンクより二回り大きい霊力弾で相殺させた。

『烈風ごときにその大きさか…』

「豪火球!」

『グラスプハート』

俺が拳を握った瞬間、豪火球は消え去った。

『強制転移』

俺は豊姫を強制的にどこかへ飛ばした。

「姉さん！」

『なに、安心しろや。基地の地下最下層に飛ばしただけだから』

「そ、そうですか…」

『さあ、決着だ。全力で来な』

「わかりました。神解！ぐっア”ア”ア”ア”ア”ア”ア”！」

依姫は神解によって急激に増えた力によって、体に相当な負荷がかかった。

「ぐっ…鬼神連斬！」

『武装！鬼皇乱打！』

俺らの連撃の力は拮抗していたが、次第に依姫の刀にヒビが入って行き、そして、割れた。

「刀が！」

『終わりだな』

「楽しかったですよ…」

『俺もだ。それより刀、悪かったな』

「仕方ないことなんですよ。二億年も使ってた刀なんです。こわれないほうがおかしいですよ。」

『仕方ないな…俺の持つてる三本の柱中から一つ選べ』

「え？いやでもそれは師匠の大事な刀じゃ…」

『お前は俺を宿してる状態だが、俺の技をいくつも使えたんだ。お前は免許皆伝だよ。その証だ』

「師匠…」

『さあ…選びな』

「…じゃあこれにします。」

依姫が選んだのは神鳳だった。

『この刀は逆刃刀だぞ？それでもいいのか？』

「師匠が一番長く使ってたものですから、それがいいです。」

『嬉しいねえ。こいつもお前が使うなら本望だろう。大事に使ってくれよっ…』

「はい！大切にします！」

『じゃあな。なんかあれば呼べよ？できる限り力になるから』

「はい！」

従順だな…

「そういえば月夜見様にはお会いにならないんですか？」

『いや、今回俺は侵入者だからな、正当な手続きをして来る時に会うよ』

「そうですか…わかりました！」

『またな』

く地上く

「し…師匠」

『……紫…』

「ご、ごめんなs『謝るな』で、でも…」

『お前が無事ならいいんだよ』

「師匠！」ダキッ

『無茶なことしやがって…死んだら元も子もないだろ？』

「ごめんなさい…」

『本当に…生きててくれてよかった…』

幽々子、妖忌との出会い、そして平和

「紹介したい人がいるの」

『ん？どうしてだ？』

「ちよつと訳ありでね…いい？」

『おう、構わんぞ』

「じゃあ行くわよ」

『んえ？』

いきなり足元にスキマが作られた。

『やっぱこうなるのか…』

～白玉楼～

『この連れてき方どうにかなんないのか？』

「師匠なら怪我しないからいいでしょ？それにこの方法が一番速いんだから」

『1秒もかかっているのか？』

「へ？まあいいわ」

『なあ…この階段登んのか？』

「あ…じゃあね！」

紫はスキマに飛び込んだ。

『あつ！…あいつ…しゃあないな。律儀に一段ずつ登ってくか』

～二時間後～

『はあ…面倒だなあ…精神的に疲れてきたぜ…そろそろ着くかな…』

ほんつとに長い階段だな…

『やんなつちやうぜ…さて、と。紹介したい奴って一体誰なんだろ』

「誰だ？」

『ん？俺は紫の「侵入者か？排除する！」話聞こうぜ爺さん…』

「せい！」

『よつと。いい太刀筋だ』

「ほう…どうやら相当な腕前のようにやな…1人の剣士として手合わせ願いたい」

『いいぜ？お前も少しはやるようだしな。名を何と言う？俺は緋凶』

だ。』

「妖忌じゃ」

『妖忌、俺からいくぜ?』

「ああ」

『天元流抜刀術奥義…光の太刀』

俺は抜刀術の構えを取り、常人の目では目では捉えられない速度で居合斬りを放った。

「無限流!」

妖忌は光の太刀に下段から刀を当てた。

『ほう…なかなかやるじゃねえか』

「緋凶殿もやりますな」

『零閃!』

「斬撃を飛ばしたじゃと!? くっ…ゼヤアア!」

『力づくで…面白い!』

「続けますぞ!」

『もちろんだ!』

「無限流! 現世斬!」

『雷光一閃!』

「瞑想斬!」

『こいや!』

妖忌は中段から横薙ぎで刀を振るってきたので、それに合わせて刀を振り下ろし、妖忌の刀を落とそうとした。

「やらせはせんぞ!」

『チツ、取れなかったか』

「そろそろ本気でやらせてもらいましょう」

『ほう本気とな』

「行きますぞ」

妖忌は腰にさしていたもう一本の刀を抜いた。

『来な』

「ゼイ! ハア!」

妖忌は次々と斬撃を放ってきたので、俺はしばらくそれを捌いてい

た。

『そろそろ反撃といこうじゃないか。火焰5連斬』

俺は刀に炎を纏わせて、斬撃を五つ放った。

「くっ…なんのこれしきい！」

？「妖忌…何をしてるの？」

「幽々子様！」

『へえ…俺の知ってる幽々子とは違うな…』

今俺の前にいる幽々子は、ピンク色の髪ではなく黒髪の少女だった。

「私を知ってるの？」

『いや？初対面だな』

「そう？」

『ああ。それより幽々子の剣士は随分と鍛えられてるな』

「いえ、儂は庭師兼幽々子様様の剣術指南役じゃ。それに儂はまだまだじゃよ、緋凶殿」

『いやいや、妖忌殿は十二分に強いぞ？須佐男並みだな。』

「須佐之男命と戦ったことがお有りぞ？」

『あるぞ？まあその時は魔法で戦っただけだな』

「すごいすな…」

『あ、そういえば紫いるか？』

「あら、紫を知ってるの？」

『ああ。どこに…なるほどな。空間干渉…シャイニングジャベリン』

「やばっ、二重結界！」

『なんで隠れてたんだ？』

「い、いやく下で先に行っちゃったから…ね？」

『なんだそのことなら別に気にしてないから構わんぞ？』

「ほ、本当…？」ナミダメ

(こいつかわいいな…)

『本当だよ』

「2人はどんな関係なのかしら？もしかして…」

『幽々子がどんな勘違いをしてるのか知らんが、俺とこいつは師弟つ

『ただだよ』

「へえーと言うことは貴方があの緋凶つてことなのね」

『幽々子は…なるほどな、紫の友人か。弟子が世話になってるな』

「いえ〜こちらこそお世話になってるわ〜」

「ちよつと〜幽々子〜」

我、西行妖と死闘す

俺が白玉楼に来てから二週間が経とうとしていた。

何故紫が俺に幽々子を紹介したのか…俺はよくわからないままだった。俺が悩んでいると、紫が廊下を通っているのがわかったので、声をかけた。

『紫く』

「どうしたの？師匠」

『なんで俺に幽々子を紹介したんだ？』

「…これから言うことは幽々子には伝えないでね」

『なるほど、真剣な話なんだな。了解した』

「幽々子を紹介した理由はね？庭にある大きな桜の木があるでしょ？あれにある呪いのせいで死んでしまうかもしれないの。でも私の実力では救えない…だから師匠にお願いしたいのよ」

『……わかった。弟子の頼みだ。…どうやらあの桜の木には能力があるようだぜ？』

「本当に!？」

『ああ。って言ってもあの桜の下で死んだ人間のせいで、だけどな』

「…」

『あの桜の下で一番最初に死んだ奴は西行法師。幽々子の父親だ』

「ツ！そんなことが…」

『彼が死んだ後、何故か彼を慕っていた家臣たちは次々とあの桜の下で死んでいった。その時はまだ、あいつの能力は”死に誘う程度の能力”だった。だが、今のあいつは死を吸いすぎた。もはやあいは、”死”』

『そのものだ』

「そんなのって…」

『だが俺はあらゆるものを司っている絶対神だ。微塵の抵抗も許さない』

「誰も被害を出さずに勝てる確率はどれくらいなの？」

『あいつの攻撃を少しでもかすったら死ぬ。そんな中、誰も死なない』

なんていくら俺でも無理だ』

「そんな…」

『だがそれは俺という存在が一つだった場合だ。あいにく俺は分身で
きるからな、やれるところまではやらせてもらおう』

「師匠…ありがとー!」

その時は俺らは気づいていなかった。隣の部屋に幽々子がいて、俺
らの話が聞こえていたことに。

「…」

〜2日後〜

俺は妖忌と庭を散歩していた。

『なんとも見事なものですな。流石妖忌殿が手入れをしただけはあ
る』

「いやはやお褒めに預かり光栄の至り。この景色は、先代、幽々子様のお
父上が気に入ってからっしやっただので、残しておきたいと思い、手入
れをしているんだ」

『…では妖忌殿は知っているか?幽々子の父親の死後について』

「…」

『野暮なことを聞いたな。忘れてくれ』

「いや、話しましょう。儂は知っていた。だが、誰にも言わないでい
た。緋凶殿になら話せましょう。」

『話さんでもいい。俺はこのことに関して全てを知っているからな』

「どこでそんな話を…」

『秘密だ。それよりも…あの桜の名前は西行妖か?』

「そうですね」

『西行妖の妖力が少しずつ高まってきている。俺はあれを封印するつ
もりだ。いいか?』

「そうしないとまた誰かが死ぬというのであれば、ぜひやってくれ」
『了解した』